社団法人 米沢有為会々誌

日本美術院同人　福王寺一彦 《三日月》

創立120周年記念特集号
復 刊 第 59号

平成21年12月

登録商標第1457084号

米沢牛販売店

日本橋　　日　山

日本橋　日山本店	中央区日本橋人形町２－５－１	TEL０３（３６６６）５２５７
すき焼き割烹　日山（予約が必要です）	中央区日本橋人形町２－５－１	TEL０３（３６６６）２９０１
日山　横浜店	横浜市西区南幸１－５－１　相鉄ジョイナス内Ｂ１	TEL０４５（３２１）６６４９
日山　亀戸店	江東区亀戸５－１－１　亀戸駅ビルアトレ内Ｂ１	TEL０３（３６３８）１１２９

米沢牛銘柄推進協議会　　米沢牛出荷組合
山形おきたま農業協同組合

社団法人 米沢有為会々誌

復刊第59号

再興第九十四回院展（平成二十一年） 三日月 （同人）福王寺一彦
額とも 241×241

福王寺　一　彦

昭和三十年東京都三鷹市生まれ。小学入学前から父法林の絵の具溶きの手伝いをし、植物のデッサンをしたり簡単な日本画を描くなど、幼少時から日本画に親しむ。昭和四十九年、成城学園高等学校卒業を機に、父福王寺法林に師事し、本格的な日本画を始める。昭和五十三年再興第六十三回日本美術院展覧会（院展）に「追母影」が初入選。以後、毎年追母影シリーズを出品。昭和六十年出品した「追母影（十一）星華」第七十回院展で奨励賞受賞。昭和六十三年第七十三回院展に「月、出づる頃」を出品、日本美術院賞（大観賞）を受賞。平成四年「農耕の民」が平成三年度文化庁買上優秀美術作品に選考される。日本美術院招待に推挙される。平成八年第八十一回院展に「蛍（二）」を出品、文部大臣賞を受賞。平成十年第八十三回院展に「月の耀く夜に」を出品、内閣総理大臣賞を受賞。平成十二年日本美術院評議員に選任される。平成十三年「月の耀く夜に（三）」が平成十二年度第五十七回日本美術院賞に選考される。米沢市の置賜文化ホールの緞帳「月映る頃」が制作される。第九十四回院展で「三日月」を発表。日本美術院同人・評議員。日本美術家連盟常任理事。

目次

歴代会長顔写真 …… 6
米沢有為会創立百二十周年記念グラビア …… 8
記念式典・記念事業・記念講演
祝賀会・チャリティふるさと展
祝　辞 …… 名誉会長　上杉邦憲 …… 16
名誉会員　小幡常夫 …… 18
名誉会員　本間敏雄 …… 19
挨　拶 …… 会　長　下條泰生 …… 22
創立百二十周年記念事業 …… 25
記念式典式辞 …… 会　長　下條泰生 …… 26
祝　辞 …… 文部科学大臣　塩谷　立氏 …… 28
祝　辞 …… 山形県知事　吉村美栄子氏 …… 29
祝　辞 …… 米沢市長　安部三十郎氏 …… 31
産業功労賞受賞記念講演
米沢から世界に発信する有機EL産業の未来 …… 山形大学大学院教授　城戸淳二氏 …… 33
創立百二十周年記念催事・祝賀会 …… 42
創立百二十周年記念講演 …… 上杉邦憲 …… 44
創立百二十周年記念ふるさとおきたまチャリティ美術展 …… 49

創立百二十周年記念寄宿舎改修
東京興譲館寮 …… 50
仙台興譲館寮 …… 52
興譲館寄宿舎開設百周年記念
興譲館寄宿舎百年の歩み …… 山宮　光雄 53
各興譲館寮の歴代館長 …… 65
興譲館寄宿舎開設百周年に当って …… 大関　修敬 68
寮生活の思い出など寄稿
米沢有為会に思う …… 小森　力雄 70
東京興譲館時代の思い出 …… 大石　道夫 72
東京興譲館の思い出 …… 山田　幸生 74
東京興譲館寄宿舎時代の思い出 …… 相馬茂一郎 76
東京興譲館のこと …… 桜井　敏 79
東京興譲館の思い出 …… 平山　和博 81
東京興譲館寮のこと …… 手塚　修 83
仙台興譲館の想い出 …… 小幡　常夫 84
仙台興譲館時代の思い出 …… 西村　純 85
角五郎丁追想 …… 今野　多助 87
文学に酔い借家に泣いた寮の思い出
…… 伊藤　和夫 89
「縁」の兜 …… 亀岡　祐一 90
「八年間」の在寮期間 …… 四釜　淳悟 92
憧れの「北の大地」での出発点
…… 上野(高橋)和子 93
山形興譲館寮の思い出 …… 雨田　秀人 96
奨学金貸与制度創設九十八周年記念
奨学金貸与事業の歩み(抄) …… 大滝　則忠 98
米沢有為会百二十周年にあたって
…… 加納　和子 110
米沢有為会奨学生制度への提言
…… 奨学生OB・OG会 111
ゆるりと参ろう …… 金藤　泰伸 115
本部活動報告
定時総会及び付帯催事に関する報告 …… 116

本部各部門の主要活動報告……121
寄宿舎・奨学制度利用者の推移……128
奨学生「私の志」……129
支部だより
東京支部……134
米沢支部……138
仙台支部……143
京都支部……146
北海道支部……148
興譲館寮だより
東京興譲館……150
仙台興譲館……153
我妻榮記念館だより……155
置賜市町だより
米沢市……157
長井市……163
南陽市……166
高畠町……171
川西町……174
小国町……177
白鷹町……180
飯豊町……182
トピックス
街中キャンパスの開設……185
兼続の盟友　前田慶次……189
会員の広場……194
役員・賛助会員名簿……198
米沢有為会年表……208
米沢有為会定款・規則集……215
本部・各支部事務所等所在地……237
編集後記……238
広　告……239

歴代会長

初代会長
千坂高雅

明治31年8月～同33年8月

第二代会長
小森沢長政

明治33年8月～同40年8月

第三代会長
平田東助

明治40年8月～大正10年11月

第四代会長
山下源太郎

大正10年12月～昭和6年2月

第五代会長
宇佐美勝夫

昭和6年8月～同17年12月

第六代会長
結城豊太郎

昭和18年5月～同24年

第七代会長
相田岩夫

昭和24年5月～同38年8月

第八代会長
宇佐美　洵

昭和38年8月～同50年8月

第九代会長
加藤八郎

昭和50年8月～同54年6月

第十代会長
千葉源藏

昭和54年6月～同63年9月

第十一代会長
小幡常夫

昭和63年9月～平成10年4月

第十二代会長
本間敏雄

平成10年4月～平成15年9月

現会長
下條泰生

平成15年10月～

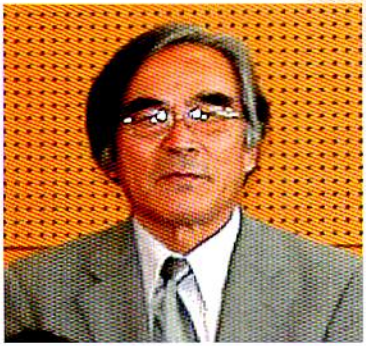
社団法人 米沢有為会 創立120周年記念祝賀会

― 寄宿舎興譲館開設100周年・奨学金制度98周年 ―

祝賀会セレモニー

下條泰生 会長

上杉邦憲 名誉会長



須貝英雄 副会長

安部三十郎 米沢市長

鈴木脩二 実行委員長

情野文男 東京支部長

大関修啓 OB会長

加納和子
OB・OG会長

感謝状受賞 曽根伸良 氏

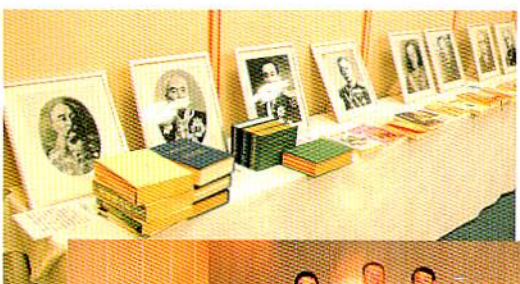
先人顕彰 花束贈呈

感謝状贈呈

中條 仁 氏（外に小関 薫氏、鈴木脩二氏受賞）

会場全体

祝賀会セレモニー 参会者



歴代会長パネル展

名誉会長、会長、副会長、理事の皆さん

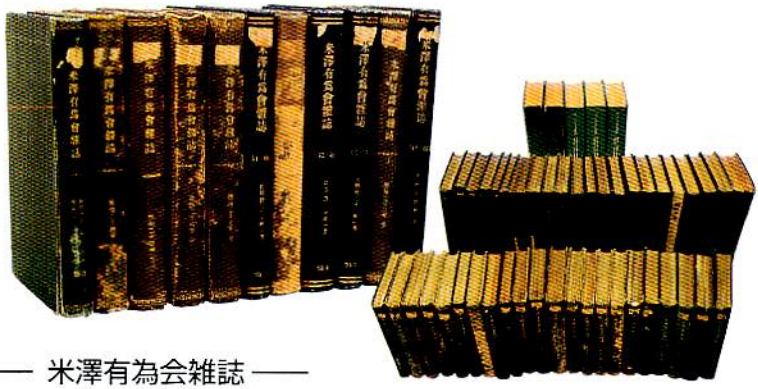
東京興讓館寮生達

祝宴

先人顕彰の儀

歴代会長ご子孫の皆様

おきたまふるさと展（チャリティー）



—— 米澤有為会雑誌 ——

祝辞

名誉会長　上杉邦憲

米沢有為会会誌百二十周年記念号の発刊にあたり、一言祝辞を述べさせていただきます。

あらためて申すまでも無く、伊東忠太始め若き在京学生六氏が、郷土愛を土台に相互の親睦と切磋琢磨を目的として共存共栄をはかろうとして米沢有為会を発足させたのは、米沢が全国のトップを切って市制施行したのと同じ明治二十二年（一八八九）のことでありました。

そして現在、本会の目的は、定款第三条に「米沢地方人の育英事業を行い、知徳を研磨し、身体を鍛練し、親睦を厚くし、その他米沢地方の福利を図る」と述べている通り、郷土出身者の育英を真っ先に挙げていますが、設立当初の主目的は育英事業というより、同郷諸氏と共に、学術・思想の道を長短相補って進んでいこうとするものであり、事実、寄宿舎を建てたのは二十年後の明治四十二年（一九〇九）、学費の貸与制度を始めたのは明治四十四年（一九一一）と伺っています。

この明治四十二年には直江兼続所縁の禅林文庫のあった法泉寺（旧禅林寺）に米沢図書館が

開設されており、本年、有為会の寄宿舎が図書館と同じく創設百年の節目の年を迎えるのは、学問を修め、人を育てるという兼続や鷹山公以来の伝統を考えると、決して偶然のことではないように思います。

有為会と米沢図書館との更なる共通点として、図書館は松山亮ら（有為会と奇しくも同じ）六氏が中心となって、市内有志から募金を集め、財団法人米沢図書館として民間の力で開設されたということが挙げられます。即ち、下條会長の言われるように我が有為会も図書館も「NPO以前のNPO」としての発足・活動という点に大きな特長が有ったわけです。

図書館は昭和十三年（一九三八）に市立米沢図書館となりますが、一方有為会は、戦時中の中断があったとはいえ、今日に至るまで公益団体としてその基盤を専ら会員諸氏のボランティア活動に頼り、本年ここに満百二十歳の記念すべき年を迎えられました。これもひとえに明治の先達以来現在に至るまでの会員の皆様方の並々ならぬご尽力の賜物と、あらためて深甚の敬意を表する次第です。

昨今、公益法人の見直しが言われるなど有為会を取り巻く環境も厳しいものが有りますが、会員の皆様のご協力により、本会が益々活性化し発展することを心より願ってお祝いのご挨拶と致します。

有為会の想い出

名誉会員　小　幡　常　夫

私は若年で本部理事に任命され、東京興譲館長・東京支部長・本部組織部長・本部副会長等を歴任し、昭和六十三年には会長をお引受けすることになりました。実は私が旧制山形高等学校・東北帝国大学の六年間、有為会奨学資金貸与生としてお世話になり、その御恩返しの意味で会務に精進して来たのでありまして、如何なる職務も、常に黒衣（くろこ）の心を胸に持って務めて参りました。その中で今でも忘れ難い想い出があります。千葉源蔵さん・加勢忠雄さん・小幡常夫の若手三役員の結合であります。お互いは、有為会の再興、名誉ある発展を胸に、一致団結して会務を推進し、結果として宇佐美会長のお役に立つことが出来ました。あの頃を振り返って見ると今でも心が暖まる感が致します。我が有為会は今や見事な社団法人であり、その功績は偉大なものがあります。ここ迄仕上げて来れたのは、歴代の役員の方々が、一致団結して会務に精進された献身力のお蔭でありまして、心から敬意を表したいと存じます。そして本会のますますの御発展を祈念して私の想い出を終わります。

米沢有為会百二十周年を祝して

名誉会員　本間敏雄

祝賀会に参加し、感無量の境地になりました。思い起こせば昭和十年暮れに、南雲忠一殿（海軍大将）が来訪され、私に対して、機屋（はたや）の仕事を姉養子に任せて、東大に進学し海軍航空技術依託学生の試験を受けなさいと云われ、紹介状をいただきました。

当時私は、米沢工業学校染織科二年（十四歳）の若蔵でしたので仰天してしまいました。その時私は、アメリカと戦争するのですか、と質問しますと、側にいて今迄何も云わなかった父親が突然前に出て来て、私を怒り、南雲殿に謝り、私も謝りました。

その後、紹介状を持参して艦政本部新見政義殿（海軍中将）に面談すると、工業学校を卒業し、米沢高等工業学校に進学して大検を取得後、東大か京大を受けなさい、その他の大学はだめですよ、と云われました。

然るに、昭和十七年には、東大は二次募集がありませんでしたので京大に入学し、その後、私の強い決意によって陸軍航空技術依託学生試験に合格し、海軍を受けませんでした。それで

新見政義殿に大変なお叱りを受けて顔向けが出来ないようなことになりました。

昭和十九年十二月、京大を卒業すると同時に、陸軍航空技術中尉に任官し陸軍航空工廠企画部配属となり、航空戦略をやらせていただきましたが、昭和二十年八月、終戦となりました。昭和二十年十月、米沢織物会社に入社致し、東京支店長として金融販売担当を命じられ、早速、事務所と社員の雇い入れを行いました。

金融に就いては、相田岩夫殿(大蔵省銀行局長・理財局長)と御一緒して三菱銀行小笠原頭取に面談、今後の事業計画をご説明して二千万円の融資に就いての快諾をいただき、更に、東京銀行浜口頭取に面談して二千万円借入に成功致しました。

尚又、池田成彬殿(大蔵大臣日銀総裁)大磯邸に伺いまして、内外の政治経済問題を勉強しました。

又更に、吉田茂殿(総理大臣)の大磯邸に池田殿ご一緒で毎月一回参上することとなり、大変多くの政治家と共に勉強致しました。

昭和二十二年十一月、室町にビル(日銀筋向い)を購入致し、屋上に会議室を増設しました。翌、昭和二十三年より有為会の会議室として利用し、相田会長を始めとして、宇佐美理事、加藤理事、加勢理事、北村理事等の会合を毎月やるようになり、東京や仙台の興譲館の再建並びに会員名簿の作成、新入会員募集、有為会会誌の復刊の為、よく働きました。

昭和二十二年、旭化成工業会社東京支店に参上し、新見政義殿に面談致し謝りましたが、私の決意に対し非常に褒められました。

昭和二十八年、米沢織物会社倒産により辞任、第一通商に入社し、翌年、第一物産に合併となる。

昭和三十年、愛知公団に出向し、浜口総裁の下で秘書室長勤務を命じられました。

鳩山首相や次の岸首相に、毎月二回御報告の為、進藤副総裁や次の大津副総裁と参上しました。

首相や政府高官との会議を重ねるに従って、今迄、吉田首相や池田成彬殿との勉強会を沢山やったことが非常に役立ちました。

今後、有為会の運営に当って、もっと人作りに重点を置いてやっていただき、有為な人材の育成に貢献されるよう切望してやみません。

時々所感（完）

―「正義」小考―

会長　下條泰生

冒頭からトリビアな私事で恐縮だが、日中戦争の初期、軍神といわれた杉本五郎中佐が戦死する直前、吾子に遺した言葉がある。〝汝我を見んとようせば尊皇に生きよ。尊皇大義のあるところ常に我あり〟これを毎授業前に斉唱した。小学生の私には尊皇はわかるとしても大義とは何かはいまひとつわからなかった▼最近、森史郎著「作家と戦争―城山三郎と吉村昭」の書評（江上剛）を読む機会があった。若干引用すると〝城山三郎は「私を去り自己を無くすること」を説く軍神杉本中佐の「大義」を読み……海軍に入隊する。しかしこそは……非人間的な社会だった。大義に裏切られた城山は、作家として戦後の日本人が無くした無私の精神すなわち大義を追求し続けるという信念を突き通す〟のだが、杉本中佐が死を前に、そして城山が生涯かけて追求した「大義」により実現を目指した社会秩序とはなにか▼今年の大河ドラマ「天地人」の二つのテーマは謙信公の「義」と兼続公の「愛」である。謙信公の二大義戦―川中島合戦と長駆小田原までの関東出兵は、武田に追われた信濃の豪族村上、高遠、小笠原等の、また北条に追われた関東管領上杉憲政の領土回復の要請によるもので、そこに一片の領土欲もないことは更科八幡宮や彌彦神社への謙信公の願文に明らかである。謙信公にとって出兵は不公正の是正と均衡すなわち「義」の実現であった。しかし「義」によりいかなる秩序を求められたのであろうか。

ノーベル経済学賞のアルマティ・センハーバード大教授が〝数学・物理学から経済学に転じた理由には、幼い頃目撃した約三百万人の犠牲者を出したインド・ベンガル大飢饉に対する義憤があった。経済と経済学に対する彼の関心は、常にその義憤―換言すれば不正義に抗する視点―によって裏付けられていた……貧困状態に陥った

人々の出現は、アンフェアな取引や物流システム……による帰結〟（後藤玲子編著「福祉と正義」から引用）であり、それは社会的選択の自由のないいまの貧困社会に通底する。最低限のシビルミニマムの確保こそが社会的公正であろう。その上に公正競争と選択の自由があるところに正義がある。▼グリーンリィテラシーの指針は「グリーン購入十原則」である。地球環境に配慮した政策・企業・サービス・商品を選択する基準を示す。一杯のコーヒーの生産者取り分二～三％はそのフェアトレードの原則に反する。これに類するアンフェア取引は農水産物、家具、雑貨その他にも多く見られ、生産国の貧困は南北の不均衡をつくり出し自力救済によるテロや海賊を生む▼イランのアフマディネジャド大統領が貧困層に人気が高いといわれるのは、イスラムの理念である「社会の公正」を実現する経済政策によるものであるという。経済は経世済民である▼ケインズ経済学がいままた復活しているが、ケインズは経済効率と政治的自由、社会正義の三つを調和させる規制と調和をもつ強力な国際機関設立を考えていた。来年発効するEU新条約（リスボン条約）は、民族や歴史・文化・宗教の差異を超えた大欧州を目指そうとしている▼一国行動主義に反対しイラク戦争回避で名を高めた仏前首相ドミニク・ドビルパンが朝日新聞のインタビューで、〟五世紀にわたり欧米が支配した世界の権力秩序……は新興国の台頭で根本的に変わりつつある。その中で共存のための新しい世界秩序の理念はなにか。私は「正義」であるべきだと考える。不正義は暴力の源、テロの背景となる……苦しむ人々について知り不正義に気づくことが変化につながる〟と▼公正公平・共存という「正義」の普遍的価値の実現は時代背景により若干異なるが、謙信公にあっては朝廷の権威の再確立と室町幕府の権力秩序の再構築に、杉本中佐にあっては公平無私、一視同仁の天皇制秩序の護持を志向するものであろうか。

今年施行された裁判員裁判につき法務省は〟重大犯罪ほど主権者である国民に社会主義を回復してもらう意義がある〟と説明している。司法の正義は原状回復・被害の回復にある。左手に善意の「裁きの天秤」、右手に破邪の剣をもち、公平無私な裁きのしるしとして目隠しをしている正義の女神―テーミスは正義と秩序を守るギリシャ神話の守護神とされてきた。司法に限らず、いまほど世代内正義―教育・所得格差等の是正と世代間正義―現世代と次世代との年金格差と環境へのつけ廻しの

是正と均衡を求められているときはない。▼日本国憲法前文の「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼しわれらの安全と生存を保持しようと決意し」第九条の「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求」が望まれる時代はいまにある。

今年の読書界でロングテールで売れた本の一つに堂目卓雄阪大教授著「アダム・スミス」がある。「国富論」の他スミスのもう一つの著作「道徳感情論」に焦点を当て堂目氏は、他者への同感を社会秩序の要と説き最下層の人々の幸福を念頭に〝公正競争が行われるなら社会の秩序は維持され……「見えざる手」に導かれ繁栄する……スミスが容認したのは正義感によって制御された野心である。〟そのためには各人の胸中にフェアプレイの精神を具象化した「公平な観察者」を求め、それに従うことが「徳の道」と「財産の道」を同時に歩むことであると堂目氏は述べる▼心の中の「公平な観察者」はビジネスにおける正義の守護神であるように、謙信公は出陣前毘沙門堂に籠り毘沙門像に、その判断に私心なきことその行動が正義にもとづくものであることを誓われ「毘」と「義」の旗印を高く掲げ出陣されたのである。

正義の根底には、他者の置かれた立場への共感や他者をあるべき居場所にあらしめる「愛」がある。共存がないところに正義はない。「興譲」は共存に通底する▼鎌倉市民フォーラム代表渡辺光子氏の著書「市民力を活す」の中で有為会へのインタビューは本に任せるとして、〝ＮＰＯに参加した人はみんな自分のためでなく、どの人も「他」―自然や差別された人のためにやっている。それは他への共感力というものである。自分が住んでいる地域社会での環境破壊や不公正・差別の課題を解決すべく実践するのが市民力である。つまりＮＰＯは正義の担い手である。〟としている。▼正義の要件が無私・公平公正そして均衡とすれば、それはまさに「公」を構成するものである。ＮＰＯ・ＮＧＯや新しい公益認定法人の数が多ければ多いほど、官＝公、中央＝公に代る新しい「公」の秩序形成が早くなる。それは「金銭的利益」ではなく「社会的利益」を重視する「公益空間」である。米沢有為会は百二十年間社会的利益に貢献してきたし、これからも「義」と「愛」を体現する団体として、二十一世紀における社会的利益の形成を目指し努力し続けてゆきたいものである。

以上

社団法人 米沢有為会創立百二十周年

記念式典

期日：平成二十一年六月二十八日（日）
午後三時十五分より

場所：「伝国の杜」大会議室

明治二十二年創立以来百二十周年を迎えた今年、一二〇回総会終了後記念式典が厳粛に挙行されました。進行を米沢支部鈴木幸一常務理事が担当し、開式の辞を米沢支部梅津幸保副支部長が述べました。式典には一〇〇名ほどの参会者があり、下條泰生会長から式辞（別紙）、山形県吉村美栄子知事代理置賜総合支庁長と安部三十郎米沢市長から祝辞をいただきました。また文部科学大臣からお祝いのメッセージがあり、須貝英雄副会長に読みあげていただきました。最後に米沢支部本多和彦副支部長が閉式の辞を述べ式典を終了しました。

式辞と祝辞、お祝いメッセージを掲載します。

式辞

会長　下條泰生

桜桃の候、ここに多くのご来賓のご来臨を頂き、㈳米沢有為会創立百二十周年記念式典を挙行いたしますことは、本会会員均しく慶びとするところであります。

顧みますれば、島国日本の黎明期明治二十二年、一八八九年、郷土のため、ひいては日本の為、有用な人材育成を志した伊東忠太先生を始めとする五人の創始者が相集い本会は設立されました。爾来、明治・大正・昭和・平成の四時代、十九世紀・二十世紀・二十一世紀の三世紀を閲(けみ)し、変転窮まりないこの間、本会は一貫して絶えることなくその事業を受け継ぎ、興譲館寮生ＯＢ千三百名余、奨学金生ＯＢ・ＯＧ三百名余の多きを輩出し、その他多くの郷土の教育・産業功労者の表彰に加え、いまや法曹界のメモリアルとなった我妻記念館の運営を行うなど、社会・公益に些かなりとも貢献し、先人の志を実現できましたことは、世に比類なきことであり、我々千二百余名の会員全員の誇りとするところであります。

これは創始者ご恩寵、更に上杉家のご温情に加え、百二十年間に及ぶ歴代会員のご努力と米沢市並びに市民の方々のご支援なしには、本会事業の成果そして本日の有為会百二十周年はあり得ないのであります。

ここに改めて多くの方々、そして物故された歴代会員各霊位に心からなる感謝の意を捧げるものであります。

日本は今、再びスタートラインに立っております。しかしながら明治時代と異なり、昨今の所得格差による教育格差は拡大し、興国のエネルギーが失われつつあります。この時にあたり本会の存在理由は大なるものがあります。

本会会員一同、報恩の念を忘れることなく、次世代にこの誇れる事業を継承することをここに改めてお誓い申し上げるものです。

いま本会は社団法人として百年に一度の民法改正による公益法人制度改革に直面いたしております。また、開設百年の東京興譲館寮及び仙台興譲館寮施設の老朽化は著しいものがあり、百二十周年の記念事業としてその大改修工事と奨学金制度の拡充をいたしたいと存じます。これらの記念事業は会員皆様のご協賛なくしては達成できないものであります。

多事多端の現下、甚だ心苦しいことでございますが、ご支援のほど伏してお願い申し上げる次第です。なお、米沢市より記念事業に多額なご援助をいただきましたこと、この場をお借りいたしましてご報告申し上げ、厚く厚くお礼を申し上げる次第でございます。

終りに、歴代会員各霊位のご加護の下に米沢有為会の長への発展と御来賓各位及び会員皆様並びにご家族の御健勝とご成功を心から念じ、お祈り申し上げ式辞といたします。

式辞を述べる下條会長

祝　辞

文部科学大臣　塩谷立

このたび米沢有為会が明治二十二年に発祥以来、社団法人米沢有為会としてここに百二十周年の大慶事を迎えられましたこと、誠におめでたく心からお祝い申し上げます。

とりわけ、創設から今日まで、学生の奨学、育英を柱に郷土の文化、福利、産業振興の事業を会員の献身的な奉仕活動によって運営されるなど、類に稀な実績を讃え、栄光の歴史に深甚の敬意を表します。

今後とも貴重な伝統を継承され、我が国の育英事業の模範的な法人として、益々の発展を祈念申し上げます。

お祝いメッセージ

山形県知事　吉　村　美栄子

社団法人米沢有為会創立百二十周年記念式典の開催、誠におめでとうございます。皆様におかれましては、山形県勢の発展のため日頃から格別の御支援、御協力を賜り、深く感謝申し上げます。

私は、県民の方々との対話を大切にする「心の通う温かい県政」を進め、「赤ちゃんから長寿の方まで生き生きと暮らし、活力溢れる山形県」を実現するために、県政に精一杯取り組んでおります。

県政運営の基本としましては、①県民と同じ目線で常に県民のことを第一に考えること、②現場の声に真摯に耳を傾け、現場の力を最大限に生かすこと、③市町村の特色や裁量を生かした取組みを後押しすること、の三つの姿勢をもつことが大切だと考えております。こうした「対話」を大切にする基本姿勢を踏まえながら、さらに魅力溢れた山形県にするために、特に「産業」、「農業」、「医療、福祉、子育て」そして「教育」の四つの分野に重点的に取り組んで参りたいと考えております。

米沢有為会におかれましては、郷土を愛し相互の親睦を目的として創立され、奨学金の貸与や東京・仙台の寄宿舎「興譲館」の設置などの育英事業、また教育・産業振興に功績のあった方々への顕彰事業、さらには我妻榮先生の生家を「我妻榮記念館」として運営されるなど、積極的に事業を展開され、明治

二十二年の創立以来、大正、昭和、平成と四つの時代にわたって、多くの有為なる米沢人の育成・発展に御尽力されてきましたことに対し、心から敬意を表しますとともに、関係各位の御労苦に対し、重ねて感謝を申し上げたいと思います。

いま、山形県は全国から注目を集めております。ここ米沢ゆかりの「直江兼続公」が主人公のＮＨＫ大河ドラマ「天地人」が現在放送されています。サッカーＪリーグでは「モンテディオ山形」、映画ではアカデミー賞外国語映画賞を受賞した「おくりびと」、さらに、山形県の新しいお米「つや姫」が、今年秋には先行販売、そして来年秋には全国へ向けて本格デビューいたします。このような、様々な山形県への「追い風」を好機ととらえ「山形の魅力」を全国に向けて積極的にＰＲしていきたいと考えておりますので、皆様にも是非、御支援、御協力いただきますようお願い申し上げます。

結びになりましたが、貴会のますますの御発展と、御参会の皆様の御健勝を御祈念申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

山形県知事祝辞（置賜総合支庁長）

時を越える志

米沢市長　安部三十郎

米沢有為会が創立百二十周年を迎えました。今日までの会員各位のご努力に深く敬意を表します。この記念すべき節目にＮＨＫでは大河ドラマ「天地人」が放送され、全国の注目が上杉氏や米沢地方に向けられているのは、奇しき巡り合わせであり、本当に有難いことです。

さて、フランスに「洪水はわが亡き後に来たれ」という有名な言葉があります。これは国王ルイ十五世と親しかったさる侯爵夫人が述べたものとされています。庶民の大きな犠牲の上に王侯貴族が贅沢三昧の生活を送っていることから、聖書にある神罰（世の中の全てを流し去る大洪水）の下ることを恐れた侯爵夫人は、洪水は自分の死後に来て欲しいと願いました。すなわち、自分が生きている間さえよければという意味です。

ルイ十五世や侯爵夫人と同じ時代に、この言葉と正反対の教えを残した日本人がいます。上杉鷹山です。有名な「伝国の辞」に、国（藩）は先祖から子孫へ伝えるべきもので、藩主が私物化してはならないとあります。これは時代、立場を越えた普遍の真理を有しています。社会は先祖・先輩の努力の上に、私たちがさらなる努力を重ねて良いものにし、後輩・子孫に渡さなければなりません。世の中を、決してわが身一代限りの栄華と考えるべきではありません。

直江兼続が開設した図書館・学問所の「禅林文庫」によって興された好学の気風、人材育成の思想は、

四代藩主上杉綱憲の学問所、九代藩主鷹山の藩校へと引き継がれ、この流れは明治二十二年の伊東忠太らによる米沢有為会の結成にもつながっていると思われます。

有為会は東京、仙台、札幌、山形に大学生のための寄宿舎を設け、奨学金の給付を行い、次世代育成の事業を営々と続けてきました。正によりよき社会づくりの世代間リレー、駅伝です。常に設立の初心に立ち返り、さらなる発展を遂げるべく、会員各位のご協力をお願い申し上げます。

祝辞を述べる米沢市長

産業功労賞
受賞

記念講演

演題　米沢から世界に発信する有機ＥＬ産業の未来

山形大学大学院理工学研究科教授
有機エレクトロニクス研究所所長　城戸淳二氏

日時　平成二十一年六月二八日(日)　午後四時から
会場　「伝国の杜」二階　大会議室

《講師略歴》

昭和三十四年、大阪府東大阪市に生まれる。
昭和五十九年、早稲田大学理工学部応用化学科卒業。
平成元年、米国ポリテクニック大学大学院博士課程を修了。
平成元年、山形大学工学部高分子化学科に助手として赴任。
平成五年、世界初の「白色発光有機ＥＬ素子」の開発に成功。
平成十四年から始まった経済産業省・ＮＥＤＯによる有機ＥＬ国家プロジェクト「高効率有機デバイスの開発」のプロジェクト研究総括責任者。
平成十五年から、有機エレクトロニクス研究所所長。
有機ＥＬの研究開発の第一人者として教鞭を執る傍ら、複数の産学官のプロジェクトのリーダーを務め、有機ＥＬの事業化を推進する中心的役割を果たされている。
米国情報ディスプレイ学会特別功績賞受賞など、受賞多数。

《講演要旨》

先程は、素晴らしい賞をいただきましてありがとうございます。そして、本会の百二十周年、誠におめでとうございます。

有機ＥＬについては、これまでいろんな所で話をさせてもらっていますが、今日はあまり専門的になり過ぎないようにお話をさせていただきます。

まず、有機ＥＬ、これは有機物を電気で光らせるということで、小学生くらいの子供たちには「人口の蛍や」と教えています。「蛍の光」は天然の有機の光ですが、ノーベル賞を受賞された下村先生が研究された「おわんクラゲ」、これも有機の光です。実際には蛍やクラゲの細胞の中で化学反応を起こして化学エネルギーを光エネ

ルギーに変換しています。有機ＥＬというのは同じ有機物を使って電気エネルギーを光に変えます。光に変える媒体が有機物ということで同じなのです。

ポリエチレンは電気を通さないことは皆さんご存知かと思いますが、ポリアセチレンというのは電気が流れるのです。それはキラキラして金属箔のようですがプラスチックなんです。これをちょっと構造を変えると実は光ります。ですから半導体の性質を持っていてしかも光ります。それに電気を流せば光るんではないかというのが最初の発想です。我々の光るプラスチックと電気が流れるプラスチック、構造が非常に似ています。

十年前の一九九九年に、山形大学主催で機能性高分子の国際会議を米沢の第一ホテルで開催しました。米沢市さん始め、山形県ほか多数の方々からご支援をいただいたのですが、そのお願いの際、世界中からノーベル賞級の科学者を十数人呼ぶぞと前宣伝をしておりました。ところが来ていただいた世界トップレベルの研究者十七人のうちのお二人、マクダイアミッド先生とヒーガー先生が、翌年、本当にノーベル賞を受賞されたのです。その会議後の懇親会で、大学院生たちが先生方と記念写真を撮りまくっていたのですが、その先生方がノーベル賞を受賞されたと聞いて、その記念写真を「家宝」にすると言っていました。

有機ＥＬはフィルムに造り込みますとペロペロのものができます。電球や蛍光灯など今の光源は非常に硬いので、災害時などには割れて床に散らばるなど非常に危険ですが、こういったプラスチック状の照明ならば安全です。

有機ＥＬの研究が始まって実用化に向けて日本国内の研究者たちが一生懸命やり始めた頃、八十九年（平成元年）に私がちょうどたまたま山大に来ました。コダック社が論文を発表したのが八十七年で、十年後の九十七年に車載用の緑一色のディスプレイが製品化されています。これが実は東北パイオニアの米沢工場で世界で初めて実用化されたのです。有機半導体という新しい技術を、東北の、山形の、しかも米沢の一工場が実用化に成功した、これはすごいことなんです。車載用のディスプレイとして見易く非常に評判が良くて、二〇〇〇年から

量産が始まり、携帯電話やカーオーディオに搭載され、どんどん大きくなってきています。今一番大きいのがソニーのテレビで十一インチです。有機ＥＬテレビは画像がすごく綺麗で非常に薄いのですが、この十一インチで二十万円します。今、三七インチの液晶テレビが四～五万円で買える時代ですが、液晶テレビも初期の頃は高額でした。量産技術が向上して安くなったのです。有機ＥＬテレビの部品数は非常に少ないので、理論上、液晶の三分の二から二分の一のコストでできると言われています。将来的には液晶を駆逐すると私は信じています。

我々が思い描く将来のテレビは何かと言うと、基本的にはテレビはもっと大きくなっていき、しかも安くなります。多分、十年後、皆さんの家には一〇〇インチから一二〇インチのテレビが入ると思います。しかも八万円くらいで。今、一〇〇インチのプラズマテレビは一トン近い重さです。いくら安くなったとしても、家に持ち帰れないしマンションのエレベーターにも乗らない、そういう問題があります。テレビは、最終的には丸められるようにならなければならない。それが実現できるのは有機ＥＬしかありません。今、値段が少し高いですが、是非ともソニーの有機ＥＬテレビを買っていただいてご支援をいただければと思います。

次に照明の話ですが、白く光らせることは研究が始まって数年間誰も出来ませんでした。何故かと言うと、合成して造り出す物質、白く光るものは無いのです。太陽光は分解すると七色に分かれます。それが合わさって白く見えるのです。赤や青や緑を出すのは簡単ですが白を出すのは難しいのです。私がやったのは、いろんな色を混ぜて白く光らせるという単純なことです。当時、それでは出来ないというのが常識でした。ところが出来たのです。常識と言われていることでも常識と思わずに、とにかくやってみたれ、という心意気が重要なのではないかと思います。

混ぜて光らせたので今度は重ねて光らそうと考えました。地方大学で自分自身何ができるかと考えた時に、オリジナリティが重要だと思い、白を追及していった訳です。赤青緑を薄く重ねていって光らせる、単純な方法ですが、この方法を使っていろんなメーカーさんが白を作られています。この研究成果が、学術誌の「サイエンス」に掲載されました。また、これが将来的に照明に使うことが出来るかも知れないということで、一九九五年、ウォールストリートジャーナルというアメリカの経済誌に私の顔写真入りで紹介されました。そして「米沢」という町の名前も掲載されたのですが、多分、この経済誌

に「米沢」の名前が載るのはこれが最初で最後なのではと、そんな気がしてならないのです。―（会場笑）―そういう意味で、その年に米沢市から表彰されるかなと思っていたのですが、今回、ようやく表彰されて正直ホッとしました。―（会場爆笑）―

白色有機ＥＬの城戸ということで、随分注目されまして、照明やディスプレイメーカーさんとも共同研究させてもらい、パネルの性能も上がっていきました。有機ＥＬの特徴として、蛍光灯や電球と何が違うかというと、実は物の見え方が違う、太陽光に非常に近いのです。蛍光灯のもとで女性が化粧をして外に出ると化粧が赤っぽく見えてしまうし、蛍光灯のもとではリンゴが赤く見えませんが、有機ＥＬで照らすと、美味しそうなリンゴに見えるし、肉も赤々と美味しそうに見えます。商店やレストランで有機ＥＬ照明を使うと、いろいろメリットが大きいと思います。

同じ白でも作り方がいろいろあります。例えば、ハムサンドとレタスサンドと玉子サンドを重ねるように分厚くすると、同じ電流を流しても明るさが二倍になります。今まではディスプレイには使えましたが、物を照らすほど明るくはありません。物を照らすには明るさが十倍くらい必要ですが、この新しい方式でそれが可能になったのです。

ちょうどその頃、経済産業省のＮＥＤＯのプロジェクトを山形大学で実施するということで、県から、その成果を使って是非米沢を活性化してほしいと言われまして、七年間で四十三億円を出していただき、二〇〇三年から研究所がスタートしました。大学では、材料の開発などの基礎研究をやっていき、それを照明器具として実用化するのはこの研究所でやっていこうということで、県内の中小企業さんが参画されて、今、一緒に開発を進めています。

有機エレクトロニクスバレー構想というのは、大学の基礎研究があって、実用化研究を研究所で行っていく。もちろん大企業とも共同研究をし、いろんな成果が出てきたらベンチャーも創出し、量産技術を開発して工場も建てたい、そして最終的には地元の企業さんで照明器具を作ったりして、最後の最後に、いわゆ

るバレーになれば大企業が工場を建てたりしてくれるだろうという構想で、今から六、七年前に打ち立てたものです。

このバレー構想というのは日本全国にいろんな構想があります。例えば三重県のクリスタルバレー構想、液晶の産業を集積しようというものです。

三重県のクリスタルバレーと、山形の有機ＥＬバレーが、二〇〇四年の東洋経済誌で誘致の新技法として紹介されています。何が新しいかというと、三重県の場合は、県が百五十億円を補助してシャープの大型工場を亀山に誘致しました。一方、米沢の場合は、四十三億円という研究開発費をつけて自ら研究開発をして産業を生み出そうというもので、この二つはどこの県でもやっていない方法なのです。

一言でいえば、超大型の補助金型と技術開発型、表現を変えれば、大企業に頼る他力本願型と、自分で何かやろうという自力本願型と言えると思います。その後がありまして、二〇〇六年の東洋経済誌が、亀山がどうなったかを書いています。シャープの正社員が五百五十人、請負千百人、派遣七百人、計二千人を超える労働者のうち、三重県が期待した県内の新規正規採用は、たったの百三十人しかいないのです。今時の不況で、多くのブラジルの請負労働者が職を失っている状況です。ですから、大型工場を誘致すれば産業や町が活性化するのかというと、そうではないと言い切れると思います。

一方、アメリカでは、バレーと言えばカリフォルニアのシリコンバレーですが、これは国がバレーにしようと工場を誘致した訳ではなく、地元のスタンフォード大学やバークレイ大学の技術が基になってベンチャーが生まれ出してできたものです。アメリカはまだまだバレーを創ろうとしています。有名なのがニューヨークのナノテクバレーです。人口十万人くらいの街に、先ずニューヨーク州が百億か百五十億かけてナノテクの研究施設を建てました。数年後にはベンチャーが百社できていると聞いています。ですから、人口とかは関係なく、片田舎でもそこまで活性化できるのですね。しかしながら、未だに日本のバレー構想は企業誘致型です。今や企業の工場なんて言うのは、中国とかベトナムへ行ってしまう。今までは東北は人件費が安かったから来てましたが、もっと安い中国とかがありますから、わざわざ山形に工場を建てる意味がないのです。そして、未だに県民や市民レベルでは、企業誘致が街の活性化だと思っています。その辺から意識を変えていかなければいけないなと思っています。

研究所が出来て、かなり実用化の技術が完成しました。非常に大きな装置があるので、大学では出来ないような三十センチ角の大きなパネルも四年前くらいにできまして、メーカーさんと一緒に照明器具も開発しています。二年に一回、東京で開催されるライティングフェアにも照明器具を展示しています。

昨年開催された洞爺湖サミットで、日本企業五十社の省エネ技術やその製品が展示されました。ここで照明に使われたのが「made in 米沢」の有機EL照明です。世界中の記者が集まるなか、省エネの冷蔵庫や電子レンジ、エアコンなどが展示されていましたが、それらには誰も興味を示さずに、有機EL照明を指さして、これは一体何ですか?どこの誰が作ったのですか?と大いに注目され、山形県の米沢で作られた有機ELが世界中に報道されたのです。

照明の市場規模は国内一兆円弱くらいのマーケットがあります。日本では六割以上が蛍光灯で電球の利用は少ないのですが、電球は電力を食い過ぎるということで、日本でも二〇一二年から電球は発売しません。でも、これを蛍光灯に変えたとしてもほとんど省エネの効果は無いのです。むしろ、照らした物の見え方で、電球でなければならない用途が沢山あり、蛍光灯では出せないものがあるので、電球が使えなくなるというので困っている方が沢山います。

新しい会社を最初の構想の中から作ると言っていましたが、三菱重工と共同で研究していた有機ELの蒸着装置も完成したし、有機ELパネル自体の性能も実用化レベルに来たのだから、技術を持ち寄って最高のパネルを作ろうということで、昨年（二〇〇八年）五月に、三菱重工、凸版印刷、ローム、三井物産とで『ルミオテック』というパネルの製造会社を設立しました。

照明のパネルよりも照明器具の方が市場が大きいので、器具のところで県内企業に仕事をしてもらいたいと考えています。シャンデリアとかFライトを作ってもらったのは県内企業さんで、規模は小さいのですが技術力は高いのです。照明器具は何百億という投資を

しなくても職人技で作り上げられるものです。ですから米沢にとっては適していると思います。有機ＥＬ照明を扱う企業の集まり、「山形ギルド」と呼んでいますが、こういうものを形成していければなと思います。実際に照明器具を米沢で作っていこうということで「オーガニックライティング」という会社を今月（六月）一日に立ち上げました。これは個人の出資で出来ている会社です。パネルを作るとなると工場など大掛かりになり、数百億の資本が必要になりますが、県内企業を巻き込んでやっていくということで、この会社は、企画、デザイン、マーケティングをしていくというものです。ようやくルミオテックが新会社としてでき、ベンチャーとしての会社もできました。もう一つ、研究開発の会社を立ち上げようとしています。将来的には研究所にまでして、若い人が研究を出来る場を提供していければなと思います。

ここまで技術開発中心に、ずっと研究開発とか企業との共同研究をいろいろしてきて十年ほど経つのですが、ひとつ気になっているというか気がついたことがあります。

二十年前に、私がたまたま山大工学部に来ることとなった経緯ですが、私がアメリカにいた当時、早稲田の教授から下宿に電話がかかってきまして、山形大学にポストがあるから助手として行かないかと言われました。当時、私は、山形がどこにあるかもわからない状況で、そこで本当に研究が出来るのかなと正直不安でした。でも、恩師からの話なので従わざるを得ず山形に来たのでしたが、秋口で寒かったのを覚えています。大学に案内される時に近道の裏通りを行ったせいか、マンションもコンビニも見当たらず、これはエライところに来たなと思いました。天地人の与六じゃないですけど「こんなとこ来とうなかった」と思いましたが、しょうがない、最低でも三年間は必至で実験やったろと頑張ったのでした。もし、あの時、東大とか京大とか阪大の助手になっていたら、人生あがりやと思って、そんなに一生懸命実験しなかったかも知れませんね。ですから、今考えると、逆に、山大に来て良かったと思います。私が偶然ここに来なければ、有機ＥＬバレー構想なんか無かった訳です。有機ＥＬの「ゆ」の字も今、無い訳です。ですから、地域の活性化を偶然に頼っていてはいけないなと、そして、もし私が阪大とかに移ったらどうする、という話ですから。結局、人材育成をちゃんとやらなくてはいかん、と思うのです。米沢から、米沢のためにやってやろうという若い人を生み出すか、あるいは呼んでくるかを、システマチックにしなくてはいけないと思いまして、文部科

学省の関連団体である日本科学技術振興財団が行っている「サイエンスキャンプ」、これは春・夏・冬に、企業とか大学の研究室とかに高校生が十人とか二十人行きまして、二泊三日で研究なんかをやるものですが、これを五、六年前から引き受けています。高校生に実際にピカッと光るやつを作らせると、とても感動して帰ります。この「サイエンスキャンプ」に来たのがきっかけで山形大学に来て学んでいる学生もいます。科学の面白さは現場に来て装置を触って、研究者と触れ合うというのが重要だと思います。中学生を対象にした「ひらめき ときめき サイエンス」というのもやっています。米沢で生まれて育った人は山大工学部に来て、米沢で研究開発を続けて、何かベンチャーを生み出したりしていく、それが理想的だと思います。科学好きな子供に育てるには、中学生では遅くて小学生の頃から親しませる必要があるのではと思います。小学生には簡単な実験をやってもらいます。蛍の発光、人工的に本当に出来ます。液体を混ぜるとピカピカ光るので、子供たちはギャーギャー言って喜びます。また、レモンで電池も作ります。こういうことを体験すると、ああそうだったの液晶って、ああそうだったの電池って、自分たちでも出来るんじゃないか、そういう気持ちを持つ訳ですね。小学生で来たいと言う所は全部受け入れるようにしています。とにかく見てもらおう触ってもらおうということです。大学での受け入れだと年に百人二百人と限られるので、要請があれば、どこにでも出掛けて行くことにしています。北は青森から西は広島まで行きました。しかしながら、個人でやって行くには限界があるので、今年「有機ＥＬあかり塾」というＮＰＯ法人を立ち上げました。これは照明の技術屋さんたちに有機ＥＬを知ってもらうことや、子供たちに実験をしてもらうなど、私個人ではできないことをチームとしてシステマチックにやっていこうというものです。

最後になりますが、去年の九月に、名古屋の河合塾に行って、有機ＥＬの話をしてきました。若い学生風の人が、講演後、サインをしてくれと私のところに来て、「私、実はフリーターです。」というので、「お前、ちゃんと働かなあかんぞ」と励ましました。そのことをブログに書いたら、返事が返ってきました。以下、その内容です。

『講演会の翌日、先生のブログを見たら自分のことが書いてあったのでびっくりしました。教授という立場にある偉い先生が、フリーターである自分を馬鹿にもせず淡々とアドバイスをくださり、その文章を見たら目頭が自然と熱くなってしまいました。本当に嬉しかったで

す。自分はこつこつ勉強するのが昔から嫌いで、テスト前だけ勉強する典型的な受け身人間だったのです。アルバイトに精を出し、医学部を目指すも、現役、浪人共に一つの大学も受からない現実に、うつ症状でひきこもり状態になってしまいました。そんな無気力に日々を過ごす中、インターネットで先生のブログを発見し、毎日覗くようになりました。先生が有機ＥＬを熱心に研究されているのを知り、昔、自分もモノづくりが好きだったんだなあということを思い出しました。毎日読んでいくうち、別のサイトで、先生が河合塾に来られることを知り、講演を聞きに来たのでした。話をされた有機ＥＬの実物を見て、家の液晶テレビとは比べ物にならない程綺麗で且つ薄いということに思わず息を飲んでしまいました。先生は、好奇心、創造力、やる気、この三つが大切だと言われましたが、今後、この三つを頭に留め努力していきたいという気持ちが生まれました。一からのスタートですが、来年、山形大学の工学部を受験しようと思います。頑張ってみようと思う気持ちになれたのも先生のおかげです。ありがとうございました。』（内容要約）

その後、今年の二月に、出張のため米沢駅に行きましたら、ある若者が近づいてきて「先生お早うございます。」と言うのです。何と、それはあのフリーターの若者で、本当に山形大学を受験しに米沢に来ていたのでした。

そして一カ月後くらいに、彼から『合格しました！』というメールをもらったのです。私は、本当に良かったなあと思い、そして、私みたいな人間でもこんなに社会に貢献できることがあるんだなあと、私自身が力をもらった感じがしました。これからも自分がやれることは百二十％やっていこうと思います。

「米沢」という街を、「有機の明かりの灯る街」に是非ともしたいなと思いますし、また、皆さんの力をお借りして、なればいいなあと思っています。

これからも、ご支援どうぞよろしくお願いいたします。

城戸教授及び有機ＥＬに関する情報（ＵＲＬ）

山形大学工学部機能高分子工学科
http://polyweb.yz.yamagata-u.ac.jp/
山形大学工学部有機エレクトロニクス研究室
http://ckido8.yz.yamagata-u.ac.jpndex.html

創立百二十周年記念催事・祝賀会

・寄宿舎興譲館開設百周年・奨学金制度九十八周年

○日時　平成二十一年十一月十五日（日）
　　午後一時～八時

○会場　「都市センターホテル」東京都千代田区平河町

○催事・祝賀会プログラム

（1）「有為会歴史回顧展」
（2）「伊東忠太の功績を偲ぶＤＶＤ鑑賞会」
（3）「先人顕彰の儀」
（4）「記念講演」　講師　上杉邦憲　17代当主
（5）「記念祝賀会」
　　○セレモニー　○祝賀パーティー

●概況　東京支部会員を主体に米沢支部（三十名）、仙台支部（六名）、京都支部（一名）、北海道支部（一名）、興譲館舎生含め二百余名の参加者により盛会裡に挙行されました。

◇歴史回顧展では上杉家コーナー、歴代会長、各興譲館歴代館長の写真と略歴等、併せて有為会関連の図書等の展示が行われ、改めて百二十年継承の歴史を回顧することができました。

◇伊東忠太のＤＶＤ鑑賞会では、忠太博士の幼少時代から学生時代の知られざるドキュメントの影像と解説もあり、出席者に大きな感動をよびました。

◇先人顕彰の儀は、お招きした先人代表のご遺族ご臨席のもと、下條会長より顕彰の辞と黙祷が捧げられ、改めて先達への感謝のご挨拶があり、最後にご遺族の皆様にご先祖様への供花の贈呈が行われました。ご臨席の方は、上杉家ご親族代表の上杉邦憲夫人紀美子様、伊東忠太先生の次男祐信様のご長男・伊東祐満様（長野県北安曇）、千坂高雅初代会長縁戚の千坂精一様（東京都荻窪）、結城豊太郎第六代会長のご子孫・結城秀人様（南陽市赤湯）、相田岩夫第七代会長のご息女・大原　敏様（東京都西落合）、加藤八郎第九代会長のご長男・加藤晴一様（東京都西落合）のご来臨いただきました。今まで疎遠になっておりました歴代会長ゆかりのご親族をお招きできましたことに意義がありました。

◇記念講演は予定しておりました井上ひさし先生が体調良くなく、十一月になってから他の講演会がキャンセルのニュース（十一月三日　朝日新聞）あるも、先生からは有為会百二十周年記念講演には是非出演したいとのご意向の連絡もありましたが、開催日の

一週間前に体調快復せずの報、残念ながら断念せざるを得ませんでした。

急遽、上杉名誉会長に上杉家と有為会の絆にかかわるご講話をお願いすることになりました。演題は「第一義・戊辰戦争・有為会」でした。有為会百二十周年創立記念に相応しい内容で、上杉家第17代当主・上杉邦憲様のご講演は参加者に深い感銘をあたえました。

◇この後、今年六月の総会にて、長年務められて本部理事を勇退されました小関　薫、中條　仁、曽根伸良、鈴木脩二の新相談役に感謝状と記念品の授与が行われました。

◆祝賀会セレモニー

・開会の辞　情野文男　東京支部長
・祝賀挨拶　下條泰生　有為会会長
・興譲館寄宿舎開設百周年記念挨拶　大関修敬
　興譲館舎生ＯＢ会長
・奨学金貸与制九十八周年記念挨拶　加納和子
　奨学生ＯＢ・ＯＧ会長
・祝賀挨拶　上杉邦憲　有為会名誉会長
☆来賓祝辞
・川端達夫　文部科学大臣　（代読）
・吉村美栄子　山形県知事　（代読）
・安部三十郎　米沢市長

◆祝賀パーティー

・山形県民歌斉唱
・乾杯　本間敏雄　有為会名誉会員
・各支部会員代表、東京興譲館館長、仙台興譲館館長等のスピーチ
・会員による詩吟等を織り込んでの祝宴懇親
・有為会の万歳三唱　有為会相談役　小森力雄
・閉会の辞　有為会副会長　須貝英雄

※多数のご出席とご協力により、本会創設百二十周年の節目の祝賀会がとどこおりなく済みましたこと、厚く御礼申し上げます。

また実行委員各位の尽力に感謝します。

（記念行事関連実行委員会委員長　鈴木脩二記）

◆百二十周年メモリアルとして

◆有為会々誌創立百周年記念特集号からの抜刷
「米沢有為会　百年のあゆみ」　限定版
◆「郷土にちなむ図書目録」　頒布価格　三百円
◆「米沢有為会年表」が作成され、祝賀会当日出席者に配布されております。ご希望の方は各支部の事務局にお問い合わせください。

祝賀会記念講演

演題　第一義・戊辰戦争・有為会（講演資料）

講師　名誉会長　上杉邦憲氏

一．**「第一義」**とは（ネット情報）

北宋の雪竇重顕（セッチョウジュウケン：九八〇～一〇五二）が選んだ禅問答百則（碧巌録）の第一則に、達磨大師と梁の武帝との問答があり、武帝が「聖諦（しょうたい）の**第一義**は如何なるか？」（神聖なる真理の最も根源にある奥義は何か？）と尋ねたのに対し、達磨大師「廓然無聖（かくねんむしょう）（「廓然」はからりとしているさま）からりとした虚空のように聖なるものも何も無い）と答えた。武帝が「ではあなたは聖人ではないのですか？」と問うと、達磨大師曰く「不識（知らず）」。→不識庵謙信、不識院殿真光謙信

二．謙信公家法**「宝在心」**＝「第一義」

一．心に物なき時は、心廣く體泰らかなり

一．心に我儘なき時は、**愛**敬失わず

一．心に慾なき時は、**義**理を失う

（中略）

一．心に邪見なき時は**人を育つる**

三．**愛＝仁**、「常に篤く**仁**を施し、あまねく徳を布くならば、子孫の代に幸いともなるであろう」（謙信公）

四．天正十九年（一五九一）景勝公発布　覚　（米沢直江会報「龍師火帝」第十九号より）

一．頭の正邪に依り、百姓善悪にうつり候ものにて候。

二．年貢諸掛等はなる程勘弁いたし、悪作の年は前年より小分たるべき事。

三．何事も古法を守り、利欲のために新法を立て、**百姓を苦しませ申すまじき**候こと。

四．忠孝の道理、常々教訓致すべき事に候。女共へは貞節の道理自然に相分り候よう肝要。

五．年貢等、取り集めの役人共、**百姓へ対しがさつの儀無いよう**申し付け候こと。

六．**百姓は国の宝**に候あいだ、なる程堪忍すべく候。

七．訴訟は双方よくよく聞き糺し沙汰致すべきこと。

社団法人米沢有為会創立百二十周年記念
「ふるさとおきたまチャリティ美術展」開催

百二十周年の節にあたり、東京興譲館寮の老朽化にともない、耐震補強を含めた改修工事が施工されました。その費用捻出の一つとして上記のチャリティ美術展を十一月十六日から一週間、東京・京橋のギャラリーくぼた別館で開催いたしました。開催にあたり「米沢市芸術文化協会」の亀岡博会長、緑光会の沖津信也会長、そして、特別出展ご参加の福王子法林・一彦、故黒沢悟郎、故斎藤千代夫の各先生と東京支部会員八名の有志の出展のご快諾と全面的な協力による美術展でした。

ご承知の通り、置賜の地に立ったイギリスの紀行家イサベラ・バードは豊かな自然と人々に出会い、アルカディアの里、桃源郷と表現しました。つまり、天地人に恵まれた置賜地方に生まれ育った方々の作品群は、それぞれの創作技法で、私たちに、生涯忘れることのない、ふるさとの「心の四季」を提供され、その作品一点〳〵の絵の魂は観る者一人〳〵の心に懐かしい何かを語りかけてくれました。出展して下さった作品との出会いと共に、会場で交わされた多くの会話によって故郷への想いを楽しませて頂きました。あらためて、会場に足を運ばれた約二〇〇名の方々に代わってお礼を申し上げます。

世はデフレ宣言の最中、財布の紐が固いのではと心配しましたが、この美術展の趣旨をご理解いただきました皆様のお陰で、チャリティは予想を超え、花も実も程よい加減で次回への期待も膨らむようでした。

チャリティ美術展実行委員長　米野　宗禎

寄宿舎の改修

東京興譲館大規模改修工事を終えて

佐藤　毅

十一月十五日は暖かい快晴の朝を向かえました。東京興譲館の屋上からは、新雪をいただいた富士山がくっきりと間近に望まれ、新しいスタートを歓迎してくれているように感じられました。

東京興譲館大規模改修工事竣工修祓式には、上杉名誉会長はじめ、下條会長、遠路米沢から学生時代をこの寮で過ごした安部米沢市長も駆けつけていただき、関係者一同で無事の竣工を祝いました。

老朽化した東京興譲館を何とかしようとの機運は随分前からありましたが、建設後四十三年を経てようやく米沢有為会創立百二十周年記念事業として大規模改修工事を実行に移す事になりました。

今回のプロジェクトの狙いは、来るべき大地震に備えて耐震性を強化することと、火災に対する安全性を確保する事です。もちろん、あらゆる面で老朽化し、陳腐化している施設を予算の許す限りリニューアルする事でもあります。

学生の生活空間である個室や洗面所・トイレの改修、廊下や階段等の共用部の模様替え、地デジやBS・CS等のTV放送への対応やインターネット環境整備も実行しました。食堂や厨房、食品庫周りも寮母さんの要望を出来るだけ取り入れ、働きやすく清潔な環境に心がけました。

有為会の本部機能も大きく充実しました。事務室は約三倍のスペースを確保し、上杉記念室も内容を一新し、十人前後の小規模な会議が出来る、使いやすい会議室として整備しています。また、来客室として、地方の有為会会員や舎生父兄等が宿泊できる二室を新に設けました。

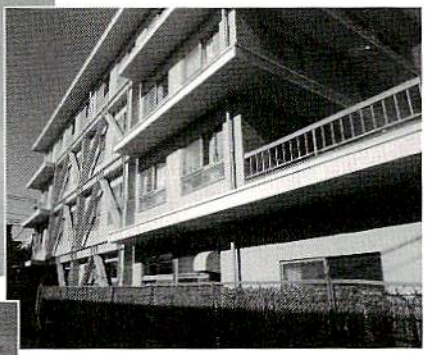
四ヶ月の工期でしたが、ぎりぎりでした。真夏の暑い最中、舎生には工事に合わせて部屋を移動してもらったり、一部塗装工事にも参加したりで、思い出に残る出来事だったでしょうし、東京興譲館の歴史に足跡を刻んでもらいました。

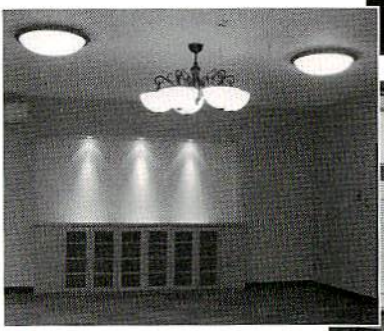
主眼である耐震補強工事はことのほか大変で、耐え難い騒音や塵埃を撒き散らしながら、鉄筋コンクリートの耐震壁を5枚新たに設置しましたし、外部には鉄骨の補

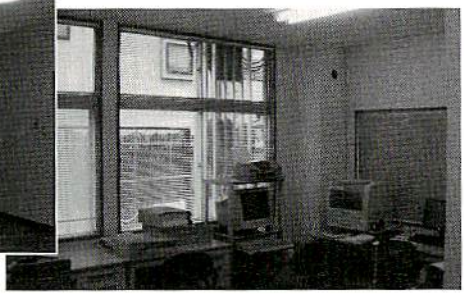
強フレームを組み本体と一体化しています。

関係各位の協力を得て、今回の工事は無事終了しましたが、新たなスタートラインに立ったともいえます。有為会が学生寄宿舎を今後とも維持、運営するためには定期的に修繕工事を行い、常に専門家によるメンテナンスが必要です。

長期的な視野に立って、有為会として興譲館寄宿舎を今後どのように維持していくかを考える良い機会ともなりました。





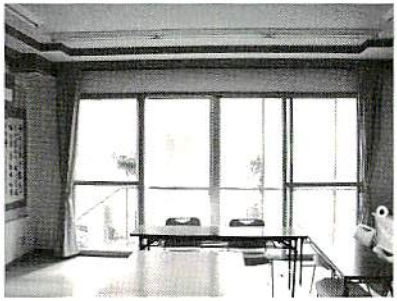


仙台興譲館寮大規模改修工事完了

仙台興譲館寮は築後二十二年経ちましたので全面的に手入れ、改修が必要な状況です。資金の関係でこれまでは生活上我慢しきれない厨房・衛生機器などの緊急補修、緊急交換等、その都度対処してきました。H二十年度は創立百二十周年記念事業の仙台興譲館大規模改修第一期工事として、特に生活上必要な、消防法上の避難器具交換、壊れた玄関錠の交換、換気窓開閉機構修繕、衛生機器の修理・交換、外部手摺・物干等外部鉄部の錆補修、除湿器設置等の工事を本部負担で実施しました。

引き続き今年度は百二十周年記念事業第二期工事として本部からの一、〇〇〇万円の予算に支部財源から五十万円を加えて内外の大改修を実施し、九月末で工事が完了しました。

外部修繕工事として、①屋根・屋上関係 ②外壁関係 ③サッシ関係 ④玄関前舗装等、内部修繕工事として、①床居室畳替・約半分フローリングに改修・シートワックス掛、②壁ビニールクロス張替、③天井EP塗装、ビニールクロス張替、④内部建具・押入改造、⑤カーテン⑥設備機器、配管配線工事等の工事が実施されています。（M）



必ず依怙贔屓致すまじき候こと。
右の条々、堅く相守り申すべき候、以上　景勝　花押

五．米沢藩　三十万石から十五万石へ減封
寛文四年（一六六四）第四代綱勝が妹富子の嫁ぎ先・吉良義央訪問直後急死（二十七歳）　改易の危機
会津藩初代藩主・保科正之（徳川秀忠の四男、家光、家綱の後見として幕府重鎮、綱勝正室媛姫の父）が義央の長男・三郎（当時生後六ヶ月（数え二歳）の養子縁組届けが出されていたとして上杉家を救う。第五代綱憲となる。　学問所「聖堂」（のちの興譲館）を興す。

六．鷹山公（一七五一～一八二二）　綱憲公の曾孫、お豊の方は綱憲公の孫
「民の父母」明和四年（一七六七）、
受次ぎて国の司の身となれば忘るまじきは民の父母
「伝国の辞」天明五年（一七八五）
一、国家は先祖より子孫へ伝え候国家にして我私すべき物にはこれなく候
一、人民は国家に属したる人民にして我私すべき物にはこれなく候
一、国家人民のために立たる君にし君のために立たる国家人民にはこれなく候
（リンカーン「人民の・・・」一八六三年十一年）

七．蝦夷警備から帰国途上米沢藩を通った会津藩士日向三郎右衛門の日誌
「田畑はよく開かれ、空いた土地なく漆、楮、桑が植えられ、籾蔵は整備され、機を織るおさの音が家々からよく聞こえてくる、それにも増して村の肝煎りや村人から宿場の人夫や馬方に至るまで丁寧な態度や言葉使いをする、まさに「この世の王道楽土」の如し」

八．戊辰戦争
文久三年（一八六三）第十三代斎憲　京都警護　将軍家茂　会津（松平容保）・薩摩．米沢ｖｓ長州

元治元年（一八六四）禁門の変（蛤御門の変）会津・桑名　長州を追い落とす。
慶応二年（一八六六）幕府長州再征　家茂の死により休戦（実質敗戦）　一橋慶喜将軍へ
慶応三年（一八六七）大政奉還　王政復古の大号令　慶喜・大阪城へ退去
慶応四年（一八六八）一月　鳥羽・伏見の戦い　幕府・会津・桑名 vs 薩摩・長州・土佐
慶喜、松平容保、松平定敬らと大阪城脱出、海路江戸へ。
米沢藩新任奉行**千坂太郎左衛門高雅**上洛　慶喜追討、会津追討の命を受ける。

九．**奥羽越列藩同盟**

米沢藩は会津藩には保科正之公以来の恩義があり、これを討つことは出来ない。（容保の実妹幸姫は茂憲の正室）
会津追討は薩長の私怨によるものであり、正義は我が方にある。

仙台藩とともに「松平容保の会津城外謹慎、十万石の減封、鳥羽伏見戦責任重臣の首級提出」を条件に会津藩に降伏を勧め、閏四月十二日その旨の嘆願書を白石に参集の奥羽十四藩連名で奥羽鎮撫総督九条道孝に提出。下参謀の世良修蔵これを握り潰す。「奥羽皆敵」同十九日嘆願書却下。
同二十日福島において仙台藩士により世良修蔵暗殺
同二十二日以降奥羽列藩二十五藩による白石会議。
五月三日　奥羽列藩盟約書（仙台盟約書）調印。会津・庄内両藩への寛典を要望した太政官建白書作成。同四日長岡藩、六日越後五藩加盟、計三十一藩にて**奥羽越列藩同盟**結成。輪王寺宮公現法親王（後の北白川能久親王）を同盟の盟主に「北部政権」錦の御旗、追討の詔勅の偽造　五月十五日上野彰義隊敗退。
五月十九日長岡城落城、七月二十五日奪還、同日新発田藩裏切り、西軍の松ヶ崎上陸手引き。
七月二十九日長岡城再落城。河井継之助会津へと撤退の途中死去。
米沢藩軍も越後戦線から撤退。（越後口総督・色部長門久長・戦死、軍事総督千坂高雅）

九月四日米沢藩降伏。九月八日明治に改元。同十日仙台降伏。
同二十二日会津藩降伏。同二十四日庄内藩降伏

・米沢藩と会津藩の戦いの違い

米沢藩　腰抜けと言われるも早期降伏　**領民を守る**。「奥羽有罪在一身」の建白

明治初期、イギリスの女性旅行家イザベル・バード著「日本奥地紀行」

「鋤で耕したというより鉛筆で描いたように」美しい農産地帯で「米、綿、とうもろこし、煙草、麻、藍、大豆、茄子、くるみ、西瓜、胡瓜、柿、杏、ざくろを豊富に栽培している」(高梨健吉訳・東洋文庫)と述べ、「エデンの園」、「アジアのアルカディア」に例えられる「自力で栄える豊沃の大地」と讃えている。

会津藩　徹底抗戦「ならぬものはならぬものです」

白虎隊の悲劇

下北半島**酷寒の地へ**追放（斗南藩）

十．明治十四年（一八八一）茂憲公　第二代沖縄県令に任ぜらる

「沖縄巡回日誌」民の安寧のため、鷹山公の施政を行わんとするも二年で罷免

教育（「人を育つる」）を重視。退任時私財を投じ五人の県費留学生を東京へ。

この五人が帰島後沖縄各方面の基礎を作る

茂憲公、百年後に沖縄県等より顕彰される。沖縄市と米沢市姉妹都市締結。

十一．明治二十二年（一八八九）国家有為の人材を育てる会・「有為会」発足

初代会長・千坂高雅

十二．茂憲公遺言　大正八年　（一九一九年）

1．栄爵は謙信公の遺徳、朝廷の恩。皇室を翼戴し、文武を励み、家名を辱しむべからず。

至誠を尽くし父母に対し子たるの道怠るべからず

2．華族の本分として偏せず、党せず、政府と人民の間に立ち国家に尽くすべし。政党に関与

すべからず。

3. **勤倹**は謙信公の遺法。質素律儀を旨として遊びほうけたり、浮ついたことや贅沢をするべからず

4. 姓氏を伝え、財産を継承し、子孫が栄えるのも謙信公あってこそ。祭祀を怠らず祖先を大事に。継承した財産は国に尽くすべきためのもので子孫我私に消費すべからず。鷹山公の御遺訓の趣旨を弁えて平素家にあっては専ら節約に努め、有益なことに使うよう心がけるべし。

5. 一家親族の和親を保ち、祖先を敬い、**行いを正しく**し、耐え忍ぶことを忘れるべからず。

6. 上杉家に仕える者達には親切に**礼を尽くし**て、侮ったりすべからず。召し抱えた者全員に対し、愛憐を加え**仁恕の道**を忘れるべからず。

7. 置賜三郡の**人民**は謙信公以来患苦を共にし、一朝一夕の由緒では無いのだから後世子孫代々に至るまでこれを**親愛**し、**殖産興業教育**を勧誘奨励、旧誼を厚くして、永く相忘れべからず。

⇦

有為会の精神

付録・真珠湾攻撃に見る米沢精神（私見）

総指揮　山本五十六連合艦隊司令長官（長岡藩出身）

指揮官　南雲忠一第一航空艦隊司令長官（米沢藩出身）

いずれも戊辰戦争敗者側

第三次攻撃をせずに帰還の「決断」。

「米空母の所在が不明の今、天皇陛下からお預かりした艦隊（兵隊）をこれ以上危険に晒せない」

家康を追撃しなかった景勝公の「決断」と、領民を守るため戦いを続けなかった斎憲公の「決断」に通じるものがあるのではないか。

興譲館寄宿舎 百年の歩み

東京興譲館寮

有為会の誕生

「在京の同郷人に呼びかけて親睦団体を作ろう」との伊東忠太の提案で、内村達次郎、小田切（鳥山）南寿次郎、長谷部源治郎、宮島幹之助、伊東の弟三雄蔵の五人の合意を得て、在京同郷の先輩後輩に広く呼びかける準備が進められた。明治二十二年十一月二十三日、伊東ら六人が発起人となり、郷土愛を土台に、相互の親睦と切磋琢磨を目的とし、共存共栄を計る同郷人の団体結成が具体化された。これが「有為会」の誕生である。

寄宿舎建設への胎動

明治四十年八月、第十七回総会の折、通則の一部が改正された。つまり寄宿舎の建設（予定）に伴う条項の追加改正である。

第七条ノ一　本会ハ東京及ビ仙台ニ漸次学生ノ寄宿舎ヲ設ケ別ニ定ムル所ノ規則ニ依リ之ヲ管理ス

第十三条　教育部ニ於テハ学生ノ指導監督寄宿舎貸費並巡回学術講演会ニ関スル事務ヲ掌理ス

明治四十年十二月三日、日本橋の偕楽園において評議員会並びに新旧会長の歓送迎会（小森沢長政会長から平田東助会長へ）が催された。小林源蔵総務部長は、米沢有為会が早急に手掛けなければならぬ寄宿舎建設、社団法人化の問題を予測して、新会長の識見力量に大いに期待している旨の挨拶を行った。

寄宿舎敷地の選定

明治四十一年四月二十日、精養軒において上杉憲章総裁推戴会が開かれたが、これに先立ち開催された評議員会においては、

一、寄宿舎敷地（甲地・乙地）の選定の件

二、寄宿舎建築の設計監督を中條精一郎と小沢義平に嘱託の件（全員一致可決）

ほか三件の事項が審議された。

敷地選定については、高梨源五郎案により、将来の発

展のため広い方の甲地（六百余坪）とし、両敷地の価格二万円は上杉家よりすでに出金、建設費七千円は興譲館財団（私立米沢中学が尋常中学の資金取得のため募金した基金を基に、明治三十九年十一月文部大臣の認可を得て組織）より出金。利子を払うべき元本二万七千円のうち五千円は、高梨案により乙地の代価として財団引受けの約束により差引二万二千円。利子は上杉家分は年六朱、財団分は七朱。財団からは第二年目より毎年二千円～二千五百円の補助を仰ぎ、初年に要する資金は、有為会基本金より千三百円の範囲内で一時流用することとし、第九年目に全部償却する予算を立てる。但し、乙地（四百四十六坪余）の売却金が五千円を超過すれば、その超過分は財団より有為会に交付の約束がなされた。

東京興譲館寮の開館

『米沢有為会雑誌』第一九〇号（明治四十二年一月）「思藻」欄に吉田熊次は「米沢有為会と寄宿舎」と題してこう書き出している。

「我が米沢有為会の寄宿舎を切望せるや既に久し。明治三十三年の夏、我が米沢有為会は第一回の巡回講話を会の事業として決行するや、巡回講話と寄宿舎を以て、本会の目的を遂行することは重要なる手段と認め、これを会則に明記して、以てその成功を公約せり……本年一月一日、小石川表町を歩き、我が有為会寄宿舎の北風を凌ぎて、伝通院陵上に聳ゆるを見、内に欣喜の情に堪へざるものありしと共に、之が為に尽力せられたる先輩知友の労力の如何許りなりしやを回想し、将来の責任の大なるを畏るるの情禁ずる能はざりき」

長野県在住の会員椎野誠一は、「郷党子弟団欒して郷国良風の発展所」となすため、次のような提言をしている。

管理者（有為会本部）に対しては、①自治制の採用 ②監督者の同宿 ③積極的な先輩の来訪激励 ④娯楽室・図書閲覧室等の設備充実。寮生に対しては、①規則の厳守 ②朝夕の皇居と故郷の遥拝の実行（または教育勅語奉読） ③時間的な「けじめ」の励行 ④自治制の完成 ⑤不識公と鷹山公尊像の掲額 ⑥鶏等飼育の実利的労働への出精 ⑦購買組合の組織。以上列記された諸提案は、いかにも米沢人らしい発想であり、特に「実利的労働」の奨励は、上杉鷹山以来の実学思想の「明治版」とでも云うべきものであろうか。

明治四十二年二月二十八日に竣工受け渡しを済ませた

米沢有為会寄宿舎興譲館は、和洋折衷の二階建、六畳間15、四畳半7、集会室36畳、入舎生37人で、工事費総額は、四千四百十七円二十一銭二厘であった。

四月一日舎生収容、同二日入舎式、同三日、上杉茂憲・憲章父子はじめ、千坂高雅、山下源太郎、千坂智次郎、下條正雄、三宅雪嶺、井上哲次郎ら名士の来臨の下に開館式が挙行された。

小林源蔵総務部長が寄宿舎設立の経緯を説明、次いで上杉憲章総裁の式辞、学生総代椎野信次の祝辞の後、千坂高雅が演説、「友愛を守り、相互扶助の精神を忘れず、絶対徒党を組むべからず」と訓諭、さらに少壮の時代に体を鍛える必要を強調。つづいて、海軍薬剤中監高橋秀松は、「親切を旨とし、興譲館気質を醸成して現代の弊風を超越すべし」と力説した。

財政の安定確立

米沢有為会の基礎確立の最後の問題は、財政上の三大懸案の解決であった。即ち

一、興譲館寮の借地料の減免。

明治四十四年九月二十一日の評議員会の決議に基づき、上杉家と交渉の結果、先に買収した土地の半分を村山同郷会に貸与し、従来有為会が負担して来た千二百円の地代を、翌四十五年からは七百二十円に減ずることになり、更にその後六年間にわたって逓減し、明治四十九年（大正五年）以降の地代を免除してもらう運びとなった。

二、県費補助の確定。

明治四十五年度から五十年の間に一万円ずつ交付が決まった。

三、基本財産管理規定の県認可。

舎生の意識の変化

東京・仙台・札幌に興譲館寮が開設されたが、当初は郷里を離れ他郷で学ぶ学生にとって寄宿舎の存在は、特に経済的な面で無類の「恩恵」であった。だが、時代が進み、米沢の郷土的精神主義が若者には敬遠される傾向が現れ、有為会も発会当初の郷土意識が次第にマンネリ化し、時代と共に変貌を余儀なくされて行く。

昭和二年六月、我妻栄は「米沢有為会雑誌」第三六四号に寄稿。

この中で、興譲館寮については「郷里の寄宿舎なるものは、今日においては単に〈安い下宿〉という以上に何等か精神的な利益を有するか、ということになると、私

は何もないと考える」と断言。「安い下宿として恩恵を受ける者が少なく、たまたま米沢が本籍というだけで寄宿をみとめる非合理的な運営は有為会の事業に不相応」という理由からである。

東京興譲館寮の移転改築

明治四十二年建設の東京興譲館寮は、敷地南隣に淑徳高等女学校の三階建校舎が新築されたため、日陰となり、また老朽も目立ってきた。そこで寄宿舎の新築には不適切な敷地となったので、その移転改築の方法について昭和九年一月評議員会を開催して、次の三項を決めた。

一、上杉伯爵家より許される範囲内で土地の選定並びに寄宿舎・館長公宅の建築設計をすること。但し土地の面積は館長役宅及びテニスコートの所要面積を最小限とし、万一上杉家許容の範囲内で支弁不可能の場合は、その超過金額に相当する土地購入金は有為会資金をもって一時調弁してこれを有為会所有地とし、追って資金補充計画を立てること。

二、東京興譲館建築委員は十五名以内とし、これに土地の選定、建物の設計その他同館建築及び移転に関する一切を委任すること。

三、前項建築委員十五名の詮衡員指定は議長に一任すること。

そこで村山同郷会関係者との折衝を開始し、昭和八年七月以来上杉家並びに村山同郷会と紆余曲折種々交渉の結果、同会が東京興譲館所在の上杉家所有地を全部五万三千円で買取り、米沢有為会は右売買契約の完全履行を条件として、現寄宿舎建造物を無償で村山同郷会に譲渡し、上杉家においては右売払い代金中、現敷地買取り代金同等又はそれ以上の金額をもって、興譲館新築敷地を買収してその使用に供し、五千円を右の土地維持資金として留置き、なお土地収得諸費用を支払った残金を東京興譲館新築資金として寄贈の恩典を受けることになった。

この様にして、上杉家対村山同郷会売買契約書と米沢有為会対村山同郷会契約書がそれぞれ交換され、新築敷地として西大久保四丁目（富山ケ原陸軍射的場南側）に上杉家所有四六六坪八五、有為会所有地一八七坪二三計六五四坪〇八の政府払下げ地を二万九千四百三十三円六十銭で買収、延べ坪数二一二坪二四の寄宿舎及び延べ坪三七坪六七の館長役宅並びにテニスコート建設の設計を完了する。五月十二日地鎮祭、六月二十六日上棟式、十月十四日竣工式と順調に進捗する。

「東京興譲館建築予算書」は支出予算で三万九千八百五十円。

昭和九年十月十四日の竣工式当日、上杉総裁の告辞の後、宇佐美会長の謝辞。次いで館長遠藤達は「新興譲館は通風採光及び設備において学生の勉学に、將又修養に最適の条件を具備し、在舎生一同をして恰も理想稀に在るの思いあらしむ。惟ふに世界の文運は日に日に急進し、平和の戦争亦年一年激甚を加ふ。苟も天下国家に志あるものは時勢に媚びず確固たる信念を抱き奮励努力帝国のため有為の人材たるを期せざるべからず……」と舎生に対する覚悟を促しながら謝辞を述べている。つづいて旧館時代の舎生（桂友会）一同を代表して東京電気会社社員木島正太郎が「壮大なる新館を見るとき欣喜措く能はず」と感懐を述べて祝辞を呈し、東大農学部学生星野秀一が「孟母三遷のとかや我等も亦この好適地を得たり」と舎生総代として謝辞を述べる。

戦後の興譲館寮

戦後復刊第一号の昭和二十七年発刊の『米沢有為会々誌』には、「興譲館だより」として東京・仙台・札幌の三興譲館寮の記事が掲載されている。東京の興譲館は…

「かつて諸先輩が吟遊した射撃場際の上堤には、立入禁止の札が厳めしく立てられ、テニスコートであり、又戦争中は防火用水、壕舎（防空壕）であったところには、身丈程の雑草が一面に蔽って居た…」

終戦後学校現場の授業が再開されると、興譲館寮生たちは、（昭和二十四年十月二日四年ぶりに東京興譲館が開館するまでは）一時先輩の篠田義市（評議員）・遠藤達（相談役）・永井省三（評議員）ら三氏の私宅に寄宿して厄介になっていた。

「あの当時、或いは法外な値の下宿に、或いはトタン葺のバラックの親戚にと、それぞれに再会の日近きを念じつつ別れて行きながら、切迫した日々の生活に追われ、学校を異にする境遇にあっては、仙台興譲館がすでに学生の手で再建準備が進められていることを聞いても、結局焦るばかり何も出来なかった。併し、こんな風に学生が生活に追われている間、毎月の理事会では一日も早く住む処を、という諸先輩の御厚意が、当時の支部長加勢（清雄）先生のお力になる、阿佐ヶ

谷の住宅購入提案を初めとして、不断に続けられつつあったことは全くありがたかった…」

興譲館の再建工事が開始されたのが昭和二十四年五月。九月北村徳太郎館長の詮衡により五名の学生が入舎許可となるが、配線工事や畳の敷詰め作業が済むのを待ち兼ねるようにして入舎する始末であつた。十月二日、相田会長外多数の先輩が参集して開館式が挙行される。

寮母さんを迎えるまでの約二か月は、寮生の自炊生活が続き、一日二食、しかも粥食をすすりながらの共同生活であった。やがて、寮内は総代・委員の執行機関が統制をとり、重要問題は館長の指示を仰ぎ、月一回の定例舎生会において民主的に処理され、寮の運営も軌道に乗る。

「終戦後六年を経過した今日では、あの敗戦の直後に見られた打ち砕かれて絶望的に荒んだ思想も、生活態度も、戦災地の復興と共に次第に健全なものへと回復の一途を辿った…故郷を遠く離れても常に恰も故郷に居る如く錯覚さえする、心の安らぎを与えてくれる…」

東京興譲館、調布市へ

昭和三十九年に「東京興譲館再建委員会」が発足、昭和二十四年西大久保に戦後再建された興譲館が木造で老朽化が目立って来た。一方東京遊学の学生もその数が増えてきて、在京学生寮の拡充を要望する声も強く、理事会では鋭意検討を重ねた結果、六百余坪の遊休敷地を活用して、抜本的に再建する長期計画を立てるために、加藤八郎副会長を委員長として、再建委員会を作り調査研究を進めることになった。

昭和四十年四月以来、再建委員会では多角的な調査研究を精力的に行い、具体的な検討を進めていた。

この頃のある理事会の模様を小幡常夫は、『米沢有為会会誌』復刊第三十七号に「宇佐美洵会長の目」と題して、宇佐美会長の人柄に触れている。

理事会開催の当日、加勢理事の提案説明の後、上杉家への配慮や北村徳太郎案への遠慮から、しばらく沈黙が続いた時、宇佐美副会長が「上杉様の余徳が、札幌、仙台にまで及ぶということは、誠に有難いことである」と語り、この一言で長い間の懸案は見事に解決、それぞれの分担業務が定められた。

この段階では、西大久保四丁目の隣接地にある区立戸山中学校にその敷地拡張の計画があり、東京都が本敷地の譲渡を申し出てきたため、委員会及び理事会において慎重審議の結果、一括譲渡には格好の相手でもあり、また、本敷地の多くの部分につき寄贈主の上杉家からも快諾を得られたので、一括売却の上、その売買益により近郊に閑静な土地を買収し、その差益の一部をもって、本格的な新興譲館を拡充建築する方針を定め、東京都と具体的な折衝に入ったのである。替地については、当時東京瓦斯不動産㈱の企画営業を担当していた小幡理事の格別な努力によって、調布市入間町一丁目三六に四三五坪八〇の土地を得、早速、東京瓦斯不動産㈱と具体的折衝に入った。

昭和四十一年十一月二十八日、新しい東京興譲館寮が竣工を見る。約四十八名の収容力を持つ鉄筋コンクリート四階建、延べ二七一坪九九二、テニスコート一面を付属する堂々たるもので、建物は大木理事の並々ならぬ尽力で完成したものであった。

仙台興譲館寮

仙台興譲館の開設

仙台興譲館は大正三年、仙台市片平丁に一民家を購入し、修改築を行って発足した。大正十四年、角五郎丁（現角五郎一丁目）に新築移転している。

昭和二十年七月の仙台空襲で全焼したが、昭和二十三年に再建復活を遂げている。その後、二度に亘り増改築を行ったが、老朽化がひどく存亡が危ぶまれていた。

戦後の仙台興譲館

戦後復刊第一号の昭和二十七年発行「米沢有為会々誌」によれば、仙台興譲館は戦火のため規模が半分に縮小され、（敷地の半分を西松建設に売却し、その費用で寮が建てられた）館生が十八名、寮母、家族を入れて二十名。定例行事として四月の上杉神社遥拝式、十月の芋煮会、一月の新年宴会などが実施され、三月の卒業生歓迎会には三原支部長のほか、東北大学学長高橋里美、国税局長黒金泰美ら名士も多数参加している。

たよりでは、「朝の食卓には自作の豌豆（えんどう）の味噌汁、夕

飯には鰹の照焼一切れも出る」とやや余裕ありげだが、「学生生活は東京に比べ経済的負担は軽いかもしれないが、よろず変動の激しい時代にあってはやはり容易ではない。選挙運動員、家庭教師、夜警、会社の臨時雇、血液売り等々のバイトをやり、この時代の学生らしく生きております」と記載されている。

また。仙台支部だより第二号で瀬川耕さんは「戦後の寮生活は貧しい時代であったから最初の一年間は五升の米を持っていたと思う。戦後三―四年は米を出さなければ下宿できなかった時代である。食費を入れた寮費は一カ月千五百円か千七百円だったように思う。何から何まで自分たちでやらなければならない。もちろん自治寮ではあるが、おばさんだけでは燃料はどうにもならない。給食担当をはじめ、皆がまき割りを交替でやっていたのを思い出す。

試験勉強などのため寮の一部屋を娯楽室にしていることを宇佐美さんに注意されたが、必要性を迫ったら、これまで八十万だしているうえで、更に二十万円を出すと言う答えをもらった。それで食堂の東側に娯楽室が作られ、楽になった。次の総会の時、寮の屋根が木端屋根のままでトタン張りもされていない。早晩雨もりの恐れがあるので出来るだけ早く改修してほしいと再びお願いした。私が卒業後に整備されたらしい」と記している。

仙台興譲館の再建

東京興譲館が四十一年、調布市に竣工されるに及び、四十二年六月、仙台・札幌両興譲館整備案が検討された。旧東京興譲館敷地の売却代金の一部をもって、仙台・札幌興譲館の整備に着手することを決定した。

四十二年九月、札幌興譲館の改築新装を終わり、四十三年五月に理事会を開催、仙台興譲館の増築改装再建に取りかかることになった。三原仙台支部長を中心とする仙台支部会員の熱心な検討を基礎として、理事会及び再建整備委員会において具体案が検討され、角五郎一丁目に三十二名収容の寄宿舎を建築することになった。本建設資金は、旧西大久保興譲館の敷地売却金で賄うことになっていた。

仙台寮の移転新築

昭和六十二年に仙台興譲館が現在地に新築移転した。この間、移転地の物色、旧敷地売却先の検討、売買価格の折衝、寮生や寮母の希望聴取と検討、引っ越しの世話、

諸官庁への届出や登記等々、数々の諸問題をひとつひとつ解決。その結果、昭和六十二年七月、角五郎一丁目の敷地面積二八三坪を仙台ミサワホーム㈱に一億七千万円で売却し、旧興譲館から五百メートルも離れていない広瀬川のほとり、そして寮生のほとんどが通う東北大学にも近い角五郎二丁目六―二一に、一六二坪の土地を約九千五百万円で㈱奥村組から購入した。残額で延床面積一五八坪、鉄筋コンクリート造二階建て、全館暖房付きの新興譲館が誕生した。設計は会員の御供政敏氏の㈱MIT建築研究所、建築は㈱奥村組。

札幌興譲館寮

札幌興譲館の開設

札幌興譲館は昭和三年、札幌市北七条西十二丁目にある北大敷地（国有地）を借用して寮舎を建築することになった。財政計画では興譲館財団から折衝の末六千円、札幌有志の寄付金五千円、更に新規募集で千円、東京支部会員の寄付千五百円となり、昭和五年四月、定員十名の宿舎建設に取りかかり、六月三十日に竣工した。建築費は七千円、請負業者は伊藤組だった。

概要は、敷地約四百坪、建て坪八十六坪二合五勺（一階四十八坪二合五勺、二階三十八坪）、一室一人の定員十名、構造は木造二階建て屋根亜鉛鍍（トタン）鉄板葺。

戦後の札幌興譲館

戦火にあわなかった札幌興譲館について、戦後復刊一号の昭和二十七年発行の「米沢有為会々誌」によれば「創立以来二十六年を経て、この頃では建物も古びて正に興譲館と呼ぶに相応しい風格が出てきたようです」と、なんとなく平和な、大陸的雰囲気の書き出し。「現在まで送り出した先輩は六十数名。農・工・医・理がほとんど全部で、文科はわずか一名で、終戦後にわかに作られた法文ですから当然の結果です。米沢興譲館中学出身者も戦前はかなり来ていたようですが、戦後はにわかにさびれて昨年、一昨年あたりではわずかに一人、米沢に関係深き者数名で、寮の経営上寮生の知人友人等を入れて寮を維持してきたのですが、現在も興譲館高校出身者は僅か一名です。以上のごとく米沢出身者が至って少なく、有為会の人からも館の性格を云々され、存続が無意味の如く思われたこともありました。有為会員も多いといわ

れない当地では、館の存続維持等の解決しなければならない重要な問題が多い」と記されている。

相次ぐ補修

札幌興譲館は戦火を受けなかったものの老朽化が進み、二十八年七月、寮舎の補修、内外壁の塗装、水道増設改善工事を実施した。工事費は十六万四千五百四十円。三十年には屋根、炊事場、洗面所の水道、部屋の窓枠、窓ガラス等を補修した。

以後、昭和三十五年一月～五月、三十七年、三十八年、四十年春と毎年のように補修がなされている。

四十二年に大改修

昭和四十二年に増改築された。木造建築の老朽化が耐用限度に達したためで、増改築の工事内容は、改築二八五・二平方メートル（八七坪）、増築二四・八平方メートル（七・五坪）、合計三一〇平方メートル（九四・五坪）、工事費用四七二・五万円。一室一人を二人とし店員を十七名に、天井を防寒天井に、窓を二重にして外側をアルミサッシ化し防寒的に、建具は全面更新、便所は水洗式、浴室は石炭釜からガス釜などなど大規模な工事となった。

札幌興譲館の閉鎖問題

国から借りていた土地の借用料について大幅な値上げ改正が相次ぐと共に、昭和五十年代に入ると再び補修工事が必要となった。昭和六十二年三月には会員あてに「札幌興譲館（米沢寮）の閉寮問題に就いて」の文書を発している。

この中で閉鎖について問題点として①北海道財務局より米沢寮用地の払い下げ（買い取り取得）を強く要請されていること　②寮舎の老朽化が著しく進行し、その修繕・補修に年々多額の経費を要する様になり、更に従来の巨額の地代（借地料）が地価の高騰により値上げされる見込みであり、維持運営補助金と併せて、それだけでも有為会本部の財政負担が限界にきている　③米沢市及び置賜地方から北海道大学等を志願する学生が近年激減して、将来の見込みも少なく、有為会本部としては、札幌興譲館維持の役割が終えんしたと判断されたこと。

札幌興譲館の閉鎖

札幌興譲館は昭和六十三年一月、国有地である敷地二

八〇坪を約七千五百万円で国から払い下げを受け、これを大木須田町地所㈱に約一億千四百万円で売却、閉寮した。昭和の時代に五十六年間存続した札幌興譲館の「形」は消滅したものの、その間、幾多の逸材を輩出しており、また転売益（実質的には借地権の売却益）から諸経費を差し引いた残金三千万円強は、当会の貴重な育英資金となった。

山形興譲館寮

山形興譲館の由来

昭和三十年八月、山形興譲館寮が開設された。山形市薬師町四二〇の一は元長谷川外科病院の建物であり、それを借用したものだった。

木造亜鉛葺二階建一棟。平屋建二棟。（三棟共同じ敷地）内部は、八畳九室・六畳八室・五畳一室・四畳一室、四十一名収容可。

山形大学より約一キロメートル北西に位置し、薬師堂・山形県護国神社・馬見ケ崎川に近く、盃山・千歳山、遠くは龍山・蔵王・月山を眺め、最上川は帯のように流れ、環境は雄大にして、四季の風景に恵まれ、勉学にはこの上とない境地でもあった。

勉学はもとより、春ともなれば千歳公園・護国神社境内の夜桜を見物し、ボンボリと桜花を傘にして車座を形成し、花見の宴。夏は月山・羽黒山・湯殿山・蔵王山への登山。秋は馬見ケ崎河原に於いての名物芋煮会を満喫。冬は蔵王山で樹氷を縫ってのスキーを楽しむ。

その他、支部長・篠田甚吉氏の経営する篠田総合病院大講堂等々に於いての学生主賓懇親会。又、山形支部が開催する総会や懇親会、園遊会の思い出。山形興譲館自体の催しものもあり、三月ともなれば、卒業生や新入学生の歓送迎会等々と学生時代特有の思い出は多かりしだった。寮生も定員に達する盛況も屢々だった。

山形興譲館の閉鎖

然るに、昭和三十七年五月、山形興譲館家主、長谷川家より山形興譲館賃貸契約期限満了に伴う、同年六月三十日限りとするとの連絡があった。

但し、一ヶ月の延長を諒承され、同年七月三十一日をもって長谷川家に返還せざるを止むなき至った次第。

実情は、山形興譲館を利用する学生は、昭和三十五年

頃から、交通事情の好天によって、置賜周辺より山形大学に通学が可能の状態と相成り、山形興譲館利用者が極度に減少の一途を辿り、他県人の希望者をも入寮を認めざるを得なかった経営状況にまで至っていた。

従って、山形支部役員会を再三開催し、有為会本部にもその事情を報告し、山形興譲館を甚だ不本意なことではあるが、断念の結論に達した。

山形興譲館開設以来約七年、惜しまれて廃止となり、七月三十一日をもって、長谷川家に無事返還し、発展的解消された次第。

山形興譲館開設以来寮生は六十余名、有為なる人材を世に送ってきた。

（山宮　光雄　記）

※引用文献　「米沢有為会々誌」、「札幌興譲館の六十年」、東京・仙台・米沢の各支部だより。

【興譲館寮史】

明治22年11月　有為会の誕生
明治40年8月　通則改正、寄宿舎の建設が明記される。
明治42年2月　寄宿舎東京興譲館が小石川表町に竣工、4月入館
大正3年10月　仙台興譲館、片平丁に開館
大正14年　仙台興譲館・角五郎丁に移転新築
昭和5年6月　札幌興譲館竣工、9月入館
昭和9年10月　東京興譲館が西大久保4丁目に新築移転
昭和20年　東京（4月）・仙台（7月）の興譲館寮が戦災にあう
昭和23年　仙台興譲館が再建
昭和24年10月　東京興譲館が再建
昭和30年8月　山形興譲館開設
昭和34年12月　仙台興譲館第2次復元増築工事完成
昭和37年7月　山形興譲館の閉鎖
昭和41年11月　東京興譲館・調布に新築竣工
昭和42年9月　札幌興譲館・新築改装
昭和43年　仙台興譲館・新築改装
昭和62年7月　仙台興譲館・角五郎2丁目に移転新築
昭和63年1月　札幌興譲館閉鎖

東京興讓館寮の歴代館長

16 代
大熊　惇

12 代
島津秀雄

7 代
宇佐美辰五郎

初 代
吉田熊次

17 代
高橋　宏

13 代
北村　徳太郎

8 代
本間利雄

2 代
槙山榮次

18 代
桑島喜平

14 代
桜井凱夫

9 代
小林一郎

4 代
宮島　幹之助

現館長
沼澤研一

15 代
小幡常夫

11 代
針生忠一

6 代
保科孝一

仙台興譲館寮の歴代館長

戦前

宮島　昇
（大正３年）

氏江　富雄
（昭和11年～？）

結城 隆弥（川西）
（昭和57年）

猪口金次郎（米沢）
（昭和33年～35年）

九里　尚知
（昭和20年前後）

中條　仁（米沢）
（昭和58～平成６年）

米地 秀三（南陽）
（昭和36～44年）

戦後

平岡　正倫
（大正４年～
７年）

白石藤次郎（米沢）
（平成７年～10年）

桑島治三郎（白鷹）
（昭和45～52年）

那須　省吾
（大正８年～
昭和10年）

御供 政敏（川西）
（平成10年～　）

瀬川　耕（小国）
（昭和53～56年）

三原 庄太（仙台）
（昭和30～32年）

札幌興讓館寮の歴代館長

相墨伝三郎
（昭和15年）

大橋　登吉
（昭和30年）

大石　三郎
（昭和16年～
21年）

伊藤　弥助
（昭和35年～
46年）

須田金之助
（昭和５年～
11年）

土佐林
（昭和22年～
25年）

岡田　昌彦
（昭和50年～
56年）

山田　一智
（昭和12年～
14年）

上村　重信
（昭和28年～
29年）

鈴木　吉行
（昭和57年～
62年）

山形興讓館寮　館長職

館長職
條田　甚吉

謝辞

興譲館寄宿舎開設百周年に当って

興譲館寄宿舎ＯＢ会会長
大関修敬

社団法人米沢有為会の創立百二十周年と米沢有為会の興譲館寄宿舎開設百周年の記念式典に当り、寄宿舎ＯＢ会を代表致しまして、一言御礼の言葉を述べさせていただきます。

米沢有為会におかれまして、東京に学生用の寄宿舎「東京興譲館」を開設していただきましたのが明治四十二年、その年から数えまして今年で丁度百年でありますが、その後大正三年には「仙台興譲館」、昭和五年には「札幌興譲館」、昭和三十年には「山形興譲館」と、四つの学生寄宿舎を開設していただきました。現在札幌と山形は閉鎖されておりますが、この四興譲館でお世話になった学生は今日まで累計で千四百名を超えております。これだけの者が米沢有為会のお世話になり、世に出て、各方面で活躍しているのであります。米沢有為会のこのご恩に対しまして、あらためて心から御礼を申し上げる次第であります。

抑も、米沢有為会が創立されましたのが、東京興譲館開設から遡ること二十年前の明治二十二年でありますが、更にその淵源をたどりますと、明治十七年、沖縄県令を終えられまして当時元老院の議官になっておられました当時の上杉家のご当主茂憲様が資金を拠出されまして、毎年二名程度米沢地方の若者を東京の大学に修学させようとなさったことから始まったようでありまして、茂憲様が封建時代の「米沢藩」という意識から脱却して広く「日本国」のために奉仕出来る人材を育成しようとなさった、ということは当時としては大変な開明思想であった、と松野良寅先生が「米沢有為会百年のあゆみ」の中で記しておられますが、私はむしろこの茂憲公のお考えが、明治維新後の廃藩置県、各地藩校の廃止にも拘らず、米沢地方では人材育成、教育重視の伝統が生き続けたポイントであり、この茂憲公のお考えが明治二十二年の有為会の発足につながり、明治四十二年の東京興譲館開設、同四十四年の有為会独自の奨学金制度のスタートと連り、育英団体として百二十年、永々として米沢有

為会は発展してきたと思うのであります。

この百二十年の間には数多くの困難もあったのでありますが、特に私が申し上げたいのは、先の大戦の際、東京・仙台の両興譲館が戦災により全焼したのでありますが、あの物資も資金もない時代に早くも昭和二十三年に仙台、昭和二十四年には東京の興譲館寄宿舎が再建された事であります。当時の諸先輩の方々のご尽力・ご苦労は並大抵のものではなかったと思うのでありますが、こうして幾多の困難を乗り越えて人材を輩出してきた米沢有為会の育英事業も、二十一世紀の新しい時代、地方重視の時代に入って、あらためて立ち止まってその向かうべき方向を見直してみるべき時期がきたのではないか、と思うのであります。

一つ考えられますことは、米沢を出て広く日本のために働く人材を育成するというこれまでの方向から、むしろ日本全国から米沢のために働く人材を育成するという方向を模索すべきではないか、ということであります。

幸いにして、米沢地方の町づくりは、山形大学の城戸教授や柴田教授を中心に、産学共同の形で着々と展開されつつあると伺っておりますが、その動きに米沢有為会が人材育成の面で参画していく、ということは有意義なことではないか、と思うのであります。

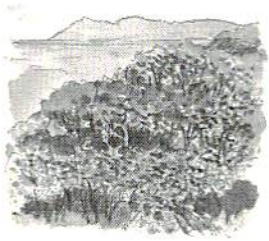
このような発想は今に始まったことではなく、既に今から二十年前、有為会会誌の創立百周年記念特集号で、現在米沢市長をしておられます安部三十郎さんが、当時の安部善明というお名前で「全国から人材を集める」と題して寄稿しておられます。更に十年前の創立百十周年記念特集号では、「有為会の本題は〝人づくり〟」という懇談会記事の中で、現在の下條会長が、当時は監事でいらっしゃいましたが、山形大学工学部に米沢地方以外から進学してくる学生に対する奨学金制度を提案しておられます。奨学金を出すだけでなく、米沢地方の企業への就職斡旋等も必要かと思いますが、現執行部におかれましては是非共その実現にむかってご尽力をいただければと思う次第であります。

更に、山形大学工学部のみならず、米沢の「オフィス・アルカディア」という構想を「オフィス&スクール・アルカディア」という構想に拡大し、茨城県の筑波に勝るとも劣らない研究学園都市にするという考えはいかがでしょうか。

明治の初め、イギリス人女性のイザベラ・バードという人が日本旅行記の中で、置賜盆地のことを「日本のア

ルカディア」と言ったそうでありますが、それは多分、のんびりした米作地帯のことを言ったのだと思いますが、現代の置賜を「オフィス&スクール・アルカディア」にするという構想はいかがでしょうか。

興譲館寄宿舎開設百周年という節目のときに当り、これまでの米沢有為会のご恩に対し重ねて御礼申し上げますと同時に、失礼をも省みず愚見を申し述べさせていただきました。有難うございました。



米沢有為会に想う

小森力雄

㈳米沢有為会は、明治二十二年に、親睦を基に、置賜地方人の育英事業を、主たる目的として発足し、その育英事業である興譲館寄宿舎の維持経営と、奨学金の貸与は、有為会事業の大きな二本柱であります。この二本柱の一本である興譲館寄宿舎は、明治四十二年以降、東京・仙台・札幌・山形に順次設置され、その舎生OBは総数一、九六九名を数え、現在、設置されているのは、東京・仙台の二箇所です。

私は、昭和二十年四月の空襲で焼失した、東京興譲館寄宿舎（新宿区西大久保）が、仮寄宿舎として借用した当会相談役遠藤達氏宅（世田谷区上馬）、次に、当会評議員永井省三氏宅（世田谷区上馬）に、昭和二十年から二十二年の解散迄お世話に成りました。大切なご自宅を、仮寄宿舎として提供して戴き乍ら、終戦直後の食糧難、住宅難で、多くの国民が生きるのに精一杯の混乱し

た厳しい時であり、寄宿舎と言うより合宿所の様な状況でした。同室の藤田浩一朗先輩からは、生きる為の逞しさを伝受致しました。

昭和二十二年に解散し、中断しておった寄宿舎が、二十四年に西大久保の焼跡に再建され、幸いに再度入舎させて戴き、二十六年の卒業迄お世話に成りました。この再建に付いては、まだ戦後の混乱が続いており、建築資材等も乏しく、他の色んな面でも、大変ご苦労の多かった事と思います。

隣の二号室の主は「有為会の生き字引」である金子芳雄相談役です。

東京興譲館寄宿舎
昭和24(1949)年10月2日再建
第1回入舎生

この様な戦後の時期のみならず、明治四十二年から現在迄百年の間、四箇所の寄宿舎に対する、上杉家を初め、同郷の皆様、会員の方々の、物心両面に亙るご厚情とご尽力は絶大なものであり、そのお陰で私共舎生は、食と住の心配をする事が無く、目的の修学を果す事が出来、それぞれ立派な社会人として活躍出来る事は、誠に有り難く心から感謝申し上げる次第で有ります。

昭和25(1950)年11月3日
戦後第1回園遊会　於　新宿御苑

この感謝の心を具現するには、私共舎生OBは、挙って有為会の会員となり、会の活動に参加し、舎生時代に有為会から享受したものを、次は、郷党後輩へと継承し、有為会の活性化と永遠の発展に寄与する事であり、使命でもあると考えます。この様な感謝の念を持つのは、人間として自然の心であり、物事の道理であると思います。

明治四十二年に寄宿舎開設以来、百年の歴史で、舎生OBは一、九六九名ですが、物故者、住所不詳者も多く、現在、連絡可能なOBは約八百名で、その内、有為会に入会している舎生OBは、約三百名が実情です。舎生OBでは無い熱心な会員の方から厳しい声も戴いて居ります。

その未入会の理由は、色々あるとは思いますが、やはり、物事に対する感謝の気持の欠如ではないでしょうか。之は、独り有為会のみならず、昨今の悲しい世相でもあり、謝恩とか恩返しと言う言葉を、死語にしてはならないと痛感致します。之を、天性などと思わずに、最も大切な幼児教育、その後の成長段階に応じての知育、徳育、体育、その中でも徳育が最も肝要かと考えます。

本会の場合、新入舎生は大学一年生で青年期ですが、資質も有り理解力も有る訳ですから、有為会の歴史、意義等に関する事柄を、正しく認識する様に、本会の人づくりの一環として指導育成をすれば、必ずや、本会の期待に応える舎生OB、そして有為会員が誕生するものと確信を致します。

誠に僭越ですが、問題提起をするだけでは無く、その実践について、拙い私見も有り、微力を尽す所存です。

東京興譲館時代の思い出

大石道夫

私が東京興譲館にお世話になったのは、昭和二十九年から三十三年までの四年間である。私は他の興譲館生と違って、実は札幌市生まれである。父が米沢市出身で、北海道大学の教授のかたわら、札幌興譲館の館長をしていたのであるが、病没したために一家で東京へ引き上げることになった。私が丁度、東京の大学に入学したために、母が当時の桜井館長にお願いして特別に入寮を許可されたものである。父から米沢のことはたびたび聞かされていたし、札幌興譲館の学生さんが良く家に遊びに来ており、又、興譲館高校に私の従兄弟が在籍、卒業していたこともあり、入寮してからもさほど違和感もなく、他の寮生の方と一緒に楽しい青春時代を送ったものである。

当時の東京興譲館は山手線の新大久保駅から歩いて十分ほどの明治通り近くにあり、四百坪（？）ほどの広い

土地の中にぽつりと二棟の寮舎が建っており、二人一室が原則であった。当時は戦争の焼け跡はほとんどなかったが、まだ戦後復興の最中であり、物資がようやく潤沢に出回り始めた頃であったが、寮生の多くは家からの仕送りと同時に様々なアルバイトをして学費、生活費を稼いでいたものである。私自身も週に何回かの家庭教師をしていたものであった。興譲館での生活は、率直に言って非常に楽しいものであった。また、佐藤さん、山口さんという寮母さんともいえる方々に朝夕、食事を作っていただいて、当時としては結構、食生活に関しては恵まれていたと思う。又、寮の行事として近くを走るマラソン大会や相撲大会など、結構、スポーツにも精を出したし、同世代でその後、代議士になった近藤鉄雄さんやプロ野球選手になった皆川睦男さんなどが訪ねて来られたのも記憶している。又、年に一回、東京在住の米沢有為会の方々が集まる園遊会を浜離宮で行っていたが、我々学生はそれの準備のため、みんなで会場の設営など手伝ったことも、今となっては懐かしい思い出である。在寮していた時には、多くの上級生、同級生、下級生と一緒になったが、今でも折に触れて交友が続いている。当時の寮監は、後に東京都副知事になった高橋俊竜さん（愛称ドンちゃん）であった。十年ほど前、高橋さんから私に現在の東京興譲館の館長になってくれないかという内々の依頼があったが、丁度、千葉県の木更津市の郊外にある現在の職場のかずさＤＮＡ研究所に就任が決まった直後でもありお断りしたが、折角の若い方々と接触出来る機会を失ったことを今でも心残りに思っている。私の在寮中に知り合った多くの方々について、ここで一人一人の名前をあげることは出来ないが、同期の会として数年前、小野川温泉近くで何十年ぶりかで集まり、皆さんの元気な顔を見、又、昔の思い出話に花が咲き、楽しい一日を過ごすことが出来た。十八才から二十二才という大学の四年間、そして多感な青春時代を送った東京興譲館の思い出は尽きないが、いつも鮮明に思い出すことが出来る。興譲館の食堂に一台テレビを置くべきかどうか議論したり、又、食堂のラジオから流れる音楽に皆で耳を傾けたなど今から思うと隔世の感があるが、本当に懐かしい。時代も変わって勿論、今日の東京興譲館での生活は、我々の当時の寮生活とは性格が変わって来たとは思う。

終わりに、米沢を出て地方の大学に在学する学生達のために、戦前からこのような施設を東京、仙台、札幌に

作り、勉学を助けて来た米沢の先人の方々の叡智とその実現に向けてのご苦労に心から敬服、尊敬する次第である。

（東京大学名誉教授）

東京興譲館の思い出

――昭和四十一年～四十二年

昭和四十一年入舎
山田幸生

私は昭和四十一年四月に西大久保寮に入舎し、その年の秋に調布市仙川寮に移転、その後、通学時間が長くなったこともあり、翌年七月ごろには退舎した。従って、東京興譲館にお世話になったのは一年数ケ月であるが、その短い間に多くの体験をさせていただき、また、入学直後の慣れない東京での生活に多くの先輩や後輩に助けていただいた。この間のいくつかの思い出を記憶を辿って記してみたい。

私の寮生活で最初に思い出すことは、寮生およそ五名で結成したハワイアンバンドである。スチールギターにのめりこんでいた先輩がリーダーとなってバンド（名称：リリー・アイランダース）を結成し、私は誘われてウクレレを演奏することとなった。上手下手は別として、二年目の夏には米沢の納涼祭りの際に、松ケ岬公園のお堀に浮かべられたステージで演奏したことが記憶に残っている。私は数年前より「六十歳の手習い」でバイオリン演奏を習い始めたが、ハワイアンバンドの体験がこの年齢で習うことへのためらいを吹っ切ってくれたのかもしれない。

西大久保の寮からは、多くの寮生と連れ立っ

看護学生寮（睦寮）の女性たちとの合同ハイキング
（高尾山）の集合写真（昭和42年5月14日）

て羽村に行き、多摩川の河原で芋煮会を行った。中央線の電車に大きな鍋を持ち込んで物珍しがられたが、少し恥ずかしかった記憶もある。米沢出身者は秋に芋煮会を行わないと冬を迎える心の準備ができないというのが普通ではないかと思う。私は就職してからも、つくばの研究所時代には毎年、近所の仲間と茨城県内の適当な河原で芋煮会を開催した。また、二〇〇一年に電気通信大学に赴任してからは、毎年、研究室の学生らと多摩川や近所の公園で芋煮会を開催している。最近では卒業生も楽しみにしており、研究室の同窓会の様相を呈している。

合同ハイキングで行ったフォークダンス。最近の学生がフォークダンスを踊るなどとはついぞ聞いたことがない

西大久保の寮では、近所の看護学生寮（睦寮）の女性たちとフォークダンスや合同ハイキングを楽しんだこと、先輩らと一緒に歌舞伎町の寿司屋に入りぼられたこと、仙川の寮では、大人の経験をさせてやろうという先輩の好意で、一年生の同輩数人と共に寮の最寄り駅である仙川駅近くのバーに連れて行ってもらったことなども新鮮な体験として鮮明に思い出す。

現在、私は電気通信大学の教員を務めているが、奇しくも電気通信大学は東京興譲館と同じ調布市にあり、通学に利用した京王線を通勤に利用している。これも何かの縁であろう。さらに、電気通信大学の初代学長は物理学者の寺澤寛一氏であるが、寺澤寛一氏は何と米沢出身であることを最近知った。寺澤寛一氏は、名著「自然科学者のための数学概論」を著した高名な物理学者であり、この本は私が学生時代に一生懸命勉強した本である。Wikipediaで「寺澤寛一」を検索すると、

- 一八八二（明治十五）年七月十五日米沢藩士寺澤兵吉の次男として山形県米沢市上矢来町に生まれる。
- 興譲尋常高等小学校から米沢中学興譲館入学。
- 上京し一九〇二（明治三十五）年（十九歳）大成中学卒業後、（二十歳）旧制第一高等学校へ入学。

・一九〇五（明治三八）年九月（二十三歳）東京帝国大学理科大学に入学し……

とあり、その後、一九六九（昭和四十四）年に八十六歳で死去されるまで、輝かしい経歴が記されている。興譲館を卒業されてはいないが大先輩であり、米沢出身の大偉人である。寺澤寛一氏のことはほとんどの方がご存知ないと思い、この機会に紹介させていただいた。

以上、思いつくまま記述させていただいた。

（現　電気通信大学　教員）

東京興譲館寄宿舎時代の思い出

昭和四十九年東京興譲館入寮

相馬　茂二郎

九月下旬の某日、マニラ出張から戻った翌日に先輩の菅野さんから「もう原稿の締め切りが近いですよ」と寄稿の催促の電話を頂きました。頭の中は出張後の仕事の段取りや仕組みづくりでいっぱいになっていますが、それを振り切り、お世話になった興譲館寮開設百周年と米沢有為会創立百二十周年の記念すべき会誌に思い出を書く機会を頂いたのだから駄文であっても書かなくてはとの思いで筆を執っています。

当時を思い起すために目を瞑って、「東京興譲館寮の思い出は」と記憶を辿ってみました。いろいろな瞬間、瞬間のシーンが次々と入り乱れて心の中に浮かんできます。三十年以上経っても鮮やかに思い出の場面が浮かんでくるものもあれば、あやふやな断片しか浮かんでこないものもあります。でも嫌な思い出が出てこないところを見ると、総じて楽しく良き青春時代のひと時を過ごさせてもらったの

寮祭の折の花笠踊り

だなという暖かな気持がわいてきました。それと同時に、当時と現在の自分とを比較する気持が沸き起こり、ああ自分も齢をとったものだなというなんともいえない感慨が沸いてきました。大学を卒業して三十数年、わが人生に悔いありやなしや。ああすればよかったこうすればよかったと心の中に浮かぶものが沢山出てきます。でも、この寄稿は私の半生の反省記ではありませんので、もう一度東京興譲館寮の思い出に心を戻すことといたしましょう。

最初心に浮かんできたシーンは毎年恒例で十一月下旬に行われていました寮祭のシーンです。仙川の駅前から寮までの花笠踊り。山形から取り寄せた藁の笠を被り白地に赤や青や黄など色とりどりにデザインされた浴衣をまとい、カセットから流れる花笠音頭に合わせ、寮生皆がたくみに踊りました。踊り開始に際して最寄の仙川駅前で日本酒を身体に浴びて大声で口上を切り、威勢よく踊りを開始したと記憶しています。そして無事寮まで踊り続け、たどり着いてなぜかとても嬉しい気持になりました。寮祭期間中は、共同の部屋を利用して寮生が自主的に居酒屋やスナック、喫茶店が開いていました。都内の女子大から友達を連れてくる寮生もおり、普段の男だけの寮とは雰囲気が一変し楽しい気持で一杯でした。夕方から開始するダンスパーティーはとても賑やかなものでした。首尾よくガールハントに成功する寮生もいれば、泣く泣く恨めしげに首をうなだれる寮生もいたことを思い出します。

日常生活は、真面目に大学に通学する寮生、寮で時間を過ごす寮生、アルバイトに精を出す寮生、サークルやクラブ活動に張り切る寮生といろいろな人がいたように記憶しています。でも金曜日や土曜日の夜になれば皆仲良く酒盛り。誰彼の部屋に集まり、車座になって政治を議論し哲学を語り合い、好きな女の子ができたとかいう話しもありましたが、殆どが失恋の慰めのほうが多かったように記憶しています。

こうやって記憶をたどっているうちに、当時の懐かしい顔顔顔が浮かんできました。歌がとてつもなく下手なのに酔うと直ぐ歌い出す安部善明さん（現三十郎さん）、時代遅れの歌をよく歌っていた。心の中に秘めたる思いがあったような気がします。小さい身体でも大きな笑い声で周りを元気付けていた後藤仁君。かれの失恋の日に近くの居酒屋「若葉」で酔っ払って動けなくなったところを、私が背負って寮まで運んであげた。私の首筋に涙

と鼻水と口から吐き戻したものをかけたのを覚えているだろうか。青木君は、後藤君と相部屋で私が酔っ払って帰ってくると怖がっていつも部屋に鍵をかけて身を縮こめて隠れていた。鍵を壊して部屋に入り、逃げる後藤君と青木君の二人の足首を私が右の手と左の手にそれぞれ掴んで、「力はペンよりも強し」などと吠えながら同時にぐるぐる振り回したら二人の身体が宙に浮いて回った事を思い出しました。ここで謝ります。ごめんなさい。木村君は普段は真面目によく勉強していた。さすが東大生、でも酒の誘いには付き合いが良かった。先輩の小野庄司さん、苔博士で好きな女の子に苔の説明ばかりしていた。でもよく明け方まで勉強なされていた。小野さんと東京教育大学コンビを組んで相部屋だった森谷君、マイペースを決して崩さなかった。古山さんとはよく近所の鳥九で美味しい焼き鳥を食べながら熱燗を飲んだのを覚えています。コンパでは渋い声で旅姿三人男を歌いとても上手でした、花札でにぎやかだった鈴木浩美さんや尾形さん、でも直ぐに静かになり、遅くまで勉強なされていた。司法試験を通る人は人知れず勉強をするということを知りました。島倉さんや後藤さん、遠藤さんなど錚々たる先輩もいらっしゃった。私と二年間相部屋であった鈴木和行さん、明治大学の先輩でもありお世話になりました。フェンシングで毎日夜遅くまで練習の様子でした。バイトの親分有路くん。就職してから直ぐにバイトの経験を活かして活躍していると聞きました。真面目なのに隠れたユーモアの寺島君、後輩では吉田健一君、高校のクラブ活動の後輩でもあり、随分一緒に遊びました。大学に入学すると直ぐにガールフレンドが出来、さすが二枚目と他の寮生をうらやましがらせていた。いつも彼女と夜遊びして寮に戻ってくるのは深夜だった。山口清樹君には囲碁の手ほどきを受けた。一人でテントを背負い丹沢に出かけては山篭りしていた。前山君は私と同部屋になった。真面目な好青年。「いちご白書をもう一度」に感化されてか学生運動にも出かけていた。そういえばロマンチストな土屋寛くん。米沢の漢方の耕一郎くん。そして、大物なのか鈍感なのかよく分からなかった大友君、その後八年間も大学に通ったとか。それから奇想天外な遠藤洋一君もいた。長持ち歌の上手い志村ケンに似た緒方くん。それからプレーボーイを自認する土屋君と皆川君の二人組み。そして、正義感の強い宮内良治くん。普段は力の抜けた感じであったが、男気は強かった。そして、二十台後半で急逝してしまった鈴木実く

ん。高校時代から私の友人で、よく議論した。ガッツがあり、私とはよきライバルだった。筋を通し、勇気のある人だった。長生きしていたら間違いなく社会で活躍していたと思う。残念だった。

こうやって思い起こしていくうちに当時の皆の顔ばかりか、声や息遣いまで思い出してきました。懐かしい。

私の頭も随分と白くなりました。もう五十五歳になりました。沢山の困難にも遭遇しました。腕白坊主的な性格はまだ残っているようですが、少しは大人になったと思います。

共に寮生活を送った皆さん、いかがお過ごしでしょうか。人生はまだまだこれからです。頑張っていきましょう。

（明治大学政治経済学部卒業
現在　経営コンサルタント）

東京興譲館寮のこと

東京興譲館　H9年卒
桜井　敏

米沢有為会創立百二十周年、興譲館寄宿舎設立百周年誠におめでとうございます。私は東京興譲館寮に四年間お世話になりました。今回は寮生活の思い出について寄稿のご依頼をいただきましたので、一部ではありますが述べさせていただきます。

寮では年間を通して様々な行事がありました。特に思い出があるのは、早朝より行われる館内の大掃除、蚊に刺されないよう完全防備で臨んだグラウンドの草むしりです。眠い目をこすりながらの大変な作業でしたが、近所のラーメン屋の昼御飯を大変楽しみにしつつ頑張ったものでした。終わったその後は夜まで爆睡をしておりましたが…。学生にもなってなぜ?と思うこともありますが、これも寮生活の規則の一つということで今でもいい思い出となっています。自分なりに結構楽しんでいまし

た。

続いては寮生が大好きな飲み会です。年数回、寮ではコンパが開催されますが、毎回夜遅くまでの宴会、二次会も近くの居酒屋でまた一杯…四年間でどのぐらい酒を消費したのだろうと今でも考えるところです。普段でもどこかの部屋では酒盛りが始まり、吸い寄せられるように部屋に集まり、くだらない話や時には政治等の真面目な話で盛り上がることも度々でした。一人暮らしでは中々味わえない経験ができたと思っています。

寮はテレビにも紹介されたことも思い出の一つです。地元の山形放送の情報番組で、東京にある県出身者が生活する寮を紹介するということで、ビデオカメラによる撮影依頼がありました。当時寮長だった私は寮生や寮母さんの出演のご協力をいただき、飲み会の様子や食事風景、周囲の環境等、寮の魅力を存分に伝えるべく、そして楽しみながら撮影をしたことを思い出します。地元での放送は結構好評だったと聞いております。

まだまだ書きたいことはありますが、字数の関係もありますのでこのあたりで。

大学を卒業して十数年が過ぎましたが、今でも先輩や同期の方々との飲みでは、必ずと言っていいほど寮生活の話題で盛り上がります。それだけ寮生活というものが魅力のあるものだったのだろうと感じております。

人とのつながりが希薄と言われる今日、寮という空間で規則と自由のある生活をしてきたことは私にとって大変貴重な経験であり、その経験がコミュニケーション等社会の様々な面で活かされていることを大変実感しているところです。

これからも興譲館寮には新たな歴史を築いていただきたいと思っております。そして益々のご発展を願い、私の文章を終わりとさせていただきます。ありがとうございました。

東京興譲館の思い出

――昭和三十八～四十二年頃

昭和三十八年入舎
平山和博

私は、西大久保寮の最後の頃に入舎し、四年生のときに新築の仙川寮に引っ越したという変化の時代を過ごしました。そのあたりの事を中心に書いてみます。

写真1は、西大久保寮の玄関前。全員総出で庭の草刈をしたときのスナップです。奥の屋根の高い部分が食堂で、折々のコンパや夜毎のネズミ（夕食の残りを胃袋に片付ける寮生）の活躍した場所です。

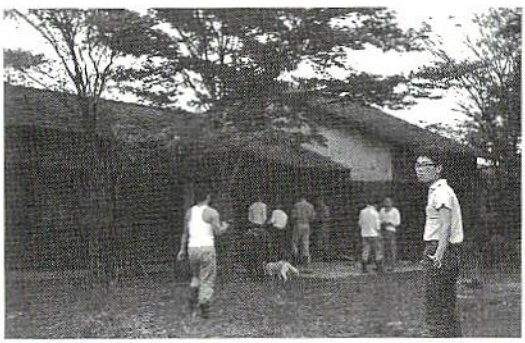


写真1　西大久保寮の玄関前

新入生コンパの際には、近所の銭湯に押しかけ女湯の入り口の戸を開けて大声で挨拶するのが新入生のノルマでした。勿論私もやりました。

写真2は、草刈に参加した面々です。昭和三十八年の一～四年生と英おばさんです。後に見えるのが戸山中学校。この庭では、毎週土曜の夕方、教育大の先輩の指導によるフォークダンスの集いが開催されており、近くの社会保険中央病院の看護学生寮の学生さんと寮生が手に手をとって、交歓を楽しんでおりました。このお陰で、二組のカップルがゴールインしています。

この西大久保寮も老朽化が進み、更新の話が具体化してきたのが、昭和四十年頃です。当時の小幡館長等のお骨折りで、西大久保の土地を売却し、仙川（調布市入間町）に土地を求め、鉄筋コンクリートの建物を新築するという構想が出てきました。小幡館長の「四十年後も通用する先進的な寮にする」という基本理念の下、設計が進められました。我々寮生の意見も反映していただくために、小幡館長の勤務先であった東京ガス本社に度々お

邪魔しました。当時は民間アパートでは珍しかった「水洗トイレ」を実現していただいたのが強く印象に残っています。

いよいよ西大久保寮を引き払う日の前夜、庭で近所でお世話になった方々や件の看護学生寮の面々を招いて盛大にお別れパーティーを行いました。キャンプファイヤーで盛り上がり、くべる物がなくなると、建物の板壁をはがして燃やしました。その晩は、寝ながらにして星が見え、時は晩秋だったのでとても寒い思いをしたのを憶えています。

写真2　西大久保寮の庭で

写真3が新築なった仙川寮です。昭和四十二年の正月は新しい寮で迎えられました。部屋数が倍近くになったので、四年生は卒業までの三ヶ月間一人部屋という特権を享受し、四階の部屋から西大久保とはまったく違う田園風景を楽しんだものでした。

移転の記念にと、西大久保寮跡から仙川寮まで甲州街道（東京オリンピックのマラソンコース）を仲間と走ったのもよき思い出です。

写真3　新築の仙川寮

東京興譲館寮のこと

昭和38年入寮
手塚　修

私が在寮させていただいたのは、昭和三十八年から四十一年の四年間である。世の中は、しかも大学は、六十年（昭和三十五年）安保と七十年安保の狭間にあって、騒然としていた。もっとも私が入学したときすでに、大学構内には扇情的な檄文バリケードが日常的にあったし、活動家の連中がハンドマイクで声高に喚いていた。だからそういうのが大学なのだと思っていたので、特に落ち着かない感じはしなかった。それでも、大学の食堂で、お互いの主義主張をなじり合いながら、闘争家同士で殴り合う現場に遭遇したり、学費値上げ反対闘争に関わって授業ボイコットに参加したりしたことは今でも鮮明である。

そのころ新宿区西大久保にあった東京興譲館寮は、平屋と二階建ての棟になっていたが、かなり老朽化していた。寮生にも様々な意見を求められたが、米沢有為会の方々のご尽力で調布市入間町に鉄筋コンクリート四階建ての新寮が建設され昭和四十一年（一九六六年）に完成したのである。西大久保寮最後の寮生であり、入間町寮最初の寮生にならせていただいた。

同時期の誰かが書いたら重複することになって申し訳ないが、寮の行事や生活について断片的ではあるが、いくつか記したい。草創期から行われていたようであるが、寮の旅行、那須や伊豆が記憶にある。日常と違った出来事、振る舞いが印象深い。社会保険中央病院付属看護学校の睦寮との合同フォークダンス。前庭でのミニ野球、キャッチボール。隣とのさかいの塀の上にさらに網ネットを設置したぐらい熱中した、というより、五寮対抗野球に情熱を燃やしたのかな。寮の界隈をぐるっと回るコースでの駅伝。新寮に移ることに決まってから、西大久保から入間町までの駅伝。新寮に移ってからはテニス。とにかく何事もおもしろがって熱中する奴が集まっていた。それから有為会支部総会、園遊会の準備、後片付けの手伝い、有為会会費の集金活動なども記憶に残る。

最後に私と寮について記したい。入寮させていただいて本当に有り難かった。中でも、先輩、後輩からたくさんの刺激をもらえたことが一番である。生来、ぼうっと

しているところがあった私は、漠然と理系の勉強ができればいいと思って上京したのだが、自分が気づかないようなことに関心を持って、勉強している寮のみんなに啓発を受けることが多かった。また寮生だからこそお聞きできた有為会の先輩の方々の話にやる気を掻き立てられた。学生時代は勿論、卒業後もいろいろなことに関心を持って積極的にやれたのは、館長を始めとする有為会の方々、寮生活、寮友のお陰であると思い続けている。

仙台興譲館の想い出

小幡　常夫

昭和十一年四月、東北帝大法文学部・法律学科に入学した私は、直ちに仙台興譲館に入寮を認められ、そのままお世話になることに成りました。当時の仙台興譲館は入寮学生が少ないため運営が困難となり、米沢地方出身者の外に、山中、上山中、寒河江中等の出身者が数名入寮を認められ、一緒に寮生活をしていたことが印象的でありました。これ等の諸君は、米沢有為会の設立目的や具体的な運営を良く理解し、何ら支障なく寮生活を楽しんでおりました。この事は地域交流を深める良い機会であったと思います。仙台興譲館の所在地は、繁華街のある市街地とは、かなりの距離があったため、余り市街地に出掛ける機会もなく、休日には庭内のテニスコートで仲間同志が軟式テニスを楽しんだり、近くの広瀬川河畔で散歩をしたり、又夜はレコードに依る名曲鑑賞に浸ったりしたことを想い起します。結構楽しい生活が出来ました。

当時は館長の社宅が庭内にあったため、館長さんと直接お話する機会が多く、有意義なことと思っておりました。

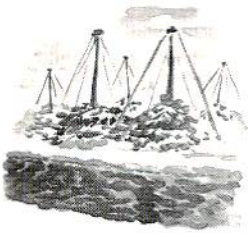
又、新年会等の会場には、第二師団の高級将官や、開業医の医学部大先輩等の有為会仙台支部幹部役員の方々が同席され、直接盃を頂いたり、有難い激励の言葉を頂いたり、大先輩のご好意には唯々感謝の想いを深めるばかりであります。

これ等の事は、後に東京興譲館長を拝命し、長年務めた際、寮運営の方針の中に、大きな影響を与えたことは否定できません。

さて仙台興譲館再建の計画は、小松支部長のご尽力に依るものでありましたが、旧館所有地の売買計画の一部に、不可解な点が見出されたので、有為会長として計画の一部見直しを指示し、再検討を命ずることと致しました。小松氏の努力を通して第二次案が提出され、いよいよ実施をみることとなりました。又新案の設計は、近代建築の権威者である御供政敏氏にお任せする事になり、見事な新館が出来上がることになりました。氏は現在仙台興譲館の館長を務めておられます。

寮運営は順調に進み今日に至っております。今後の見事な発展を期待して止みません。

これをもって仙台興譲館の想い出を終わりたく存じます。



仙台興譲館時代の思い出

西村　純

今年もまた暑い夏が過ぎて行った。その日は太陽のじりじりと照りつけるなかを、広瀬川沿いに歩む道から、空襲で廃墟となった町並みの彼方に仙台駅が見えていた。正午に終戦の放送があった日の事である。

旧制二高を卒業して、北五番町にある明善寮から角五郎丁の興譲館へ移ったのはその数ヶ月前の三月末であった。大八車を借りて、荷物を山のように積んで、市電通りを回り、最後に支倉通りから坂を降りようとすると、車を押さえる事が出来ず、取手を地面にすりつけながら、やっとの思いで、興譲館にたどり着いたことを思い出す。

興譲館はL字型の建物であった。入り口の門の右側に館長の九里先生〔第二高等学校の教授〕のお宅があり、続いて、二階建ての本館が建っていた。食堂があり、ついで談話室には米沢藩時代の火縄銃と、多分先輩が寄付された書籍、その中には寺田寅彦の全集もあった。引き

続いて、部屋が並び、約十名の寮生が、静かな時をすごしていた。

仙台が空襲を受けたのは七月十日のことである。それまでは、比較的穏やかな日々をすごして、友人と夜遅くまで碁をうったり、寺田寅彦全集を読みふけったり。あとで考えれば、仙台空襲までのごく僅かな平和なひと時であった。東京で三月十日の空襲を体験した友人が現れて、そのすごさを話してくれて、やがて庭には防空壕が掘られた。

日本各地でのB29の爆撃が増えるにつれて、興譲館でも、対空監視係を置くことになった。談話室にあるラジオを聞いて、警戒警報や、空襲警報が出たときに即時全員に知らせる役割である。

七月十日は私が担当の日であった。まず一機（二～三機であったか記憶が確かでない）のB29が仙台上空に近づくと、警戒警報、次いで、空襲警報。この一機は仙台上空を通過して石巻方面に飛び去り、引き続き百機を越えるB29が鹿島灘を北上中という情報がはいる。不思議なことに、この段階で警戒警報と空襲警報が解除された。

次に起きたことは、突然の爆音と照明弾投下。東一番町のあたりが昼のように明るくなった。空襲警報が発令され、鹿島灘を北上中の百数十機が到着して、仙台の中心部から焼夷弾を投下し始めたのである。

角五郎丁は町の中心部からはずれているので、ただ望見していたが、爆撃は渦巻き状に、中心部から少しずつこちらに向かってくる様であった。庭で眺めていた我々も全員防空壕に飛び込んだとき、鉄橋を列車が走るような轟音が、次いで、焼夷弾がおちて、地面が揺さぶられ、庭に植えたジャガイモの葉に火がついて燃えだしていた。何より大変なことは本館に落ちた焼夷弾で窓は飛び散り、建物が燃え出している事であった。全員総出で、バケツで水をかけるが、燃えさかる一方である。煙に巻かれて危険を感じ、目の前の広瀬川の河原に逃げることとなった。

角五郎丁は第二師団の裏手に当たる。師団の兵士が河原を逃げ惑っているのをやりきれない気持ちでみていた。後年になって知るのだが、南方戦線で全滅に瀕した第二師団には、もはや往年の姿はなかったのかもしれない。第二師団を爆撃したB29が飛来して探照灯に映し出された爆弾槽から焼夷弾がバラバラと頭上に降ってくるのは、生死を分ける事柄であった。

記録によれば、この日仙台を襲ったB29は一二三機で、約一万発の焼夷弾を投下し、住宅地の約二〇％が焦土と化し、約千名の死者が出たとされている。いかに爆撃が激しいものであったかを示す数字であった。

夜があけて、大学にむかう広瀬川の川縁には死者が数多く横たわっていたが、道を行く人は無関心であった。たった一夜の激しい環境の変化に人々の感性が失われていた。大学では、赤煉瓦の物理教室の建物が燃え、防火にあたった林先生が興奮の面持ちで、建物が焼け崩れていった姿を話してくれた。

興譲館は近くにあった空き家で、かつての東北大学の先生の大きな屋敷にしばらく仮住まいをしたが、終戦後は、操業を取りやめた長町の東北ゴムの社員寮に引き移ることになった。一年後には、これも解散し、興譲館が再建されたのは二、三年後のことである。

数年前、機会があって角五郎丁を訪れた。跡地付近は家が建て込んでかつての面影はなく、再建された興譲館を見いだす事は出来なかった。ともに過ごし、いまは故人となられた多くの友人の事、半世紀をこす時の流れの中に、未来を見つめながらも苦しい時代を過ごした青春の思い出が、ふと、わきあがってきた。広瀬川のながれは昔のままに、夕暮れの河原のさまが心に深く焼き付いていた。

角五郎丁追想

仙台舎生OB
今野多助
（旧姓：渋谷）

今年（平成二十一年）が医学部卒業五十周年だったので、学生時代に仙台興譲館に居住したのは半世紀以上前のことになる。記憶は薄れているが、当時の寮のこと、一緒に生活した人々のこと、近所に住む人々、通学路のこと、あるいは近くを流れる広瀬川のことなどが、断片的だが懐かしく思い出される。しかし、手元には当時の写真や記録は少ないので、思い出はすべてセピア色の記憶に頼ることになる。

昭和三十一年四月の入寮だったが、その頃の寮は現「角五郎一丁目」にあり、医学部まで歩いて一km余りの通学

路だった。澱橋を過ぎて当時の進駐軍司令官官舎(現知事公舎)までの急な坂道があり、朝の上りはきつかったが、帰りの下りは、眼前の広瀬川、その向こうの蒲鉾型の兵舎が並ぶ駐留軍の駐屯地や青葉山を眺めながらで愉快だった。澱橋近くの堤防沿いに野球場があり、そこで皆と一緒に遊んだことなどもあった。また、川端で聞いた河鹿蛙の鳴き声は忘れ難い。ウィーウィーと聞き做され、涼しげで綺麗な声で、風情があった。それまで聞きなれない鳴き声だったので、人に尋ねてカジカの鳴き声と知った時、魚の鰍しか思い浮かばず、それが鳴くのかと訝ったこともあった。

1956年度有為会仙台支部総会兼上杉神社遥拝式；1956.4.29
寄宿舎の裏庭に仮設された拝殿前の記念撮影

広瀬川は、「青葉城恋唄」ですっかり有名になったが、そこで歌われるように、三十年代の始めの頃は河鹿の住むような清流であり、暑い夏の日にはそこで泳ぐ人もあり、われわれも加わって泳いだことを覚えている。その後、川の汚れがひどくなって遊泳は禁じられたが、いつ頃からだったろうか。最近の報道によると、河川の汚れは改善され、鮭の遡上や産卵が見られるようになったという。また、宮沢橋付近の「貸しボート」の営業が解禁されて、かつての賑わいが戻っていると聞き、そこで遊んだ昔日を思い出す。

近所の食堂「喜久屋」の思い出は尽きない。営業されていた沼倉夫妻は、多くの寮生に年長の兄姉のように慕われた。お店の居間にあったテレビの前に陣取って、迷惑もいとわず、栃若全盛時代の大相撲を観戦しながら、栃錦だ、若乃花だとわいわい騒いだものだった。あんな振る舞いを思い出すたびに、それを快く許してくれた夫妻の温情への感謝の思いに堪えず、また忸怩たる思いも消えない。最近の沼倉氏の訃報は悲しい。

文学に酔い借家に泣いた
寮の思い出

伊藤和夫

大学に入学して猛烈に本を読み出し、その影響でやや文学かぶれになった私には寮での文集発行がとても嬉しいことであった。寮に咲いた文学の花（?）、文集「みすかんとす」の発行である。洒落た名前は外国語で枯れススキのことらしい。私の在寮中に第三号から第七号まで発行され、その五冊が何回かの引越しにも捨てずに大事にとってあった（写真）。おかげで四十年前の自分と寮の仲間に再会することとなった。私の文章は青臭くて恥ずかしいが取柄は純粋さだけ、仲間の文章は詩・随想・論文・小説など多彩でなかなか格調が高く面白い。しかし、情けないことに編集後記には度々「原稿が集まらない」との反省が書かれてある。理想と現実のギャップの中で編集者の苦労があった。私の退寮後、文集発行がいつまで続けられただろうか。

寮発行文集「みすかんとす」

三年生になり不肖私が寮長に選ばれた。その頃、東京興譲館寮が新築移転されて我が仙台興譲館寮にも大分古くなった旧館の建て替えの話が持ち上がった。とんとんと話が運び建設となったが、大変困ったことは完成まで寮生の半数が一時寮を出なければならなくなったことである。経済的に大変な寮生の中で、寮を出た人が安い経費で生活するにはどうするか、降って湧いた大問題に寮は蜂の巣をつついたようになった。寮生総会を何度も開いて対応策を練った。そして辿り着いた結論が大きな一軒家を借りて移転組が全員そこに入るということであった。寮生の結束を崩したくないという思いである。不動産屋を介して仙台市長町に一軒家を

借りた。ところが最高の策と思っていたのは寮長だけで、移転組は共同で自炊しなければならなくなり生活が大変になった。そのうちそこを出たいという者が出てきて数ヵ月後に賃貸契約を解消することとなった。その後は各自が下宿などを探して別々に暮らすことになったのである。新館が完成しても寮に戻らない者もいた。寮生活の最後にほろ苦い思い出が残った。青春真っ只中、喜びと苦労がまぶしくも懐かしい。

（昭和40年仙台興譲館寮入寮生）

「縁」の兜

仙台興譲館平成三年卒寮
亀岡　祐一

医学部在学中、私は仙台興譲館で六年間お世話になりました。

寮長を努めた大学三年生の時（昭和六十二年）には、角五郎一丁目にあった旧寮から現在の角五郎二丁目の寮への新築移転という、仙台興譲館寮の歴史的瞬間にも立ち会いました。

旧寮から新寮への引っ越しは、当時の館長の中條仁先生（前米沢有為会仙台支部長）のご指導のもと大学の夏休みを利用して行われましたが、目前に控えていた試験のため私だけが旧寮に残り、ひとり徹夜で勉強したことが昨日の事のように思い出されます。がらんとした木造の旧館の開け放した窓から、中庭の草木の匂いが漂い、「兵（つわもの）どもが夢の跡」という芭蕉の句がなぜか脳裏に浮かび、自然に涙がこぼれました。私たちが住まったころには老朽化が進み、先輩の部屋に皆が集って飲んで騒いでいたところ、床が抜け落ちてしまったり、冬には壁の隙間から雪が入り込んでいて、朝起きると廊下にところどころ白い山が出来たりしていたこともありました。それでも、旧寮は私たち学生にとっては、夢と希望が満ち溢れる青春のベースキャンプであり、お国なまりを気にせずに気心の知れた仲間と過ごせる空間は、文字通り第二の故郷でありました。

もちろん、寮が新築移転しても、長年培われた仙台興譲館の雰囲気が変わることはありませんでした。その大きな要因のひとつは、新寮を設計されたのが興譲館高校

ＯＢである御供政敏先生（現仙台興譲館館長）だったからだと思っております。御供先生は寮の行事には欠かさず参加して下さり、我々のことを予てから大変良くご理解下さっていました。そのことが、新寮の設計に反映されたことは想像に難くありません。

旧寮とは対照的な、打ちっぱなしのコンクリート壁が印象的な新寮が徐々に完成していく様を見て、在寮生は一様にそこでの新生活を想像して心を踊らせました。「モノトーンな壁にアクセントをつけよう」と、御供先生と私をはじめ数人の寮生が一緒に黄色く塗った内壁のボルト孔は、きっと今でも色褪せずに残っているに違いありません。

仙台興譲館で過ごしたことは、その後の私の人生を大きく変えることにもなりました。

平成十年、宮城県では初めてとなるホスピス（がん患者の緩和ケアを行う専門の医療施設）が、財団法人光ヶ丘スペルマン病院に開設することになり、その設計を行ったのが御供先生でした。当時仙台市内の病院で内科医として働いていた私は、御供先生の家に遊びに行った時にたまたまその話を伺い、強い関心を持ちました。先生が病院に私を推薦して下さったこともあり、開設と同時

写真は、新寮の地鎮祭の際のものです。当時、寮長を引き継いだばかりで、一緒に前寮長（武田政幸氏 前列右）、前々寮長（木村浩二氏 後列左）、中條仁館長（前列中央）、寮母の山崎さん（前列左）が揃って写っている貴重なショットです。筆者は後列右です。

に私はホスピス専任の医師として働き始め、現在に至っています。

大河ドラマ「天地人」の主人公、直江兼続公は、兜の前立てに「愛」の一字をかかげ戦場を渡りましたが、もしも私が自分の兜の前立てに文字をあしらえるとすれば、迷わずに「縁」を選ぶでしょう。高校卒業以来、米沢を離れて長く仙台で暮らしてきましたが、今の私があるのは全て故郷米沢と、米沢に縁（ゆかり）のある方々との縁（えにし）があったからに他ならないからです。

私にとって仙台興譲館寮は、まさに「縁」の兜そのものです。

「八年間」の在寮期間

仙台興譲館平成十一年入寮
四釜　淳悟

「置賜出身の男子学生なら入寮可能らしいけど、どうせ興譲館高校出身が暗黙の条件なんだろ。」今から十二年前の平成九年三月、長井高校生であった私は東北大学理学部への進学が決まり、故郷である長井市から仙台市に移り住むことになりました。その際、生活の基本である食事について大変心配しており、当初から食事付きの学生寮を希望していましたが、その時点で「仙台興譲館」の存在は知ってはいたものの、その「暗黙の条件」が気になり、選択肢には入れませんでした。実際当時の募集案内の在寮生の出身高校の欄には「米沢興譲館高校　二十名」とだけ書いてあったのを覚えています。そんないきさつで、大学の学生寮に入寮しましたが、入ってみるとそこは大学で勉強していく上で支障があると言わざるを得ない場所でした。そんな環境の中でしばらく生活をし、次に興譲館寮を思い出したのは二年後の平成十一年のことでした。「こうなったらあの『暗黙の条件』を壊してやる。」と思って寮の門を叩き、入寮させていただくことになりました。ただしそれ以前にも私のような入寮者もいたらしいので、「暗黙の条件を壊して」はいないのですが、現在私が「お前なんでここに居るの？」的な空気にものすごく無頓着になったのはこれに起因するものと思われます。しかし、せっかくだからと他の長井高校出身の同級生らも入寮させ、さらに翌年以降などは

高校への勧誘活動も行った結果、長井高校出身者が入寮してくれただけでなく、芋づる式に他の出身者までも続々と入寮してくるような寮となったのは、とても嬉しい限りでした。大学卒業とともに私は退寮いたしましたが、就職先となったのが仙台市内の企業であったことから、その会社を平成十九年に退職し帰郷するまで、食事だけは引き続きいただいていました（当然食費＋αは支払ってですが）。しかし、食事面でお世話になったことに加えて、特に就職してからの日々は、一日がただ「仕事→帰宅→就寝」の生活ではなかったことが私の精神面にとってとても大きかったということは否めません。特に誰かに深刻な悩みを相談したということではなく、寮での食事は、仕事から離れた場所でバカ話などする時間を与えてくれ、それが毎日のようにあったからこそ、「社員がすぐに病んでしまう」「人材の使い捨てをしている」とたたかれる会社で何年もやれたのだと思っています。当時の寮母であった森良子さんをはじめ、仙台興譲館をとおして私と関わっていただいた全ての方への感謝の言葉も見つかりません。八年間、大変お世話になりました。

憧れの「北の大地」での出発点

―札幌興譲館（米沢寮）の思い出―

上野（髙橋）和子

「オーイ、高橋、早く二階に上がって来い。自分の部屋にこもっているなら、寮から出て行け！」と山村先輩の厳しい声。私は慌てて二階の広間に行きました。昭和四十年の四月のことです。

北海道の大自然に憧れて、北大の理類を目指しましたが、一浪しまし

寮の前で　1966年2月

た。現役で入学していた同級の須藤さんが、わざわざ私の実家まで来て「男子寮だけど個室だから、是非米沢寮に」と両親に話してくれました。両親も「親戚誰もいない遠いとこだから、郷土の人が一緒の寮だと安心だない!!」と喜んでくれ、伊藤館長さんの面接を受けました。館長さん曰く「この人なら、寮の風紀を乱さないから合格」、つまり女性を感じないということで、男子寮に入れました。入寮の条件は「夜は二階の広間で皆とマージャンをやるか、酒を酌み交わすこと。女性という特権は一切なし（風呂を除いて）」でした。男・女関係なく、広い世界を見てみたいと思っていたので有難いことでした。しかし、現実は田んぼの中の一軒家で六歳まで育った為、引っ込み思案で、なかなか二階に上がれず、何度も先輩に怒られ、母の元に帰りたく三ヶ月ほど泣いていました。

馬場で　後が有名なポプラ並木
1965年４月

父（高橋祝・戦後新制になるまで米沢興譲館中学で数学の教諭）のように「のんべい」になりたくなく、マージャンに加わりましたが、とろくて皆に迷惑をかけ、私も興味がわかないので、お酒のグループに加わり毎晩飲み腕をあげました！（血は争えない・笑）

米沢寮の多くの先輩が馬術部に入っていたので、当然のように入り、朝四時起きして馬場まで走り馬の世話をして、疲れて講義中に寝るという生活が半年続きました。

私は従妹が出てきたため寮には二年しかいませんでしたが、

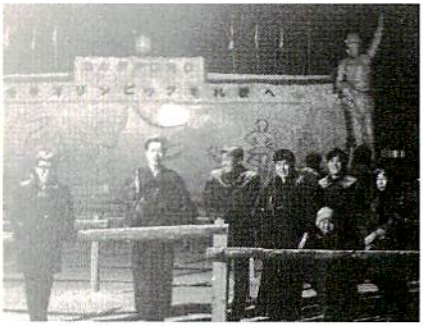
十五島公園でのジンギスカン 1966年６月

寮生皆で雪降ろし・1966年1月

皆と一緒の行事を沢山行いました。春の歓迎会、円山公園での花見、十五島公園でのジンギスカン、秋の北湯沢・洞爺湖巡り、私の実家での新年会、冬の雪下ろし、雪まつり、追いコン、等々、四十年以上経った今も懐かしく蘇ります。

二年間の寮生活のお陰で私の引っ込み思案は徐々に解消され、教育のいろはもわからず飛び込んだ教員生活の礎となりました。改めて入寮を許可してくださった伊藤館長さん、美味しいものを食べに皆で伺った登坂さん、優しくして頂いた寮母の松本さん、そして当時の寮の皆さんに感謝の気持ちで一杯です。

特例として寮に入れて頂いた私が今思うことは、米沢を遠く離れて学ぶ女子学生のために「住宅手当の奨学金」を米沢有為会として作ってほしいことです。（1965年4月から1967年3月まで入寮）



雪まつり・1966年2月

九条世界会議に家族で参加
2008年5月・千葉の幕張メッセ
左端が私

山形興譲館寮の思い出

雨田　秀人

山形興譲館寮は、昭和三十一年に、山形市内で病院を経営しておられた大先輩の篠田甚吉先生が中心になって創設なさって、お世話くださった。山形大学に通う学生のための寮であった。

この寮で、同じ釜の飯を食べ学んだ私達は勉学面でも、人格形成上も、身につけた事は多かったし、思い出も沢山あるが、その中から一、二ご紹介してみることにする。

同室生は、伊藤俊幸君とだった。彼は、現在酒田市に伊藤音楽院を開き、数多くの音楽家や愛好家を世に送り出す傍、交響曲から歌曲、童謡まで幅広い作品を中央へも発表している。山形交響楽団を立ち上げたのも彼で、宮城フィルの指揮を行うなど、地方から中央に発信する音楽家として注目されてきた。

当時は、山大特設音楽科の学生でありながら、小姓町のキャバレーのバンドマンとしてヴァイオリンやアコーディオンを弾きこなし周辺は何時も音楽があった。彼の音楽テストで、ベートーベンのヴァイオリンソナタ第五番「春」等の練習も部屋で行ったが、ご存知のあの爽やかなメロディがスムーズに進行するよう、私も一役買い、ピアノ代りに口ピアノで曲を奏で続けたものだった。実際に聞こえていた音はどうあれ、「春」の流れるような楽しさに、小鳥のさえずりや草花が咲き乱れる様を思い描きながら、飽きることなくラララ…で付き合った。また子どものために作曲した「鳩笛」は、今も広く歌われているという事だが、五十年経って口ずさんでも新鮮な響きがある。

自分の取り組むべき学習のため、独り机に向かうのは当然として、美術の仲間の創作場面に立ち合い、意見を求められ共に考えたり「条理」だ「非条理」だと口角泡をとばす議論に引き込まれたり、目ざす方向や窓口は違っても共に学び合った。朝野球や早朝登山、囲碁、将棋、麻雀の大会等も多く、勉学も遊びもみんな一緒の寮生活だった。

近隣の方々との交流も密で、寄って来る子ども達とは一緒に宿題をしたり、遊んだりする事も多かったから、秋の家族芋煮会には、次々声がかかり、ご馳走になったものだった。

一杯五十円の中華そばは、寮生特価四十五円のかも付けで、二十杯になるとご飯だけ持ってくるよう諭され、寮の小母さんが取り分けてくれている丼飯を抱えて行くと、そばのスープと漬け物をご馳走になり、千円以上払わないよう計らって貰った。

後半になって風呂も新設され、銭湯代十円が助かったが、「湯からあがった後、必ず薪をくべて行くのは高橋勉君だけだよ。」と小母さんに教えられ、共同生活でのふけさめのない日常行動のあり方や気配りの大切さを小さな事から一つ一つ教えていただいた。

五十年経ったが、山形興譲館寮での生活は、折にふれ懐かしく思い出したり、ありがたかったと思っている。

寮の前で小母さんと
記念写真？

一流料亭に篠田甚吉先生のご招待を受けた。３年以下は詰衿の学生服です。

奨学金貸与制度創設98周年記念

奨学金貸与事業の歩み（抄）

社団法人米沢有為会の育英事業の柱である郷土出身学生を対象にした奨学金貸与制度が明治四十四年に創設されてから、これまで九十八年の歳月を重ねている。その歩みは、明治四十四年から昭和十八年までの戦前期と、戦中戦後の休止期を経て制度復活を果たした昭和二十八年から今日までの戦後期とに、大きく二期に分けられる。明治から平成二十一年度まで、この制度のもとで修学した奨学生の総数は、延べ三百九十一名（実員数三百六十六名）を数える（現役学生を含む）。

本会創立百二十周年の画期に際し、主に戦前期における『米澤有為会雑誌』（当初、本会創立に伴い明治二十二年十二月に『有為会雑誌』として創刊。明治二十七年三月号から誌名変更。創刊以来、昭和十八年五月までの五十五年間で、第五百十五号までの刊行が確認されている。以下ひと括りして『雑誌』と略称）、戦後期における『社団法人米沢有為会々誌』（昭和二十七年七月復刊。年刊）及び『社団法人米沢有為会会報』（平成十六年六月創刊。年刊）の記録を手がかりにして、本会の奨学金貸与事業の歩みの大要をたどりたい。（文中、敬称略）

戦前期

社団法人米沢有為会が奨学金貸与制度を設けて貸費生募集を開始したのは、明治四十四年三月号『雑誌』上のことで、翌四月二十六日評議員会において、第一回の貸費生三名が決定された。この快挙は、突然に生起したのではなく、明治二十二年創立の有為会（明治二十五年に米沢有為会と改称）が、長年にわたって重ねた制度創設に向けた取り組みが実を結んだものであった。

制度創設への助走

本会創立当初から意欲的に編集発行が続けられた『雑誌』各号を通覧すると、本会の当初の課題としては、会員の増加を図るとともに、寄宿舎問題を解決することが最優先であり、併行して奨学金貸与制度の創設に向けて準備が行われていたことがわかる。

奨学金関連の記事が『雑誌』に初めて取り上げられたのは明治二十四年一月号で、米沢教育会による郷土出身

学生八名への学資貸費が報じられている。米沢教育会は後に財団法人となるが、もともと「上杉家及び元米沢藩人の有志者元米沢藩人の子弟にして将来の望あれども学資に乏しく其志を空ふする者あるを憂へ醵金して補助養成する目的」で設立された団体で、明治二十年三月に初めて三名の貸費生を募集した。

この米沢教育会の奨学金貸与事業は、本会の活動とはお互い独立しながらも密接な協力関係にあり、明治四十年代からは同会貸費生の第一次選考を本会が行うなどの経過を経て、昭和十六年度に育英事業合同の結果、同会が財産を本会に承継して解散されるまで、郷土出身学生を対象として継続されている。

明治二十六年の時点では、『雑誌』四月号に米沢寄宿舎の調査完了に関する記事掲載など、まずは寄宿舎問題が最優先の課題であったが、同時期、既に奨学金貸与制度に関する考究が始まっている。すなわち、前三月号において、本会員小林源蔵が「米沢教育会改良論」と題して米沢教育会の活動を論じ、とりわけその貸費制度を詳細検討する論説を寄稿した。その中で、貸費制度を「教育会が書生に学資を貸付するの方針は、米沢の直接の利益にのみ拘泥せず」「単純に人材養成を旨とし、人々の頭脳に重を置き、人物の選択を厳重にし、無資力なる最優等の学生に学資貸付の月桂冠を被らしむる」にありと結論する。小林源蔵は、後年の寄宿舎開設段階の会計部長を経て、明治四十四年の本会の奨学金貸与制度創設に際しては総務部長としてその強力な推進力となった（その後、明治四十五年から大正六年まで衆議院議員）。

一方、明治三十四年には、元米沢尋常中学興譲館財団から寄贈の財産及び株式会社米沢義社からの寄付金をもって米沢興譲館財団が設立され、目的として学資貸与が掲げられて、その育英事業が開始されている。その直後から、その貸費生の選択を本会が行うよう働きかけしたい旨の総会可決が行われるなど、奨学金貸与制度に対する本会の強い関心がうかがえる。なお、同財団は、後に教育財団興譲館となり、その後、昭和十六年度の育英事業合同によって解散され、その育英事業は、その財産とともに本会が承継することになる。

明治三十六年一月号には、後に［東京］興譲館寄宿舎の初代館長となった教育学者の吉田熊次が、当時の置賜地域における貸費制度について、米沢教育会（広く文武の学生の養成を目的）、置賜武官養成会（専ら武官の養成を目的）、米沢興譲館財団（専らその株主の子弟の要

請を目的）、各郡における有志団体（例として東郡の主に農学校生徒に貸費の制）の既に四種の制度があり、そして米沢有為会が計画中であることを記している。

規則中に追加規定

明治四十年に入り、奨学金貸与制度の創設を目指した動きが具体化し、同年八月の総会において規則［会則］改正が諮られ、新たに「本会は別に定むる処の規則により学生に貸費の制を設く」の一条が追加規定された（この条項は、明治四十二年十二月二十四日付で社団法人設立認可された新定款第八条にそのまま引き継がれる）。その趣旨としては、「学資貸費の制や実に時代の要求に駆られて現はれる。今や郷里の青年にして笈を大都に負ひ学を学び業を習ふもの日に益々多きを加ふ」、既に米沢教育会が貸費生を募って学費欠乏の学生を助けているが「元より日に月に増加しつゝある学徒の要求を充たす能わず。中途にして資に窮し、或は始より資なきを以て有為の身徒に田圃の間に老ゐんとするもの亦漸く増加せんとす。資力今や内に充たんとする本会は其力の一部をこの目的に使用する」ことはまさに「郷土の為に慶賀せざるべからず也」と述べられ、ただし「其の実施の期日に至ては尚多少の歳月を要するべきは勿論なり」とも注記されている。

本会が早くから奨学金貸与制度の必要性の認識を共有しながら実施に踏み出せなかった理由は、ひとえにそのための財源に見通しができなかった事情による。当時最優先の東京寄宿舎を設置する懸案には実現目途が立ちつつあったが、そのためにだけでも多額の経費を必要としていた。結局、寄宿舎建設のための土地確保は上杉家からの援助により、また、建設費は米沢興譲館財団からの借入金で当面賄われる。興譲館寄宿舎は明治四十一年四月三日、開館式を迎えた。

奨学金貸与制度を実施するための財源に見通しがついたのは、明治四十三年七月に発表された「米沢有為会第二次拡張」計画が実行された結果である。その主意書において、会の資金を充実増強することにより、当時の債務を軽減し、寄宿舎を完備し、更に舎生の負担を軽くするとともに、「貸費の方法に依りて育英資金に当て、多くの人材を我郷より輩出せしめて、以て本会の目的を現実にする」ように「学生に学資の貸与を主眼とし更に育英上幾多の企画を向て新なる施設を為さんことを期」し、広く会員に向けて醵金の呼びかけが行われた。明治四十

四年一月の東京部（現・東京支部）新年宴会において、小林源蔵総務部長が新年における重大事業を挙げ、資金の充実によって貸費を実行すべきことを力説し、「第二次拡張」による寄付金により、寄宿舎開設時の借入金の償還をはじめ、当面の所要経費を賄ったうえで、その残余を財源として新たに奨学金貸与制度を実行することを述べている。

制度の発足

いよいよ明治四十四年三月号の『雑誌』巻頭に「貸費生募集広告」及び「本会貸費生募集の開始」の記事が掲載された。貸費生募集の方針として「郷里子弟の為に育英の方針に貢献するは、地方団集の経営として最も其所を得たるものにして、本会が寄宿舎を建設し、特に教育部を置て此の目的に尽瘁する所以、亦此に見る所あれば也」、郷里に既に育英事業に取り組む機関はあるが、残念ながら「微力到底衆望を充す能はず」「其要趣たる親しく郷里の現状と貸費希望者の将来発展の要路とを講究し、慎重慎議広く人物を養成するの途を計」ることにあると記されている。第一回の貸費生（東京高等工業学校入学生及び高等学校志望生二名）は、四月二十六日評議員会において決定され、『雑誌』五月号に報告された。

同時に、「米沢有為会貸費規則」が新たに制定されている。この規則には、貸費の金額が「一名一ケ年百五十円以内」とあるが、実際の年額の多くは百円であったことが記録に残っている。当時は、七月中旬から九月上旬までの二か月間は夏休みで、貸費はその期間を除く年十か月、月額にして十円であった。当初の興譲館寄宿舎生の支払い額は舎費三円（明治四十四年からうち一円について本会が補助して二円に減額）と別に食費六円であり、明治四十四年秋の寄宿舎報告によれば「即ち吾等は月八円にて東京の真中に生活し得る様にして戴きたるわけに候」という時代にある。当時の東京帝国大学学費は年額五十円、米沢教育会貸費額は月六円であった。

戦前期における制度の変遷

以上に概観したように、明治四十四年に本会の奨学金貸与事業が開始され、その後、大正九・十両年の募集中止と戦中・戦後約十年間の空白を挟みながらも、今日に至るまで、本会の中心育英事業の一つとして維持継続されてきたことになる。事業発足から今日に至るまでの本会奨学金貸与年額の変遷は、別表①のとおりである。

別表①
米沢有為会奨学金貸与年額の変遷

貸与開始年度	★貸与年額（返還年額）
明治44～大正10	★150円以内
大正11～昭和13	★200円以内
昭和14～18？	★300円以内
昭和28～35	★1万2,000円（1万2,000円）
昭和36～38	★2万4,000円（1万8000円）
昭和39～43	★3万6,000円（2万4,000円）
昭和44～50	★6万円（3万6,000円）
昭和51～53	★12万円（9万6,000円）
昭和54～63	★24万円（14万4,000円）
平成元～10	★36万円（14万4,000円）
平成11～	★48万円（18万円）

大正九年三月の『雑誌』第三百号記念号に掲載された「有為会小史」中の「貸費制度」の項には、「本会が創立以来二十余年……資金確立……第一回の貸費生を選定した。……育英事業漸く名実を備へ、有為会は遙に一路彼岸への光明を見出した。さあれこの航海は巨涙万波を越さねばならない。人材養成のユートピヤに達するまで幸多き航路を進ましむべき舟子の任務も亦重い哉」と記されている。「舟子」たる本会会員の総員の任務は、当時から今日まで変わらず、今後とも重く存在する。

いずれ戦前期においても、潤沢な財源を用意することは困難で、各年の募集人員の決定に当たり、目前の財源を考慮しながら慎重な検討が加えられていたことをうかがうことができる。例えば、昭和元年度においては「経費の関係上新規募集は不可能」であったが、その後、篤志者の寄付金で二名を募集したところ、応募者十名があって、その中から二名を選考した。ちなみに、うち一名は女子（女子医専生）で、本会奨学生としての女子第一号となった（戦前期における女子奨学生の採用は、結果としてこの一名のみに終わっている）。

本会活動に不可決の財源確保のため、戦前期においては、明治二十五年期の「第一次募集」、明治四十三年期の「第二次拡張」、大正十二年期の「第三次拡張」、昭和十二年期の「第四次基金募集」の四回にわたり、会員向けの募金活動が行われている。毎年会費とは別個に、大型募金に応じた会員からの醵金によって、育英事業をはじめとする本会の活動が成り立ってきた。同時に、個人篤志家の大口寄付も熱望され、それに応じ、昭和十七年度に椿宮太郎・浜田五左衛門・高野源五郎・猪俣政次郎の四氏から奨学基金として各一万円が寄せられた。

なお、戦前期における本会活動の財源の一部として、明治四十四年度以来、数次にわたり山形県費補助があっ

た。これは、それぞれ郷土出身学生の育英事業に取り組む村山同郷会、荘内同郷会及び本会の三法人が連携して県当局に働きかけて実現している。

育英事業の合同

戦前期における歩みとして他に特記されるべきは、昭和十五年度において、地域の育英事業の担い手として半世紀前後の歴史を持つ財団法人米沢教育会及び教育財団興譲館と本会との育英事業合同が図られた結果、前二法人が解散、それぞれの資産が本会に寄贈されて、昭和十六年度以降、本会が二法人による育英事業を承継することになったことがある。

この育英事業合同により、本会の教育基金は、米沢有為会分十三万二千円余、財団法人米沢教育会寄付分四万九千円余（うち貸費金一万六千円余）、教育財団興譲館寄付分八万九千円余（うち貸費金一万二千円余）を合算し、合計二十七万一千円余の規模となった。昭和十六年度収支予算によると、収入合計一万三千百六十九円（利息及び配当九千三百三十七円、貸費償還三千三百円、県補助五百三十二円）の中から支出として育英金一万二千六百三十七円を計画し、全額を一般会計に繰り入れた結果、一般会計の収入合計は二万二百九十一円余で、その中から支出内訳として貸費五千百六十五円、給費九百九十円を計上している。

なお、事業合同されるまでの教育財団興譲館の貸費生実績は百五十四名、財団法人米沢教育会の貸費生実績は二百三十六名であったことを、昭和十六年度本会庶務報告は報じている。ただし、昭和十七年三月号の『雑誌』上の米沢教育会の明治二十年創設から昭和十五年度までの貸費生謝恩会が昭和十六年十一月二十五日に上杉伯爵を迎えて行われた記事には、二百四十六名の貸費生名簿が掲載されている。

戦前期における貸費生

現在、市立米沢図書館所蔵の『雑誌』は、昭和十八年五月刊行の第五百十五号までであり、その後、戦後の会誌復刊までの本会の動きを知ることはできない。現在知りうる限りで、明治四十四年度から昭和十八年度までの三十三年間の貸費生の合計数は、延べ百三十一名（うち女子一名）、実員数百二十名（うち女子一名）にのぼり、貸費総額は、推定で七万円規模となる。

貸費生の卒業学校の内訳としては、昭和十六年度末現

在の庶務報告調べによれば、官立大学四十三名、私立大学五名、高等学校二名、高等師範学校三名、教員養成所二名、官立高等専門学校二十五名、私立高等専門学校四名と記録されている。

なお、以上の奨学金の貸与制度のほかに、昭和十四年度から給費制度が一時的に実施された。昭和十四・十五年度においては一名毎月四円、一年十一か月分を米沢教育会及び本会が各半額負担して給与、育英事業合同後の昭和十六年度においては一名毎月四円五十銭を給与している。以上は米沢・長井の両中学校の生徒を対象としており、三か年で合計五十六名、金額二千五百七十四円が給付された。昭和十七年度以降は、米沢工業、米沢商業、置賜農の各学校の生徒にも対象を拡大して、合計二十名を選抜し、千五百三十円の予算を計上している（昭和十八年度予算は千六百円）。

戦後期

戦時下と終戦直後における活動の困難な時期を経て、関係者の努力により社団法人米沢有為会の戦後復興が図られた。終戦直前の空襲によって、本会の活動拠点である東京・仙台の両興譲館寄宿舎が空襲によって灰燼に帰したことから、戦後復興第一の課題は、会員の増加及び寄宿舎の再建の問題解決にあり、そのため「米沢有為会拡充運動」の取り組みが行われた。奨学金貸与制度については、昭和二十五年八月に決議された改正定款（同年十二月認可）の第四条（事業）第一号に「学資の貸給与」が当然に掲げられたが、会財政の窮状によって、その実施までにはしばらくの期間を要することになる。

戦後の本会活動を記録する『社団法人米沢有為会々誌』は昭和二十七年七月に復刊された。その第二号（昭和二十八年七月）には、昭和二十七年度時点の教育基金は合計三十九万七千円余で、内訳として公社債・株式・預金三十四万二千円余とともに貸費金五万四千五百四十七円余が記録されている。この貸費金額が戦前期における奨学金貸与制度による貸費残額ということになる。この貸費残額は、昭和三十九年度になって戦前期旧貸費生有志（小幡常夫代表）から「返済充当」として全額が寄付されて解消された。

個人寄付金が当初財源に

戦後期における最初の動きは、「当会固有の貸費生制

度と別個」であるが、昭和二十八年四月に「故大滝龍五郎奨学金」が遺族からの当初寄付十五万円（後年に増額）に基づいて誕生して、毎年一名、月千円の貸与、卒業後は翌月から毎月千円の返還する制度が発足した。この制度に基づく貸費生第一号が誕生したことにより、本会の戦後期における奨学金貸与制度が実質的に開始されたことになる。

その後、昭和三十年度において「故近新三郎奨学金」（寄付十五万円）及び昭和三十一年度において「小野奨学金」（寄付百万円）がそれぞれ誕生し、前者により毎年一名、後者により毎年二名の貸与が開始された。以上のように昭和三十五年度までは、三種の奨学基金ごとにそれぞれ貸費生が選考されている。

基金の合同運用・奨学金特別会計

昭和三十四年度における本会創立七十周年記念事業の柱の一つとして「本会固有の貸費金制度の復活」が掲げられ、募金活動の結果、会員醵出により奨学基金七十万円が積み立てられた。その後、昭和三十六年度に各奨学基金の合同運用が決定され、財源を一般会計から分離して「奨学金特別会計」が開設されると同時に、戦前の「社団法人米沢有為会貸費規則」が廃止され、新たに「米沢有為会奨学金貸与規則」が制定されて、ここに戦後期における本会の奨学金貸与制度が確立された。

この以後、この奨学金特別会計には各種の寄金が加えられたが、平成二十一年度現在で同特別会計に列挙されている奨学基金の名称及び現在額は、別表②のとおりである。その総額六千百九十四万四千二百七円（基金数三十四口）にのぼり、内訳は、個人寄付（二十七口）二千四百二十万円、企業・団体寄付（四口）四百八十八万円余、周年記念寄付（三口）三千二百八十五万円余となっている。

財源の仕組み

現行の本会の奨学金貸与制度は、上記奨学基金及びそれらの奨学基金が生み出す利子等を基礎財源にして、そのうえで卒業貸費生からの返還分を回転させる形で毎年の貸与が実施されている。

これまでの歩みを見ると、いずれ厳しい経済状況が続く時期において、まずは、郷土出身学生の育英事業を柱とする本会の活動に賛同する個人・企業・団体からの大口寄付により、本会の奨学金貸与制度が成り立ってきた

ことがわかる。大口寄付された関係者に対し、深甚の敬意と感謝の念を表さずにはいられない。

一方、本会の奨学金貸与制度は、周年事業として取り組まれる募金に快く応じた多くの会員の醵金に依っていることも明らかとなる。創立七十周年における七十万円、九十周年における五百万円、百周年における二千七百万円余は、本会に集う一人ひとりの会員が抱く育英事業を充実する必要があるとの想いの結集の成果ということが

別表② 現奨学基金の充実の歩み（寄付年度順）

基金名称	現在額	年度
大滝龍五郎氏奨学基金	150万円*1	昭和28
近新三郎氏氏奨学基金	15万円	昭和30
小野茂平氏奨学基金	100万円	同
70周年記念奨学基金	70万円	昭和34
川村亮蔵氏奨学基金	50万円	昭和36
山崎秀雄氏奨学基金	50万円	昭和38
旧貸費生有志奨学基金	15万円*2	同
村山義路氏奨学基金	20万円	昭和41
前山峯吉氏奨学基金	50万円	同
秋山武三郎氏奨学基金	50万円*3	昭和44
山口長次郎氏奨学基金	170万円*4	同
高梨湛氏奨学基金	10万円	昭和45
加瀬清雄氏奨学基金	50万円	昭和46
大熊こう氏奨学基金	50万円	昭和47
丸森道次郎氏奨学基金	50万円	昭和49
川崎勇・艶香氏奨学基金	300万円*4	昭和53
大国岩太郎氏奨学基金	105万円	昭和55
90周年記念奨学基金	500万円	同
相田岩夫氏奨学基金	300万円	昭和57
加藤八郎氏奨学基金	200万円	昭和60
高橋与市氏奨学基金	30万円	昭和62
㈱キムラ奨学基金	200万円*4	昭和63
100周年記念奨学基金	2715万7525円*4	平成元
山口政男氏奨学基金	30万円	平成2
鈴木忠喜氏奨学基金	50万円	平成4
三段埼俊吾氏奨学基金	150万円	平成5
大熊すき氏奨学基金	100万円	同
近野兼史氏奨学基金	50万円	平成8
九里尚知氏奨学基金	100万円	平成9
松田達氏奨学基金	40万円	同
石沢修一氏奨学基金	50万円	平成10
置賜建設㈱奨学基金	100万円	平成14
鈴木章氏奨学基金	100万円	同
斉藤絵画展奨学基金	173万6682円*5	平成16

*1 昭和41～57年度の大滝信四郎氏寄贈分と合算して現在額に
*2 他に5万4,547円寄贈で教育基金貸費金返済に充当
*3 米沢市から移管
*4 当初額から後年度に増額して現在額に
*5 正式名「斉藤千代夫チャリティー絵画展事務局奨学基金」

できる。貸費事業は上述のとおり特別会計に基づいて実行されて、会員納入の年度会費に依拠しないが、年度会費により本会の日常活動が活発に行われることを前提とし、そのうえで周年事業の際の募金活動における個人会員の多大の貢献により、育英事業に不可欠な財源充実が図られるという仕組みとなっている。

戦後期における貸費生

昭和二十八年度の第一号から平成二十一年度まで、戦後期の五十七年間、毎年の貸費生の合計数は延べ二百六十名（うち女子四十名）にのぼり、近年は学部時代の貸費生が大学院に入学して新たに貸費生となる場合もあるので、その重複を省いた実員数は二百四十六名（うち女子三十七名）となる。この間の貸与金額の総計は二億一千四十万四千円で、一方、平成二十年度までで総計一億四千八百七十四万九千円が返還済みである。近年においては毎年度約五千万円規模が貸費残額として見込まれる実態である。

貸費生の出身高等学校別の内訳は、次のとおりで、置賜全域に及んでいる（校名変更ある場合は現在校名による）。単位は名で、（　）内は実員数。

米沢興譲館延べ百七十九（実員百七十一）、長井二十二（二十二）、米沢東十四（十三）、米沢工業十（十）、米沢中央九（八）、米沢商業六（五）、南陽五（五）、荒砥三（三）、長井工業三（二）、高畠一（一）、小国一（一）、置賜農業一（一）、九里学園一（一）。このほか、置賜地域以外の学校出身者として、鶴岡工業高専二（一）、山形東二（一）、山形工業一（一）があるが、いずれも置賜地域の出身者となっている。

また、貸費生の在学校としては、大学では東北大学六十四名、山形大学三十八名、早稲田大学十四名、東京大学十一名をはじめ合計で六十一大学（二百三十九名）、大学院では東北大学院十名、山形大学院三名はじめ合計で八大学院（二十一名）から構成されている。

貸費生選考までの現状

現行の奨学金貸費生の募集から決定までの手順は、次のとおりとなっている。募集については、平成十八年度から、寄宿舎生募集と一括して募集要項等を決定して、「米沢有為会育英事業の学生募集」として地元の高等学校及び自治体並びに報道機関に周知を働きかけている。また、平成十七年度の新ホームページ開設後は、ネット

上での情報提供にも留意している。

平成二十一年度募集を例にとると、九月理事会において育英事業募集要項を決定。十二月に置賜地域の十四の高等学校長及び進路指導担当教諭あてに募集内容について周知方（校内への募集ポスター掲示を含む）を依頼すると同時に、三市五町広報担当者あてに自治体広報誌への掲載方を依頼した。併せて、この時期に米沢支部から地元報道機関あてに報道依頼を行っている。三月下旬の応募締切日までに応募者は本部事務局または米沢支部あてに応募書類を提出。提出書類等は、①願書・経済的理由書（所定用紙）、②作文「私の志について」（四百字）、③高校全学年の学業成績証明書（行動記録・健康状況等を含む調査書等）及び出身高等学校長の推薦書、④写真一葉、⑤家計支持者年収証明書（例えば給与所得の源泉徴収票の写しなど）。三月二十八日に教育委員及び教育部関係者による個別面接を実施し、書類審査と面接結果に基づいて選考書類を調整。これに基づき四月二十七日理事会・教育委員合同会議において審議して貸費生を最終決定。その後、本部事務局から本人及び保護者あてに通知され、必要書類が提出されて、五月から本人口座に奨学金振込みが開始されている。

選考方法としては、従来、書類審査が中心であったが、平成十三年度貸費生の選考時から、三月下旬に米沢市内で教育委員及び教育部関係者による応募者の個別面接を行うこととした。なお、平成十七年度貸費生からは応募書類として新たに作文（四百字）を加えている。

おわりに

平成二十一年二月二十八日、米沢有為会奨学生ＯＢ・ＯＧ会が「米沢有為会が行う学資貸給与事業その他の事業の充実及び発展に寄与するとともに、会員相互の親睦を図ることを目的」として設立された。学生時代に本会の奨学金貸与制度のもとで修学して社会に巣立った貸費生ＯＢ・ＯＧが、本会の発展に何かの役に立ちたいという熱い気持ちで同会を発足させたものである。来る平成二十三年度には本会の奨学金貸与制度百周年の節目を迎えることになるが、今後の奨学生ＯＢ・ＯＧ会の実り多い活動を期待したい。

郷土の先覚者我妻榮は、東京帝国大学の学生時代の大正七年六月号から助教授として欧米留学に旅立つ直前の大正十二年五月号までの五年間にわたり、『雑誌』の編集実務に関係している（大正十年十一月号からは編輯部

長）。帰国後の『雑誌』昭和二年六月号への「郷土の会」と題した寄稿の中で、米沢有為会の今日における存在意義は、ただ「郷土出身者の親睦の機関となることと郷土の青年子女の教育に努力することに存在するのでないかと考へる」「さし当り、郷土の……教育機関に経済的応援をなし、郷土出身の学資なきものに学資を給する等を最も重要なものとする。……今日の若い人々の間には、『郷土』といふ感激的要素は漸次なくなって居る。従ってこれを基礎とする事業は悉く無意味とならざるを得ない。唯郷土の教育といふ意識的目的の為に活動するに於てのみ、その存在意義を有する」と記している。

本会の奨学金貸与制度は、明治四十四年創設から今日に至るまで、郷土置賜全域の学生を対象にする育英事業として期待され、実際にも広く置賜全域出身の学生によって活用されてきた。今後とも、置賜全域の自治体及び高等学校をはじめ、さまざまな関係者の支援を得ながら本会として育英事業の充実を目指して取り組んでいく方向において、今や八十年以上も前の主張ではあるが、この我妻の指摘は現在でも生きている。

今後とも現代社会に少子化や人びとの持つ価値観の多様化等々が進む中で、育英事業を取り巻くさまざまな環境は、刻々と変化しつつある。いずれ、新しい環境に本会の育英事業、ひいては本会活動の全体を的確に対応できるようにするためには、本会会員の総員がそれぞれの問題意識をぶつけ合いながら、一致して将来を探ること以外にその解決の途はないであろう。その際の基礎資料の一つとして、本稿が何らかの役に立つことができれば望外の幸いである。

本稿執筆にあたり、金子芳雄相談役、奨学生OB・OG会からご教示を得たことを記して感謝する。

（大滝　則忠　記）

〈参考文献〉『有為会雑誌』、『米澤有為会雑誌』、『社団法人米沢有為会々誌』、『社団法人米沢有為会会報』、千葉源蔵編「米沢有為会九十年史抄」『社団法人米沢有為会々誌』復刊第二十八号（昭和五十四年六月）、松野良寅「米沢有為会百年の歩み」同前誌復刊第三十九号（平成元年十二月）、同「温故知新――回顧・米沢有為会の百十年」同前誌復刊第四十九号（平成十一年十二月）

米沢有為会百二十周年にあたって

米沢有為会
奨学生ＯＢ・ＯＧ会
会長　加納和子

このたび米沢有為会は創立百二十周年ならびに、寄宿舎創設百年、奨学金制度九十八年を迎えお祝いを申し上げます。創立から今日に至るまで会の維持発展に尽力された諸先輩には心からの敬意と感謝の意を表します。

昭和三十年から四年間、私は有為会の奨学金の貸与を受けて大学を卒業しました。当時は上京しての就学は困難を極め、東京の大学という選択肢は少なく、受験に関する情報は学校と受験雑誌から入手していた時代です。ところが担任の山田博夫先生（有為会奨学生ＯＢ）から大学の選択と有為会の奨学金制度について貴重なアドバイスをいただき、思いがけず上京して勉学する機会を得ることができました。すばらしい恩師と米沢有為会に巡り合えたことに感謝の気持ちでいっぱいでございます。その後社会人としてまた子育てなどで多忙な日々を送っておりましたが、一段落し少しはご恩返しをと思い微力ながら有為会に関わることになりました。その中で奨学生ＯＢ・ＯＧの方々に有為会に参画していただければとの思いで奨学生ＯＢ・ＯＧ会の立ち上げに協力し、本年二月二十八日「米沢有為会奨学生ＯＢ・ＯＧ会」が発足いたしました。しかし現状を率直に申しますとＯＢ・ＯＧ会の役員間ではかなり頻繁に率直でまじめな議論が交わされましたが、それが会に反映される機会がないまま、当会に対しては会員増強と寄付金集めだけが期待されております。もちろん会の維持運営のため会員増強は喫緊の課題ではありますが、それを従来通り会員個人の伝手を頼るだけでよいのか、その視点から一部の役員に提言を試みましたが、まず奨学生ＯＢ・ＯＧの会員を増やすようにとの反応でした。ということは奨学生ＯＢ・ＯＧは会員になるだけでよいことになり極論すれば「ＯＢ・ＯＧ会」は不要ではという意見も出て憂慮しております。寄宿舎生の場合は寝食をともにすることでお互い連帯感が生まれ、また会員との接触もありますが、奨学生と会の関わりはかなり希薄であること懸念します。会の恩恵を受けた寄宿舎生ならびに奨学生がＯＢ・ＯＧとして有為会に関心を抱き貢献できる手立てを今こそ積極的に打

つ必要があるのではと考えております。
いま米沢有為会創立百二十周年を機にその歴史を振り返ると同時に今後会がどのような方向付けをして次の世代に引き継いでいくのか、真摯に検討すべきではないでしょうか？その視点に立てばこの創立百二十周年はあくまでも次の時代への通過点であり、また新たな出発点でもあります。米沢有為会がこれからの時代に即した若い世代への貢献をどのように行うのか、余裕のできた世代が若者たちへ支援を通じてそれを次世代に引き継いでいく新たな手法を模索すべき時期に差し掛かっているように思います。今後多くのかたがたとの交流の中で率直な意見交換や議論を通して少しでもお役に立てればと考えております。
有為会が、今まで汗してこられた方々に深い敬意を払うと同時にこれから汗を流そうとする会員を受け入れる寛容のある会となることを心から祈念しております。

米沢有為会奨学生制度への提言

奨学生ＯＢ・ＯＧ会

ここに、米沢有為会百二十周年を迎えることが出来ましたことは誠に喜ばしく、奨学生ＯＢとして先輩諸氏のご努力とご苦労に感謝しつつ、我々は、次世代に対しこの活動の発展的持続性を目に見える形で継承して行かねばという思いを新たにするところです。
有為会活動は、会員間の親交を図ることは当然のことながら、その根幹には、やはり基幹事業である育英事業に関する将来ビジョンが、はっきりと確立しておらねばなりません。
時代に即した活動の将来ビジョンを明確化することにより、その活動が活発となり新たな賛同者及び有為会会員増に繋がり、ひいては将来の有為会発展が可能になると確信します。奨学生ＯＢ達からは、奨学生制度に関する前向きな将来に向けた活動プランがあるのなら、昔世話になったことに対する感謝の念から、出来る範囲で貢献したいという率直な意見が寄せられております。この

機会に、奨学金制度の将来ビジョンの検討を提唱致します。

奨学金制度は、創設期から戦中まで、そして戦後の再開時から現在に至るまでと発展を

遂げて参りましたが、戦後の再開時から六十年近くを経た今、将来に於ける更なる持続的発展を期するためには、教育環境を含めた社会情勢の変化、置賜地域の現状と将来像、及び米沢有為会の現状を考慮したうえで将来に向けた新たな戦略を検討し、それをこれまでの活動に加味して実践に移していくことが大切と考えます。その観点から、奨学OB達は、下記の項目について既に奨学生OB会での基本的検討を重ねて参りました。

この場をお借りして、更なる詳細調査並びに検討に進むべく、有為会本部並びに会員の皆様へその活動に関するご理解とご賛同をお願いする次第です。

1. 現役奨学金貸与者に対するフォローアップに関する検討

現役奨学生と有為会との繋がりは、残念ながらこれまで希薄な関係で推移して参りましたが、将来の有為会及び有為会奨学金制度の持続的発展を期するためにも現役奨学生に対するフォローアップは、是非とも必要なことと考えられます。

奨学金を貸与する側の有為会としての責任を果たすため、そして奨学生自身に自覚と更なる発展を促すためにも、奨学生として選考された時だけでなく、その後の彼らの勉学活動に対し有為会としてのチェックや奨学生達が期待するアドバイス等が自然に行えるように、現役奨学生との定期的交流会や有為会員による現役奨学生サポーター制度の導入を検討する。

2. 有為会奨学金制度への「地域連携・活性化」の導入に関する検討

①これまでの奨学金制度は、結果的に、置賜地域から外に出て活躍する人材を支援することが多かったように思えるが、今後は「地域で活躍する人材」をより手厚く支援すると運用枠があってもいいのではないかとも考えられます。また、地域活性化に資するのであれば置賜地域外出身者にも制度の対象に加えることも検討する。

②昨今の経済情勢を考えた場合、奨学金制度は学生にとってより重要度を増すと考えられますが、貸与額を

増やして条件改善をするのには限界があるのではないかとも考えられます。部分的にでも「給費制度」が導入できないか検討することも意味があると考えられます。給費制度はそれなりのコストが発生しますから、有為会会員のみならず、地元企業及び公共団体等の協賛等も視野に入れて検討することが必要でしょう。

③置賜地域の各公共団体にも各種奨学金制度が設けられておりますが、これらの制度と広い意味での相互連携を考えることによるより有効な奨学金制度の運用を検討する。

3．有為会奨学金制度原資の長期的補充及び拡大システム構築の検討

これまでの有為会奨学金制度の経緯を拝見いたしますと、創設期における先人方のご努力に引き続いて、多くの篤志家の方々による御寄付やそのお名前を付けた冠奨学金制度の導入、更には基金の効率的な運用等により貸与金額の増額にも拘らず順調にこれまで運営されて来たものと理解し敬意を表する次第です。

しかしながら、過去五十余年の状況を詳細に精査致しますと、平成に入ってからは将来に向けた長期的展望に立った奨学金制度原資の補充や拡大に関しての準備が、必ずしも為されてこなかったのが現状です。そこで奨学金原資に使用目的を限定した何らかの寄付金システムを長期的に有為会の中に構築し、全ての有為会員、一般篤志家、並びに関連企業、地方公共団体等に常時知らしめ、協力を継続的に喚起するような原資補充システムを完備することを検討したいと考えます。

その点からも、このような有為会に対する寄付行為が、確実に非課税対象と扱われるようになるべく、現在有為会本部において別途に検討並びに準備が為されております〝社団法人から公益法人への移行〟は、遅滞なく進められることを期待いたします。

4．奨学金制度の国際的人材育成プログラムへの適用に関する検討

嘗て、明治時代に有為会奨学金制度が発足した時代は、置賜地区から東京、関西地区に優秀な若き学徒を送り出し、彼らの将来に於ける日本の為、そして郷土の為の活躍を期して、本奨学金制度が利用されたと理解しております。

それから百年以上、戦後からでも六十五年を経て、時

代は変わり郷土を取り巻く状況も一変しております。国際化の波は、好むと好まざるに寄らず着実に押し寄せてきております。置賜地区から見た東京、関西地区の昔に於ける位置付けは、現在では今日の欧米あるいは日本の多くの近隣アジア諸国に相当すると言っても過言でありません。奨学金制度の百周年を二年後に迎えるに当たり、国際的人材育成プログラムへ貢献することを中長期的な有為会奨学金制度の一端に加えることは、意義のあることと確信いたします。ご承知のように、最近では山形県内（例えば山形市の工芸企業家や寒河江市の繊維産業経営者）でも国際的舞台で活躍し、そして彼らがその技量と若き情熱を郷土に持ち帰って国際的なビジネスを成功させている例が、世界的にも頻繁に報じられております。置賜地区にとっても、近い将来そのような可能性は、十分にあると考えられます。その為にも国際的人材在育成への何らかの貢献を、有為会奨学金制度の今後の一課題として考えておくことは意味のあることと思います。

その第一歩として、それらの具体的案及びその可能性について調査、検討を始めることは有意義なことと考えます。本件については、当然のことながら、地元の公共団体、教育界と有為会の協力体制があって可能となることは明白です。

これらには、金銭的な面だけではなく、ボランテイア的な支援活動も含めて考えることが出来るでしょう。具体的な検討項目としては、例えば、左記の点が考えられます。

—現役奨学生への海外留学支援
—海外留学生の置賜地区高校及び大学への勧誘と援助
—置賜地区における国際的人材交流・養成プログラムの支援

最後に、旧奨学生ＯＢ会として、あらためて本制度に対し心からの感謝を申し上げるとともに、今後の我々のささやかな貢献を含めて、米沢有為会奨学金制度のますの発展を期待いたします。

ゆるりと参ろう

愛媛大学名誉教授
金藤泰伸

多年、教員養成学部に地理学を講じて退職した直後、かつての教え子を含む現職の小中校教師諸君から助言を求められて、「間違い讃歌」なる短文を草した。これがある人の目にとまり、有為会へ同趣旨の寄稿を要望されたので、少々表現をかえて要点を再現してみる。

捷径を辿り速やかに正解に到るのを至高とするような感覚を子供たちに植え付け、長じた彼らを近代産業戦線上の尖兵となしてきた本邦にあっては、現場教師たちもそのおおいなる加担者であることは明白である。その功の面は高度経済成長期に頂点に達したかの観があったが、時移ろい、情勢が大きく転換してみると罪ないし負の側面がひろく認識されるに到った。

私自身は最初の単独著書を『高度経済成長の代償』と題したように、大学奉職の始めからこの方面に意を用いてきたつもりだが、教え子の多くは、時間がなく受験対策も考慮せざるを得ない状況で、在学中金藤からきかされたパスツールやペニシリン発見者のA・フレミングの話は何の役にも立たないと、思っていたようである。

フレミングがスピーディな常識的正解を尊しとする仁であったなら、実験の失敗にいたく興味を抱くことはなかった筈だし、恩師から繭を与えられて振って見、カラカラと鳴る音に「何が入っているのですか」と無邪気に尋ねた、L・パスツールの先入観のなさこそヨーロッパ蚕病克服の出発点である。蚕種紙産地としての置賜地方が製糸・機業地へ本格的に転換する契機にパスツールが関与していたことを、いま、どれほどの若人が知っていようか。

「間違い、脱線、寄り道、副産物‥‥」といった、一見、本道からはずれたかと思われ、見られるものが、意外に豊壌の大地であることに、我々は意識して注目する必要がある。

常識的正解のみを求めようと思えば浩瀚な百科事典数種でも取り揃えて自学すればよい話で、歴史が、社会が、大人たちが学校や教室を用意して子供たちを迎え入れるのは、「間違いや寄り道などの時空を保障してやる」ためのものではなかったか。

独創的な見地から根源的な疑問を発する児童・生徒を教室の安寧を乱し授業進行を邪魔する存在として忌むような現場教師を結果として送り出した（かも知れない）元大学教師の改悟ないし悔悟の弁である。

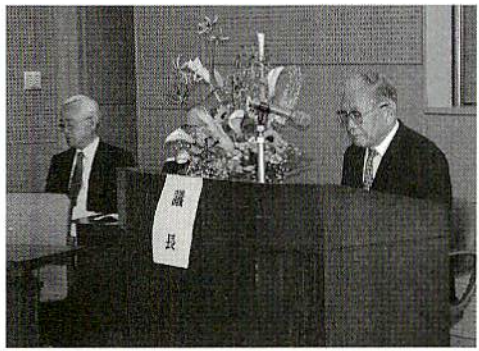
本部活動報告

定時総会及び付帯催事に関する報告

一、定時総会の報告

今話題の「天地人」でにぎわう米沢市「伝国の杜」において、恒例の第一二一回定時総会が、六月二十八日(日)十三時から同所大会議室で開催されました。

冒頭、委任状を含めた有効出席者が全会員一二〇七名中五八%にあたる七〇一名となり、定款第三〇条の規定により総会の成立が確認されました。特に今年は、米沢有為会百二十周年記念総会であること、さらに「天地人」に象徴されるイベントも数多く会場となった伝国の杜も賑わいを見せたこともあり、例年以上の多くの関係者が出席されました。



会議に先立ち、下條会長より、下記「重要課題と展望」を中心とした今後の活動方針が述べられました。

「重要課題と展望」

1.「米沢有為会創立百二十周年」記念事業

(1) 平成二十一年六月二十八日(日)、本年度総会終了後記念式典を挙行。

(2) 記念講演ならびに祝賀会を実施する。平成二十一年十一月十五日(日)開催予定。

(3) 記念事業

①東京興譲館、仙台興譲館、両寄宿舎のリニューアル工事を行う。

②我妻　榮記念館の補修工事を行う。

③特別会誌「創立百二十周年会誌記念号」を発行する。

④奨学金貸費制度の拡充を図る。

上記記念事業の実施のための協賛金募金を行う。

2. 公益法人認定申請の準備

①新「定款」案を完成する。

②公益法人に要求される組織・内部規約等の運営体制の検討を行う。

3．「東京興譲館再建計画」の実施
耐震補強工事ならびに諸補修工事の実施。

4．「仙台興譲館リニューアル計画」の立案と実施
具体的な計画の立案とそれに基づくリニューアルの実施。

5．「我妻栄記念館」補修計画の立案と実施
具体的な計画の立案とそれに基づく補修工事の実施。

6．「会員倍増運動」の継続的推進
第三次「会員倍増計画」を引き続き推進する。本年度目標一、四八〇名（対前年比20％増）

その後、下條会長の議長のもと多くの議案が審議されましたが、各議案とも原案通り承認されました。議事の概要および審議経過は次の通りです。

第1号議案　平成二十年度事業、業務報告の件

配布の米沢有為会会報に記載の平成二十度事業・業務報告にしたがって須貝総務部長より説明並びに報告があり、採決の結果全会一致で可決された。

第2号議案　平成二十年度決算及び監査報告の件

配布の米沢有為会会報に記載の平成二十年度決算報告書にしたがって鈴木財務担当理事より説明並びに報告があった後、監事を代表し西澤（榮）理事より監査報告があり、採決の結果全会一致で可決された。

第3号議案　平成二十一年度事業、業務計画（案）の件

配布の米沢有為会会報に記載の平成二十一年度事業・業務計画（案）について須貝総務部長より説明があり、採決の結果全会一致で本案は可決された。

第4号議案　平成二十一年度収支予算（案）の件

配布の米沢有為会会報に記載の平成二十一年度収支予

算（案）について鈴木財務担当理事より説明があり、採決の結果全会一致で本案は可決された。

第5号議案　役員改選並びに相談役推挙の件

配布の米沢有為会会報に記載の「役員改選並びに相談役推挙の件」について、須貝総務部長より趣旨説明があり、採決の結果全会一致で承認された。

第6号議案　各部ならびに委員会報告

報告事項として承認を求める件として次の四件が報告され、各件とも承認された。

1．東京興譲館建替え検討小委員会報告

佐藤毅委員長から配布資料「東京興譲館・仙台興譲館改修計画工程表(案)」により説明がなされた。本件は、米沢有為会百二十周年記念事業として取組むものであること、工事費用は有為会事業予算と協賛金の募集により充てること、東京興譲館は耐震補強工事及び大規模改修工事を、仙台興譲館は大規模改修工事を、平成二十一年八～十月頃に実施する計画であること等の説明がなされた。

2．公益法人認定委員会活動状況報告

大滝事務局長より、会報に記載の「『新公益法人に対応する米沢有為会のこれから』に基づいて、来年度申請に向けての準備状況の説明がなされた。

3．教育部報告

高橋部長より本年度奨学金生選定の経過報告がなされた。

4．組織部報告

鈴木脩二組織部長より、会報に記載の「第三次〝会員倍増運動〟の推進について特段のお願い」に基づいて、引続き第三次の活動を百二十周年記念に合わせて実施すべく案内の資料を各支部に発送し、各支部幹部に目標を達成するよう通知する旨の報告がなされた。

二、功労者、特別顕彰者表彰式

本年度の産業功労、特別顕彰として左記の方々に決定り、それぞれ表彰状と記念品が授与されました。

○教育功労賞　該当なし

○産業功労賞

鈴木高明 氏

精英堂印刷株式会社代表取締役

一九一五年の創業（今年で94年）。以来、日本酒のラベルをはじめとする各種商品ラベルやパッケージの印刷を行ってきた。特に、日本酒のラベルは全国からの受注があり、同社の主力製品となっている。

一九九七年、社長に就任した鈴木高明氏の経営判断により、「水なし印刷」に取り組んできた。その理由は、微細な印刷表現ができることと、有害物質を出さない環境対応型であること。パッケージ分野の水なし印刷ではパイオニア的存在であり、世界でもトップに位置している。

さらに、二〇〇八年には、第二十回世界ラベルコンテストにおいて二年連続六度目の最優秀賞、第十八回全日本シール・ラベルコンテストにおいて二度目の経済産業

受賞おめでとうございます

大臣賞（最優秀賞）を受賞するなど、その技術力の高さは、日本はもとより、世界に評価されるなど「ものづくり米沢」の誇りでもある。

城戸淳二 氏

山形大学大学院 理工学研究科 有機デバイス工学専攻

一九八九年山形大学高分子化学科に助手として米沢に赴任し、一九九三年、世界初、白色発光有機ＥＬ素子の開発に成功した（ノーベル賞に値する発明といわれている）。

二〇〇三年には山形県が設立した有機エレクトロニクス研究所の所長に就任、有機ＥＬの実用化に向けた研究にも取り組んでおられる。

また、有機エレクトロニクス研究所を中核に米沢周辺に有機ＥＬおよび関連の産業の集積地を目的とした有機エレクトロニクスバレー構想の推進にも関わって、昨年有機ＥＬの製造会社の誘致に結びつけるなど、産学官連携の地域再生の長期ビジョンを掲げ地域の産業振興に大きく貢献。大学発の大型プロジェクトとして全国的に注目されている。

また、中学生や高校生たちに有機ＥＬを通して科学の楽しさを積極的に伝えているなど教育的にも大きく貢献されている。

○特別顕彰者

置賜農業高等学校演劇部

第三十二回全国高等学校総合文化祭
演劇部門優良賞受賞

大久保琳太郎 君

第三十三回山形県選抜学童水泳記録会　男子50ｍ平泳ぎ優勝（32秒93　県学童新記録）
第三十一回全国ＪＯＣジュニアオリンピックカップ夏季水泳競技大会　11～12歳男子50ｍ平泳ぎ優勝

三、記念式典

米沢支部鈴木幸一常務理事の司会進行のもと記念式典が行われた。米沢支部梅津副支部長の開式の辞を経て、下條会長から百二十周年を迎えてのさまざまな思いをこめた式辞が述べられた。その後、山形県知事代理置賜支庁長三浦様、米沢市長安部様からの祝辞をいただき、さらに塩谷立文部科学大臣からの祝辞が代読された。米沢

支部本多副支部長の閉式の挨拶で百二十周年記念式典の幕を閉じた。

四、記念講演

本年の産業功労賞を授与された山形大学大学院教授城戸淳一先生による講演が行われた。先生の研究対象である有機ＥＬについての貴重な話のみならず、先生が研究のかたわら鋭意努力されている産学連携活動、中学生・高校生等への教育活動、さらには学生との心温まる交流の様子など、感動を与えられた講演でした。

五、会員懇親会の開催

総会終了後、会場を米沢城史苑に移し、会員懇親会が開催されました。

上杉名誉会長のご挨拶、来賓紹介、大関寄宿舎舎生ＯＢ会会長、加納奨学生ＯＢ・ＯＧ会会長のスピーチの後、小幡名誉会員の乾杯によって賑やかにかつ和やかに懇親会が進められました。

本部各部門の主要活動報告

○総務部

一昨年の第四回理事会（平成19年7月29日開催）において承認された新体制のもと、本部理事会・評議員会の日程あるいは当面の課題を考慮しながら、そのつど総務部会を開催してきました。

当会の運営・管理・経理業務や会員原簿の管理業務等恒常的な業務以外としては、特に、当会の重要課題である「公益社団法人」認定準備のための文科省指摘事項の改善活動、および「創立百二十周年」記念事業準備活動が挙げられます。今後も、当会活動の円滑化をめざして努力してまいります。

○組織部

⑴　第二次会員倍増運動の成果について

本会創立百二十周年記念事業の一環として展開された会員倍増運動の第一次運動期は各支部の格別のご協力を得て大きな成果をあげましたが、第二次運動期間（平成20年4月～21年3月）にあっても多数の新会員入会にご

尽力いただきながら各支部にては登録会員の調整等もあって退会者も多く実質的な増加はほとんどありませんでした。後頁に添付の「第二次会員倍増運動の結果表」をご参照ください。

⑵　第三次会員倍増運動の推進について

去る六月に発行の「米沢有為会会報」でご案内のように、目下（21年4月～22年3月まで）第三次会員倍増運動が展開されております。本年は百二十周年の当該年にあたり、秋には盛大に記念祝賀会が催されたことでもあり、また「天地人」の大河ドラマが好評裡に全国的に広く知れ渡ったこと等、米沢有為会への入会勧誘の動機づけにはまたとない環境にあります。当運動期間の残り三ヶ月、会員皆様の特段のご尽力により有終の成果を心よりご期待申し上げます。

（前組織部長　鈴木脩二）

○教育部

平成二十一年度奨学金貸費生選考の報告

本会は毎年度、置賜地域三市五町の出身及び出身者の子弟の大学生・大学院生を対象に、経済的には恵まれないが、学業優秀で将来性豊かな学生を選考して、月額四万円の奨学金を貸与しています。

平成二十一年度貸費生の選考経過としては、各高等学校長から推薦された応募者全員について、三月二十八日、伝国の杜会議室を会場に、高橋勉教育部長及び伊藤和夫・上杉季雄・上村勘二の各教育委員が応募書類審査と本人面接を行い、理事会・教育委員会合同会議で審議するための選考資料を調整しました。なお当日、応募者控え室において、梅津幸保本部理事及び米沢支部事務局の鈴木幸一・赤木義信の両会員から、応募者に対して本会活動についての概要説明を行いました。

そのうえで、四月二十七日開催の平成二十一年度第一回理事会・教育委員合同会議において、この選考資料に基づき審議を行い、次の九人を平成二十一年度貸費生として決定いたしました。（五十音順）

大木　健一（大東文化大学文学部中国学科三年・九里学園高卒・米沢市通町出身）

折原　寛樹（慶応義塾大学大学院理工学研究科入学・山形東高／慶応義塾大学理工学部応用化学科卒・米沢市李山出身）

川野　花（立教大学経営学部経営学科入学・米沢興

菅野　美郷（山形大学大学院理工学研究科数理科学専攻入学・米沢東高／山形大学理学部数理学科卒・米沢市上新田出身）

後藤　恭平（東北文化学園大学医療福祉学部リハビリテーション学科入学・米沢中央高卒・南陽市梨郷出身）

紺野　真由（津田塾大学学芸学部英文学科入学・米沢興譲館高卒・南陽市宮内出身）

鈴木　成明（山形大学大学院機械システム工学専攻入学・長井工業高／日本工業大学工学部機械工学科卒・長井市成田出身）

平中　慧（慶応義塾大学理工学部学門五入学・米沢興譲館高卒・米沢市林泉寺町出身）

松木龍太郎（慶応義塾大学文学部二年・長井高卒・長井市上伊佐沢出身）

平成二十一年度貸費生が応募の際に提出した小作文「私の志」は本誌一二九ページに掲載してあります。

本年度は、結果として例年に比して多くの貸費生を採用する結果になりました。これは未曾有の厳しい経済状況を反映して多くの応募があり、一方、前年度決定の貸費生人数が三名であったことと、本年度応募者には大学院生三名及び在学生二名が含まれていることを考慮して、貸費財源の当初枠を最大限に活用し、本年度については応募者全員を貸費生として決定できた経過です。

今後とも一層広く本会の貸費生募集について周知いただくよう、地元の各高等学校、各自治体及び報道各紙等の関係各位のご尽力をお願いすると同時に、会員各位のご理解と周囲への働きかけも含めて、よろしくお願い申し上げる次第です。

二十年度高等学校卒業生表彰（二十一年二月表彰）

本会では郷土の人材育英支援事業の一環として、米沢・置賜地区の高等学校（十三校）の当年度卒業生のうちから学校長の推薦により学業、部活動、生徒会等で他の模範となる特に優れた生徒を表彰しております。

今年度は従来にない十校から推薦があり、暫く有為会の育英事業について各高等学校への浸透の広がりが確認されて喜んでおります。

今年度の有為会表彰生徒は次のとおりです。

石山　駿―米沢興譲館高等学校

市川　実紅―米沢商業高等学校

後藤　理恵―米沢工業高等学校
中村　紗織―米沢東高等学校
色摩勇太朗―南陽高等学校
海老名大空―長井高等学校
髙橋　竜太―米沢中央高等学校
加藤　哲朗―九里学園高等学校
安部　成美―高畠高等学校
大木　千夏―置賜農業高等学校

（教育部）

○婦人部

米沢有為会百二十周年記念企画

婦人部・東京支部共催

越後上杉と天地人の跡を訪ねる越後の旅

百二十周年祝賀の年、奇しくもＮＨＫ大河ドラマで上杉の「義と愛」が全国に放映された。婦人部はこの機会に「天地人の史跡を訪ねる旅」を企画。東京支部の協力を得、九月八日～十日、二泊三日の旅程を実施した。東京駅発・着のバス旅行である。

参加者は会員十四名、会員外七名、合計二十一名の一行であった。主な観光周遊先は、下記のとおり。

●第一日目（魚沼地方主体）

関興寺　上杉謙信公、越山時の宿所に用いた古刹。東の雲洞庵と並び立つ名刹であり格式が高い。

雲洞庵　景勝、兼続が幼少時に学んだ古刹。ＮＨＫの天地人の初期の舞台となり観光客が多い。

長尾政景公墓所　景勝公の父。野尻池で謎の溺死をした。今回の旅では献花焼香を行った。

坂戸城跡　長尾政景居城。景勝公や樋口与六（後の直江兼続）もこの城で育った。

この日の宿泊は、**松之山温泉**　平安時代に開湯。近くに管領上杉房能自刃の史跡がある。

●第二日目（上越地方主体）

直峰城跡　南北朝時代、風間信濃守が築城。後に直江兼続の父樋口惣右衛門が御館の乱の功で入城。

御館（おたて）跡　謙信死後、北条からの養子の三郎景虎が立て籠もり、景勝に攻められ焼け落ちた館。

春日山城跡　今回の主なる訪問地であり唱歌「荒城の月」のイメージがぴったりの雰囲気。

林泉寺　謙信公墓前で献花焼香、下條会長と米野氏が「霜は軍営に満ちて」の詩吟を献詠。

五智国分寺・居多神社　親鸞聖人の遺跡多数。上杉氏とのかかわりも深い。

この日の宿泊は、**鵜の浜温泉**　昭和三十年代石油採掘で出た温泉。地引網とサンセットが売り物。

●第三日目（中越地方主体）

椚厳寺　川中島合戦の勇将柿崎和泉守の墓、春日山林泉寺で謙信公を幼育の天室光育師の墓あり。

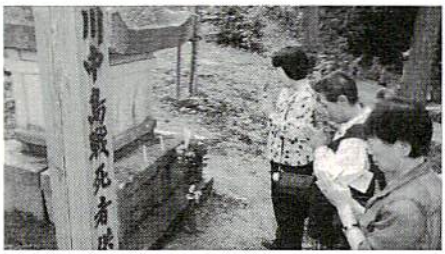
良寛記念館　出雲崎に残る資料館、他に良寛生家跡の良寛堂など。

与板城跡　直江家居城の本丸へ登頂、途中に「お船清水」など。他に与板歴史民俗資料館。

越後の人々は、長尾家を含む上杉一門に限りない懐旧と愛情を抱いている。天地人観光ブームで習熟したのか、各寺社、史跡での説明は堂にいっている。その言葉には、その地が生んだ先人に対する愛惜と誇りの心がある。史跡もしっかりと保存され喜ばしい。我々一行を米沢地方出身者の団体と知って言葉の端々に親しみと丁重な応対が感じられた。与板城の案内人は田中又市さん、曼鑠として八十六歳とは思えぬ言動で言う。「皆さんは米沢の方々なら、ご先祖はきっと上杉や直江に尽くされたでしょう。ありがとう」これには、時代を超えた感慨を覚えた。そして産土の地の喧伝に越後訛りの熱弁をふるった後「しかし、本物は全て米沢にもっていかれた」としんみり。春日山の案内人の吉村幸子さんからも、各地の説明者の口からも同じ言葉を聞かされた。われわれは「米沢人の越後知らず、そして米沢知らず」であってはならないなと痛感。そういう意味で今回の旅は、本当によかった。

（婦人部長　小山　泰）

坂戸城・お館跡にて　石碑の「坂戸城跡」は、名誉会長上杉邦憲様の筆によるもの



川中島戦死者供養塔にお詣りする会員たち（春日山林泉寺）

○公益法人制度改革に対応する準備状況について

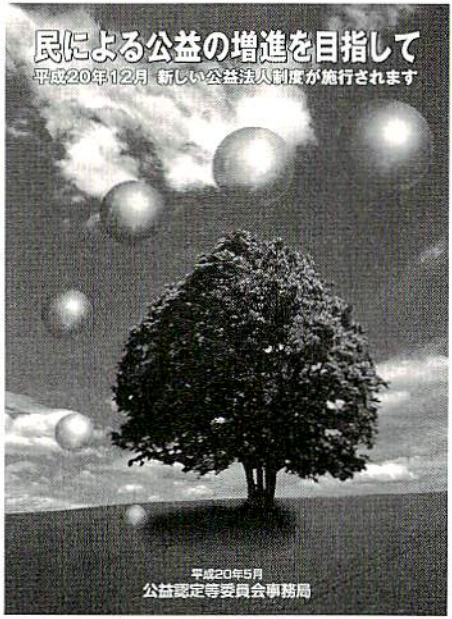
本会は、公益法人制度を抜本改革する法律の規定に基づき、平成二十年十二月一日から「特例社団法人」に自動的に移行しました。今後、平成二十五年十一月三十日までの申請・認定の手続きを通じて新法人移行が確定するまでは、従来どおり「社団法人」を引き続き名乗ることが認められています。

新体制の準備としては、理事会において公益社団法人へ移行する前提で数度にわたる検討を行い、総会に向けて会員全員に発送した『社団法人米沢有為会会報』第六号（平成二十一年六月）上に「公益社団法人米沢有為会定款・原案」（第四版）を掲載し、周知を図るとともに会員からの意見を求めました。

日程としては平成二十二年または二十三年四月の新法人移行を想定していましたが、二十一年二月二十三日理事会において当初想定を見直し、早くとも二十三年四月以降の新法人移行を念頭に準備を進めることになりました。現段階では、上記の新「定款・原案」（第四版）を基礎に認定申請書類を準備して、平成二十二年春からの検討手続きを経、六月開催の定時総会において新定款等を審議決定し、認定申請の段階に移ることができるように準備に取り組んでいるところです。

引き続き、新体制について、会員各位から多岐にわたるご意見をお寄せいただくようお願いします。

（公益認定準備委員会）



第２次〝会員倍増運動〟の結果表

平成21年４月27日現在　組織部集計

		倍増運動第1時終了時 20年３月	○第２次倍増運動期間の増加会員数 平成20年４月～21年３月				＊参考 20年度決算時会費口数 (21/3)
			入　会	退　会	差　引	会員数	
東京支部	通常会員	332	31	23	8	340	318
	特別会員	110	8	2	6	116	112
	個人会員計	**442**	**39**	**25**	**14**	**456**	**430**
	賛助会員	7	2	0	2	9	9
	計	449	41	25	16	465	439
米沢支部	通常会員	506	87	55	32	538	461
	特別会員	78	4	6	△２	76	73
	個人会員計	**584**	**91**	**61**	**30**	**614**	**534**
	賛助会員	16	0	0	0	16	16
	計	600	91	61	30	630	550
仙台支部	通常会員	20	13	2	11	31	29
	特別会員	42	10	0	10	52	57
	個人会員計	**62**	**23**	**2**	**21**	**83**	**86**
	賛助会員	6	0	2	△２	4	6
	計	68	23	4	19	87	92
京都支部	通常会員	25	0	3	△３	22	17
	特別会員	7	0	0	0	7	8
	個人会員計	**32**	**0**	**3**	**△３**	**29**	**25**
	賛助会員	0	0	0	0	0	0
	計	32	0	0	△３	29	25
北海道支部	通常会員	14	4	0	4	18	15
	特別会員	5	0	1	△１	4	3
	個人会員計	**19**	**4**	**1**	**3**	**22**	**18**
	賛助会員	0	0	0	0	0	0
	計	19	4	1	3	22	18
阪神・地方	通常会員	29	1	1	0	29	16
	特別会員	0	0	0	0	0	0
	個人会員計	**29**	**1**	**1**	**0**	**29**	**16**
	賛助会員	0	0	0	0	0	0
	計	29	1	1	0	29	16
全体合計	通常会員	926	135	83	52	978	856
	特別会員	242	22	9	13	255	253
	個人会員計	**1,168**	**157**	**92**	**65**	**1,233**	**1,109**
	賛助会員	29	2	2	0	29	31
	合　計	**1,197**	**159**	**94**	**65**	**1,262**	**1,140**

〔註〕○欄は各支部からの調査表による　＊欄は総務部の決算報告書による

平成21年４月現在

置賜地区等高等学校卒業生の寄宿舎、奨学制度利用者10年間推移表

（総務部調べ）

	H12年			H13年			H14年			H15年			H16年			H17年			H18年			H19年			H20年			H21年			合計(名)		
	東京興譲館	仙台興譲館	奨学金貸費	東京興譲館	仙台興譲館	奨学金貸費	東京興譲館	仙台興譲館	奨学金貸費	東京興譲館	仙台興譲館	奨学金貸費	東京興譲館	仙台興譲館	奨学金貸費	東京興譲館	仙台興譲館	奨学金貸費	東京興譲館	仙台興譲館	奨学金貸費	東京興譲館	仙台興譲館	奨学金貸費	東京興譲館	仙台興譲館	奨学金貸費	東京興譲館	仙台興譲館	奨学金貸費	東京興譲館	仙台興譲館	奨学金貸費
米沢興譲館高校	4	1	3	3	1	2	5	3	1	4	1	2	3	3	5	5	1	3	4	2	3	1	1	4	2	2	1	3	3	3	34	18	27
米沢東高校	1				1	1	2		1			2	1					1	1											1	5	1	6
米沢工業高校																	1							1							0	1	1
米沢商業高校	1			2		1			1												1							1			4	0	3
九里学園高校																	1											1		1	1	1	1
米沢中央高校													2	1	1				1			1	2		1					1	5	3	2
長井高校			2		3			2								1			1				1		1	1	1	3	1	2	6	8	5
長井工業高校			1										1								1										1	0	2
荒砥高校																															0	0	0
南陽高校								3	1		2			1								1									1	6	1
高畠高校																															0	0	0
小国高校																															0	0	0
置賜農業高校							1																								1	0	0
山形東							1									1		1	1							1				1	3	1	2
山形中央																1															1	0	0
日大山形																									1	1					1	1	0
山形工業																											1				0	0	1
その他													1									1						1			3	0	0
計（名）	6	1	6	5	5	4	9	8	4	4	3	4	8	5	6	8	3	5	8	2	5	4	4	5	5	5	3	9	4	9	66	40	51

『私の志』二十二年度奨学生の作文

川野　花

私は、長年目指していた立教大学の経営学部に無事合格することができました。そこで、一生懸命経営学を勉強したいと思っています。

経営学とは、経済学と少し違い主に企業のことを勉強します。マーケティング・会計・流通などの知識が絡んでおり、経済学より実践的な学問です。深刻な不況で中小企業のみならず大企業までもが次々と倒産を余儀なくされている今の時代、最も必要とされているのが経営学なのではないでしょうか。私はそれを学び、少しでも社会に貢献できたら、と思っています。

しかし、東京の私立大学はお金がかかります。両親は、お金のことは気にしなくても良いと言ってくれていますが、私は少しでも家族の負担を減らすために、ぜひ、有為会の奨学金を申請したいのです。

大学では、勉強はもちろん、遊びも、アルバイトもやりきって充実した学生生活を送りたいと思います。よろしくお願いします。

後藤恭兵

中学二年以来、理学療法士として地域の役に立ちたいと考えてきた。その後、二度に渡る職場訪問を経験し、患者とのふれあいを通して回復の喜びや笑顔を一番近くで分かち合える仕事であるというやりがいを実感した。以来、この道を目指したいと強く思いつつ今回の大学受験に臨んだ。

無事志望学科の試験を突破した今、今度は新たに国家試験の合格を視野に入れた努力が求められる。私は将来、実際の医療現場のリハビリテーションの第一線で活躍したいと考えている。そしてそのためには、四年間という大学生活において日々進展する最新の医療技術に対する常の学びを怠らず、限られた時間を決して無駄にしないということを強く意識しながらのステップアップが必要となる。

常時、具体的目標を見据え、その目標の更に一つ上を

行くような人間になり、周囲の人々から信頼される理学療法士になりたいというのが私の今の志である。

紺野　真由

高校生活で、高い目標を持つ仲間の中で学んだことは、とても良い経験となりました。また、バドミントン部に所属し、最後までやり抜くことが出来ました。私はこの四月から、津田塾大学学芸学部英文科に進学を予定しています。英語教育に定評があると伺っており、高校三年間で培った集中力や忍耐力を活かして、一生懸命学び、より高みを目指していきたいです。最終的には本や新聞の出版などの文章に携わる職業に就きたいと考えています。そのため、本をたくさん読み、特に興味のあるイギリスの文学作品について深く勉強したいです。世界を広い視野で捉えるために、留学の経験も積みたいと思っています。

平中　慧

私は一年間の浪人生活を経て慶應義塾大学へ進学することになった。私は今、慶應義塾大学に入学できることを嬉しく思っている。その理由は二つある。第一に、私は弁理士という職業を志望しており、慶應義塾大学から弁理士試験に合格する人数は非常に多いので、教育者が優秀であると期待できること。第二に、優秀な学生が多いので、切磋琢磨して勉強することができ、また一年生の時は、文系も理系も同じキャンパスなので、様々な学生と交流することによって自分の見解を広めることができることだ。

そして私が最も熱心に取り組もうと思っている事は、できるだけ早期に弁理士になるために勉強することだ。私は祖父が弁理士だったことをきっかけに、詳しく調べてゆき、弁理士とは企業の技術取得を助けることで、技術発達を助けるという、とてもやりがいのある仕事だと知った。だから大学生活では、より多くの弁理士の知識を身に付けていきたい。

大木健一

私は中国で生まれ、十二歳まで中国で過ごしました。祖母が中国残留孤児なので、十三歳の夏に日本人の祖母と両親と私は永住するため日本に来ました。

平成十九年に私は大学に入学しましたが、あまり裕福ではない生活の中で、両親が私を大学に行かせてくれたことを、大変感謝しています。現在私は、大東文化大学で中国の歴史や文化を学んでいますが、言葉だけでは通じ合えない考え方の違いがあることを知り、違う分野に見える文学、歴史も実は互いに影響しあっていることに気づいたのは大きな収穫でした。今、中国の歴史や文学を学んでいるのは、将来、海外で日本語教師になることを目指しているからです。そして日本と中国の架け橋になりたいと思います。

これからも経済的に大変なことはありますが、有為会の奨学金を貸与していただき、将来の目標実現に向け、頑張っていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

松木龍太郎

私が歴史に興味を抱いたのは、小学六年生の頃だ。六年生になって新しく加わった「歴史」という科目の最初の授業だったと記憶している。黒板一面に貼り出された、巨大なナウマンゾウと、それをとり囲む原始人達。かつて日本と大陸とは今よりもずっと近かったという先生の話。そのたったひとコマの授業の中で、私は一体どれ程驚き、感動したことだろう。それ以来、歴史の授業がある度に私はわくわくして期待に胸を膨らませ、そしてこう思った。「もっともっとたくさんのことを知りたい」と。

現在私は二年生への進級が決まり、四月からは各自専攻別に分かれる。考古学が私の専攻だ。卒業後は大学院に進み、研究を続けたいと考えている。あの頃の「知りたい」という気持ちが色あせない限り、私はこの学問に携わっていくつもりだ。

折原寛樹

私は今春から環境化学研究室に所属し、インドネシアの大気環境に関する研究を行う予定です。学部四年次は中国北京市の酸性雨に関する研究を行いました。近年、急速な経済発展の進む中国、インドネシアにおいては、工場および自動車数の増加に伴い、深刻な環境汚染が引き起こされています。特に中国の大気汚染は著しく、その影響は海を越えて日本にまで及んでいることが報告されています。

このように、環境汚染の問題は特定の国の問題ではなく、その原因となる地域は広域にまたがっています。しかし一方で、中国の大気汚染の解決に日本の技術が使われるなど、環境問題の解決法も多くの国や企業を巻き込んでいく流れがあります。私は修士課程を卒業後は、広い視野で環境問題の解決に携わることのできる職に就くことを希望しています。そのために、これからの二年間で知識を吸収し、国内、国外での経験を積み、自分の考え方を確立させていきたいと考えております。

菅野美郷

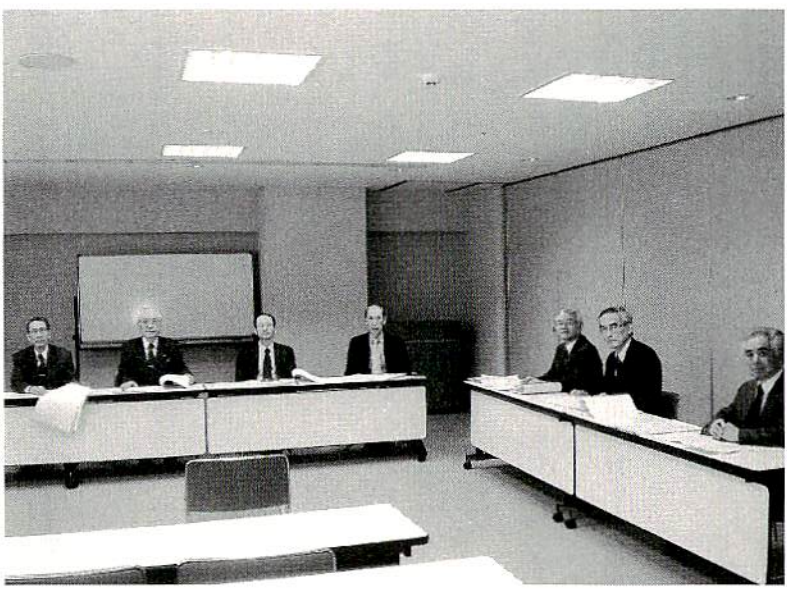
私の夢は中学生の頃からずっと変わらない。数学の教員になることである。高校数学に出会ってからその魅力にひかれ、高校の数学教諭になることを目指している。それからは出来るだけ多くの学生に数学の楽しさを教え、数学のことを好きになってもらえるような教師になりたいと考えている。また、私は山形県の教員になりたい。その理由は、今までお世話になった恩師たちの働く県であるし、自分の大切な人達が住む場所であるので、自分もここで働き恩返しをしていきたいからだ。前回の教員採用試験は、受験したが落ちてしまった。試験に落ち他の道に進むことも考えたが、どうしても諦めることが出来ず、自分の専門的知識向上のため大学院に進学を決めたので、これから二年間、精一杯勉強して自分の力を上げていきたいと思う。この気持ちを強く持ち、学業に励み、将来に活かしていきたい。

鈴木成明

私は大学四年間でたくさんの事を学んだ。それは学業からであったり、人と人とのコミュニケーションからだったりと、多くの経験が私を成長させてくれた。特に卒業研究ではたくさんの経験ができた。

私の研究は太陽光発電の研究であった。この研究から現在の地球環境問題の深刻さがわかった。このような環境問題を少しでも好転させるにはどうしたらいいかと考えていくうちに、環境問題に深く携わっていきたいと感じた。

私がこの春から所属する研究室は、豪雪地帯である山形の気候を利用した環境にやさしいエネルギーの利用の研究をしている。元々エネルギーの分野に興味があり、尚且つ、地元の環境を利用して行う研究に深い関心があるので、多くの事を学び、必ず地域の為になれるように努力していきたいと思う。



平成21年3月28日 伝国の杜 奨学生選考会場

支部だより

東京支部

平成二十年度の東京支部は、予定された行事諸活動を円滑に行いつつ、平成二十一年度の「創立百二十周年記念行事」に係る準備について、各実行委員メンバーのご協力を得て企画検討を重ねました。

平成二十年度も、会員の皆様、寄宿舎生、奨学生の方々のご参加ご協力に感謝申し上げます。

さらに、興譲館寄宿舎OB会、及び、新たに発足されました奨学生OB・OG会との、連携ご協力が図れました事に対しましても、あらためて感謝申し上げます。

東京支部の組織体制は、前年同様に特に変更はありませんので、活動の実行日順に報告致します。

二十年四月九日　監事による平成十九年度監査を東京興譲館にて
会計収支計算書等を調査して、監事承認

二十年四月二十六日　第一回理事会　東京文化会館
定期総会議案書の最終案を審議作成

二十年五月七日　「第二次会員倍増運動」推進お願い
情野支部長発信
（活動期間：二十年四月～二十一年三月）

二十年五月二十四日　平成二十年度評議員会及び定期総会　スクワール麹町
総会議案書等の評議、その後に、総会議案書を議決承認
総会後に恒例の新寄宿舎生（五名）と新奨学生（二名）の歓迎会

二十年　五月　三日　第二回理事会　東京文化会館
支部役員の業務分担、支部規則の一部改定について
創立百二十周年記念祝賀行事準備委員会の概要想定案説明

二十年七月二十六日　第三回理事会　東京文化会館
園遊会及び新年会の準備について
創立百二十周年記念祝賀行事準備委員の十名指名

二十年八月二十三日　創立百二十周年記念祝賀行事関連の素案説明
同　関連行事の実行委員選任について

二十年　九月十四日　山形県人関東連合会　ホテル

ニューオータニ
郷里出身者との親睦交流の会へ参加

二十年九月二十日　創立百二十周年記念祝賀行事準備委員会　東京興譲館
百二十周年に関する修祓式・講演会・祝賀会及び園遊会の企画検討
その後に、園遊会準備委員の打合せ会

二十年九月二十四日　やまがた育英会の紅花寮見学
財団法人やまがた育英会との連携について

二十年九月二十七日　第四回理事会　東京興譲館
創立百二十周年関連・園遊会・文化講演会・新年会等の打合せ

二十年十月十二日　有為会文化講演会　山大サテライトホール
「天地人主人公直江兼続」婦人部共催　講師は郷里の小野　榮氏

二十年十一月二日　園遊会　小石川後楽園涵徳亭
来賓の方も会員も多数のご参加で大盛況、
恒例の芋煮も大好評にて美味しく味わいました。
ご協賛頂きました方々へ感謝申し上げます。

二十年十二月二十日　第五回理事会　東京文化会館
創立百二十周年記念祝賀行事関連について
本部の公益認定準備委員へ三名推薦について

二十一年二月一日　新年会及び卒業学生の予餞会　スクワール麹町
会員の皆様と新年を寿ぎ、卒業の寄宿舎生（五名）と奨学生（四名）へ下條泰生会長と小森力雄相談役から、学生諸君へ餞と励ましの言葉を、さらに、寄宿舎生ＯＢ会長と奨学生ＯＢ・ＯＧ会長からも餞を頂いた。

二十一年三月二十一日　第六回理事会　スクワール麹町
創立百二十周年記念祝賀会実行委員との合同会議
東京支部主管としての行事全般に亘り内容確認について
婦人部共催の「景勝・兼続の足跡を尋ねる旅」企画について

平成二十一年度挙行の「創立百二十周年記念祝賀行事実行委員会」のメンバーをご紹介致します。
祝賀行事準備委員会　十名
委員長　情野文男
鈴木脩二　石原俊一　中川紘一　山方雅晴

沼澤研一　渡邉忠義　米野宗禎　宮坂孝夫
片平善造

以下は、三部門の実行委員（順不同）

○東京興譲館改修工事修祓式実行委員　十四名

顧問　金子芳雄　委員長　佐藤　毅
委員　石原俊一　沼澤研一　飯沼俊男　川合勝雄
西澤榮一　鈴木吉助　樋口正宏　小林栄作
伊藤貞治　吉田和男　林　里子　倉田和子

○記念祝賀会実行委員（歴史回顧展・記念講演会等）
二十六名

顧問　小森力雄　委員長　鈴木脩二
委員　山方雅晴　須貝英雄　中川紘一　鈴木信之
菅野憲幸　柿間　彰　金子晃司　川井陽一
高橋秀暁　小山　泰　加納和子　青木恵子
佐伯雅子　羽隅弘宣　樋口正宏　吉澤雄一
米野宗禎　大瀧則忠　平山英三　橋本享子
佐藤幸子　深澤和子　赤井惇一　瀧澤　新

○チャリティー美術展実行委員　二十名

顧問　大関修敬　委員長　米野宗禎
委員　鈴木脩二　菅野憲幸　柿間　彰　金子晃司
鈴木信之　西澤榮一　片平善造　伊藤秀太郎
宮坂孝夫　佐藤　毅　横山彰人　青木恵子
岩瀬和子　倉田和子　木村品子　鈴木うめよ
近藤郁子　畠山みつ子

東京支部の当面の課題として（平成二十一年七月現在）

① 「創立百二十周年記念祝賀会」関連行事を円滑に執り行う事
「寄宿舎開設百周年記念」の興譲館寄宿舎ＯＢ会との連携
「奨学金運営九十八周年記念」の奨学生ＯＢ・ＯＧ会との連携

② 第三次会員倍増キャンペーンの推進活動（二十一年四月～二十二年三月）

③ 「公益社団法人米沢有為会」目標としての、将来の検討と認識

平成二十二年は、創立百二十一年の新しい米沢有為会としてのスタートです。
会員皆様の今後益々のご協力ご支援を頂きますよう

お願い申し上げます。

（記　石原俊一）

東京支部会員数（平成二十一年三月現在）

個人会員　四五六名

（通常会員　三四〇名・特別会員　一一六名）

賛助会員　九社（関係協力企業　九社）

訃報会員　ご生前のご協力に感謝申し上げて、ご冥福をお祈り致します。

（　）内は、命月と出身地

坂井武宣様（二十年　八月　南陽市）

山田四郎様（二十年　九月　米沢市）

松山照夫様（二十年　九月　米沢市）

吉田和男様（二十一年八月　高畠町）

平成21年5月10日　定期総会及び新入舎生と新奨学生の歓迎会

米沢支部

平成二十一年度の現在までの支部活動状況を報告します。

○四月十三日　総会にむけて副支部長と各部長で構成する支部運営会議を開催し、支部の運営に関する協議を行った。

○四月二十日　総務部組織部合同会議開催。支部総会に向けての協議。

○四月二十三日　教育部会を開催し、教育産業功労賞該当者等の検討をおこなった。今年度は特に推薦が多く特別顕彰が三十二件あった。

○四月二十四日　米沢支部監査。

【第一回理事会】

五月十八日、午後一時三十分から米沢市役所庁議室において開催した。

内容は、平成二十年度米沢支部事業報告及び決算報告を承認し、平成二十二年度事業計画及び予算案を決定した。又、この理事会において教育産業功労賞表彰の選考委員を選任し、選考について一任した。本部表彰該当者については会長に報告し、決定をうけることになる。

今年度役員改選の時期にあたり、副支部長の交代、理事・評議員の改選については原案通り議決された。

又、今年度から事務局内五部に副部長制を設けることも了承された。

我妻榮記念館館長伊藤和夫氏の退任に伴い、後任が上村勘二氏に改選になることも了承された。

○五月二十一日　我妻榮記念館館長交代に伴う引継会を行った。

○六月六日　午前十時三十分から総務部会を開催し支部総会時の役割分担等を決めた。又、同日第二回の百二十周年記念式典準備委員会を開催し式典の流れについて確認を行った。午後は本部総会の案内資料と会費納入のお願い状の発送作業。

【総　会】

六月十三日(土)　午後二時　ホテルサンルート

安部三十郎支部長挨拶の後、議事に入る。二十年度支部庶務報告及び決算が承認され、二十一年度事業計画案及び予算案が審議され、原案通り議決した。

庶務報告の中で、支部会員数の状況が説明された。

役員の改選についても原案通り議決され、副支部長

二名の交代と理事・評議員の一部交代が決定された。
続いて支部の表彰式に移り次の皆さんが受賞した。

〈教育功労賞〉 教育功労者該当なし。

〈産業功労賞〉

高橋　義昭 氏

約三十年にわたり、米沢地域の企業にソフトウェアやファームウェアの開発力の重要性を伝道されると共に講習会や共同開発を推進しながら開発の出来る人材育成と産業振興に努められた。

ロボットの開発では、高齢化社会に役立つ会話のできるロボットや愛の兜の鎧をつけた「直江兼続ロボット」を開発されるなど、ものづくりのまち米沢の技術力の高さを全国にアピールされた。

西置賜産業会ロボット開発グループ

グループは、製造業の後継者や技術者の人材育成、企業と地域間の連携強化、産業振興を目的として結成され、共同でロボット製作の開発を推進し、長井市のまちおこしに尽力。

長井工業高校のロボット講座、少年少女のロボットセミナー、農業用除草ロボットの試作などを通して地域の産業振興や小・中・高校生にものを作る楽しさを伝えている。

この活動は、自力での地域力振興のモデルとしてテレビや雑誌などで全国的に取り上げられている。

〈特別顕彰〉（以下　敬称略）

竹田　悠理（米沢東高校三年）
平成二十年度全国高等学校総合体育大会
フェンシング競技　第五位

色摩勇太郎（南陽高校三年）
第六十三回国民体育大会ライフル射撃競技会
ビームライフル少年男子　第八位
第四十六回全国高等学校ライフル射撃競技選手権大会
男子十メートルS六十JM　第三位

島貫　健大（米工高三年）
平成二十年度全国高等学校総合体育大会
レスリング競技個人六十六kg級　第五位

横田　和紀（米工高三年）
第五十一回全国高等学校選抜レスリング大会
個人八十四kg級　第五位
第三十五回東北総合体育大会レスリング
グレコローマンスタイル　第一位

米沢商業高校女子ホッケー部
第四十回全国高等学校選抜ホッケー大会　第三位

南陽高校男子ソフトボール部
第三十四回東北高等学校男子ソフトボール選手権大会
第一位

髙橋　美咲（川西一中三年）
第五十四回全日本中学校通信陸上競技大会
三年女子百m　第六位（十二秒三六）
平成二十年度山形県中学校総合体育大会陸上競技
三年女子百m　第一位（十二秒二八大会新）
共通女子二百m　第一位（二十五秒九）

長沼　大智（米沢北部小六年）
第二十四回山形県小学生陸上競技大会男子千m
優勝（二分五十秒三一）　山形県小学生新記録

島貫　姫夏（米沢万世小六年）
第二十四回山形県小学生陸上競技大会女子八百m
優勝（二分二十六秒七九）　山形県小学生新記録

古瀬　彩可（米沢西部小六年）
第二十四回山形県小学生陸上競技大会
ソフトボール投げ　優勝（五十一m十八）
第二十四回全国陸上競技交流大会

ソフトボール投げ　出場

粟野　りほ（米沢三沢東部小六年）

第十九回ひろすけ童話感想画全国コンクール

特別優秀賞「山形県知事賞」受賞

第一回高森務児童文化賞受賞

米沢市立北部小学校リレーチーム（水泳）

第三十三回山形県選抜学童水泳記録会

男子二百ｍリレー　優勝

男子二百ｍメドレーリレー　優勝

【メンバー・米沢北部小六年】

大木拓海・鈴木智侑・長沼大智・大久保琳太郎

その後、安部三十郎支部長のあいさつ、受賞者のあいさつと続き、全員で記念撮影をして表彰式を終了した。

［デモンストレーション］

今年度は産業功労賞を受けた高橋義昭氏と西置賜産業会ロボット開発グループの製作したロボットのデモンストレーションを楽しみました。

［懇親会］

受賞者を交えて懇親会に移り、本会の理事、評議員、監事、教育委員、一般会員で和やかな懇親会となった。

○**六月二十日**　本部の役員改選に伴う米沢支部対応について協議。

○**七月十三日**　第二回支部運営会議開催。本部理事会の報告や祝賀行事への参加体制について協議。

○**七月二十八日**　総務部会開催。会員管理と会費納入管理の方法、百二十周年祝賀行事の取り組みについて協議。

○**八月一日**　今回副支部長を退任された星一郎氏と曽根伸良氏、産業部長大友久太郎氏の三氏を囲み、運営会議メンバーで感謝の会を開催した。

○**八月五日**　三部正副部長会開催。総務部、組織部、産業部の各正副部長で九月開催予定の会員交流いも煮会及び講演会について協議。

○**八月十日**　支部だより、会員交流いも煮会、講演会の案内状発送作業。

○**九月一日**　総務部・組織部合同会議開催。役員会、講演会、芋煮会の運営について協議。

○**九月六日**　午後二時　ホテルサンルート

・米沢支部理事評議員合同会議

今年度の事業内容や各部の構成などを改めて説明。又、東京で開催される百二十周年祝賀行事について協議。

・支部講演会　午後三時

講師に寒河江市の佐藤繊維株式会社代表取締役社長佐藤正樹氏を招き「地域から世界へ」と題し講演をしていただいた。オバマアメリカ大統領夫人が大統領就任式の折に着用していた「ニナリッチ社」製のニットカーディガンの素材を製造するまでの様々な苦労とアイデアを感銘深く拝聴した。予定の時間を四十分もオーバーしたが、誰一人席を立つ人がいなかったほど興味ある中身の濃い講演内容だった。

・会員交流いも煮会　午後四時三十分

講師を囲み約五十名の出席者により、和やかに開催された。

○**九月二十九日**　第三回支部運営会議を開催。百二十周年祝賀行事の取り組みと第三次会員倍増計画について協議。

仙台支部

仙台支部の平成二十一年度通常総会が六月十三日（土）、宮城県庁近くの仙台ビジネスホテルで開かれ、会員二十一名、学生会員三名に、百二十周年記念事業への協力要請のため来仙された来賓の中川紘一本部理事を加えた二十五名が出席しました。

中條支部長と来賓の挨拶の後、二十年度の決算、役員人事、二十一年度予算、事業計画等が審議されました。

役員人事では、平成六年以来支部長を務めて来られた中條仁先生が、今回の総会を最後に退任され特別顧問に就任されるという大きな異動がありました。中條先生は、支部長に就任される以前、昭和五十八年から仙台興譲館の館長も務められ、四半世紀以上にわたって仙台支部を支えて下さいました。この退任に伴い、新支部長に甲國信（前副支部長）が就任することになりました。その他の人事としては、副支部長の加川巌氏と監事の上野恒太郎氏が退任、塚原保夫氏と加藤啓二氏がそれぞれ新副支部長と新監事に選任され、また、新理事として田林晄一氏が選任されました。

平成21年度 米沢有為会仙台支部総会
2009年6月13日　於：仙台ビジネスホテル

事業計画では、例年の計画に加えて、百二十周年記念事業の一環として行われる仙台寮の改修について、御供館長より細部にわたる説明があり、これを了承しました。総会に続いて開かれた懇親会では、久しぶりに顔を合わせる会員が多いことから、いつもながら話は弾んで、懇親の実は大いに上がりました。

九月末日現在の仙台支部の会員数は九十二名、準会員一名です。新年度に入って五名の新規会員が加わりましたが、引き続き会員獲得に努力する所存です。

仙台寮を抱える仙台支部の主要な事業は寮の運営です。この寮は建築後二十二年を経過し、全面的な改修が必要な状況でした。改修は有為会の百二十周年記念事業に組み込まれ、第一期工事として、平成二十年度は消防法の避難器具交換、玄関錠の交換、換気窓修繕、衛生機器の修理・交換等、生活上緊急を要する箇所を手当しました。引き続き今年度は第二期工事として、本格的な内外の改修を実施し九月末に完了しました。外部修繕工事として、①屋根・屋上関係、②外壁関係、③サッシ関係、④玄関前舗装等。内部修繕工事として、①居室の畳替と約半分をフローリングに改修、②壁ビニルクロス張替、③天井ＥＰ塗装、ビニルクロス張替、④内部建具・押入改造、⑤カーテン取替、⑥ＩＴ機器用配管配線工事等が実施されています。この改修にあたっては、第一期、第二期を通じて、計画の立案、業者との折衝、工事の点検等のすべてを、御供館長が多くの時間と労力を割いて行ってくれました。昨今の厳しい経済情勢を追風に、この改修が入寮希望者数の増加につながることを期待しております。地方自治体などが運営する学生寮が、必要性は重々認められながらも、財政難のために年々減少の一途をたどっている中で、有為会は健闘しています。これから皆様に、寮の改修も含めた百二十周年記念事業への支援要請が行くことと思いますが、舎生ＯＢの方々を中心とした会員各位のご支援をよろしくお願いいたします。

東京支部や米沢支部にならって昨年度創刊した「仙台支部だより」は、第三号を昨年度内の三月に発行する予定でしたが、編集者の諸般の事情で新年度の九月に発行がずれこみました。すべて手作りですので、編集者の事情が発行に大きくひびきます。三号は遅れましたが、引き続き年度内には頑張って第四号、第五号を発行する予定です。これらの号には百二十周年記念事業に関する情

報や、会員の交流の輪を拡げる企画、改修後の寮の写真と寮生の感想、仙台寮ＯＢ会報告等を盛り込みたいと思います。支部会員に限らず、他支部に所属されている方からの投稿も歓迎しますので奮って投稿ください。

秋も次第に深まってきました。仙台支部のこれからの行事には、芋煮会、寮の忘年会、新年会等があります。芋煮会は、寮生の父兄にも案内しました。芋煮会への参加ついでに、父兄にも新装なった寮を見ていただきたいと思ったからです。案内に応え、若干の父兄が参加される予定です。寮の忘年会や新年会等の定例行事では、例年、お酒を媒介に年輩の会員が寮生と交流しています。今後も引き続き寮の運営、寮生との交流を軸に活動していく所存です。

（理事・仙台支部長　甲　國信　記）

▲平成21年４月12日(日)
寮生と一緒にお花見

平成21年３月29日(土) ▶
卒業生を送る会

京都支部

■京都支部活動の現実

春雁似吾吾似雁　洛陽城裏背花帰

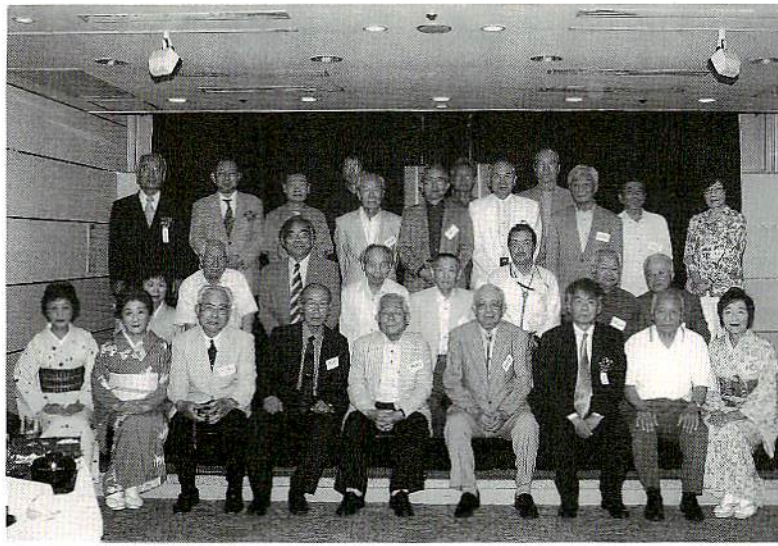
第一線で活躍していた当支部会員諸氏もこの漢詩を実感できる年齢を迎えました。

このことは、まことに喜ばしい限りですが、高齢・年金生活者が殆どであり、新人上洛も皆無な京都支部にあっては、美しい雁行の北帰行（有為会活動）を如何にして続けるか…そのパワーの維持とアップに配慮しなければならないことを示しているとも言えます。

こうした中で創設百二年の当支部の伝統を守り責務を果たすべく、次の対応をとっています。

★会員増：多くは望めませんが「縁故者の再々掘起し」と「会員と家族の総会参加」が必須です。その為には「魅力ある有為会・楽しい総会」にしなければなりません。

★魅力ある有為会：育英、産業振興、親睦の大義は頭では理解できますが、実際は「親睦第一の面白い会」でなければ新人入会はおろか、現会員を「繋ぎとめ



る」ことすら難しいです。

■**活性化運動**（魅力ある会への試み）

多くの会員が参加し「オモシロカッタ・エガッタ」とそれなりの満足が得られるものでなければ、人は集まらず活性化につながりません。

★総会：舞踊・カラオケなど全員が楽しめるものを催す。

尚、講話・社寺拝観も適宜実施する。

★お茶のみ感覚の小イベントを気軽に行う。

★県人会の芋煮会・パーティなど他団体の行事には積極的に参加する。

★会員家族および縁故知人の参加

■**楽しかった支部総会・懇親会**

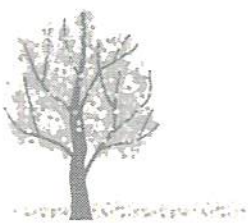
活性化の第一弾は総会、六月十四日、雅な平安会館に家族を含め三十五名が参加。両公遥拝など定例の諸事に加えて☆誓詞奏上☆京都支部百年の歩みのパネル展示☆来賓の個性豊かなご挨拶…が、有為会の深さと重さを再認識させてくれました。

続いて「懇親会」、会員の奥さんの歌に合わせて名取さんが艶やかに踊る「新舞踊」にウットリ、須貝副会長も巻込んでのカラオケ大会にヤンヤヤンヤ、そして恒例ボナンザ…珍回答に、景品にオオハシャギ。

従前のお堅い当支部では見られなかった新趣向に「良かった・エガッタ！」連発の大盛況、満面笑みで帰途につく会員には若葉の陽光が降りそそいでいました。

■新趣向の総会も好評を得ましたが、支部の活性化も緒に就いたばかりです、一日も早く「天上人間一様秋」にしたいものです。

（菅野　記）



北海道支部

支部の総会は、できるだけ多くの会員が参加できるように、と考慮して開催日を毎年、十一月二十三日の祝日と決めています。開催場所も札幌の中心部・ススキノにあり天然温泉を備えたホテル・入浴施設のジャスマックプラザとしています。

平成二〇年度は、新入会員二人も加わり、出席者は十六人を数え、午後から大浴場につかってゆったりと過ごしたりしてから総会に臨みました。懇親会では車座になって、高校時代や札幌寮での生活ぶり、故郷も舞台となる大河ドラマ「天地人」の話題などが飛び交い、親睦を深めました。その後はスナックで二次会。自慢ののどを披露し合い、盛り上がりました。

楽しみなのは、なんと言っても芋煮会。もともと鶴城工親会北海道支部の皆さんが始めた会で、今年で三十六回になり札幌ではもっとも歴史があります。十年ほど前に有為会北海道支部を加えてもらい、共催しています。今年は九月二十七日の日曜日、例年通り札幌北部の「札幌サトランド」炊事広場で開催しました。

有為会総会　於：ジャスマックプラザ（20年11月23日）

開園と同時に広場の一角にシートを敷き詰めて場所を確保。家族の女性陣や世話役がサトイモの皮をむき、コンニャクを千切り、ネギを切ったりして下準備を手際よく進めます。サトイモ、牛肉はもちろん故郷からの取り寄せ。広場には特製のカマドが設けられ、三つの大鍋で芋が煮込まれると、ふくいくとした香りが快晴の空に漂います。

テーブルにはそれぞれが持ち寄った置賜地方の地酒、漬け物、ブドウなどが並び、芋煮を何杯もお代わりして故郷の味と、さわやかな酔い心地を堪能しました。

支部会員はここ数年、増加しています。新入会が十九年度に三人、二十年度には二人ありました、高齢による退会が一人ありましたが、会員数は二十三人になりました。今回の芋煮会にも、会員ではありませんが、札幌に転勤している置賜出身者二人が顔をみせました。これらは会員の個人的な情報によって勧誘した結果で、少しずつではありますが、有為会の輪が広がっています。しかし、嘗てあった札幌寮という「拠点」がなくなっているため、転勤、あるいは新卒・就職者などの組織とした情報が入りません。

支部活動を楽しく、活発なものにするため、この情報の壁を何とかしなくては、と考えています。

（北海道支部長・安部英夫）

晴天下で開催された芋煮会（21年9月27日）

興譲館だより

東京興譲館

滝田英智

にぎやかに夏の風情を感じさせた蝉達も声を潜めるようになり、頬をなでる秋風とともに、例年より少し早い秋の訪れが感じられます。勉学にも課外活動にも打ち込むことのできるような、大変すごしやすい季節になってまいりました。

さて、今年度の東京興譲館では入寮・復寮合わせて十名の舎生を迎え、全寮室が埋まって大変にぎやかな寮生活となっています。時代の流れとともに寮生活のあり方そのものが変化している昨今ですが、東京興譲館寮でも二十五名で新生活がスタートすることは久しぶりのことで、全員が楽しく意義のある大学生活を送っています。新入舎生たちは、最初は戸惑うことも多くあったようですが、人数も多いためか個性的で、それぞれがそれぞれの形で新しい生活に順応し、充実した毎日を送っています。

また、今年度はかねてから計画されていた寮の大規模改修工事が着工され、現在も建物の周りには工事用の覆いと足場が組まれています。夏休み前には舎生全員で大片付けをし、不要になったものの撤去を行いました。その中には非常に年季の入った書籍や家具などがあり、寮の長い伝統と先輩方の過ごした年月を感じずにはいられませんでした。夏休み中には居室の工事が終わり、十一月の竣工を控え今後三十年生活を送ることができるような立派な寮に生まれ変わる日を舎生一同心待ちにしている日々です。

寮生活では、学年はもちろん、出身高校や大学の異なる学生同士が一つ屋根の下で生活を共にしています。そのことで我々舎生は自分自身を成長させていくことはもちろん、舎生自らの手によって規律のある寮運営を作り上げ行っています。これは一言で言い表すことができないほどの大きな意味をもっています。活発で時に盛り上がって楽しむ雰囲気の中であっても、我々舎生は団体生活を通して、社会で求められる協調性・主体性を自然に身についていくことができると考えています。もちろん、共同生活であるがゆえに従うべき規律や規則、務めなければならない仕事や役割分担があります。一人暮ら

しの生活とは違い、大変さを感じることもあるかもしれません。しかし、寮生活で得ることのできる先輩・後輩、また、ともに大学四年間を暮らす同年代の仲間の中で人間を磨き、自己を見つめ直すことは人生の中でなかなか得ることのできない絶好の機会であり、一人暮らしでは絶対得る事のできない体験だと思います。

私たちがこのように充実した寮生活を送ることができますのも、館長の沼澤さん、副館長の川合さん、副館長兼事務の小林さん、寮母の三浦さんを初めとする米沢有為会の皆様のお力添えがあってこそのことだと思っています。とりわけ毎日のおいしい食事から一人ひとりの健康管理まで暖かい目を注いでくれる寮母の三浦さんには感謝の気持ちでいっぱいです。また、今回の大規模改修工事は、我々のみならず今後の世代にもすばらしい環境を与える大プロジェクトであり、舎生一同皆様のご援助に感謝しております。皆様の期待にお答えすることができますよう、各々高い目標を胸に抱いて、何事にも一生懸命取り組んでいきたいと思います。

最後になりましたが、寮生を紹介させていただきます。

○大学院一年生

鈴木　浩晃〔関東学院大学大学院法務研究科〕
（泰星高校）

○四年生

舟山　智徳〔東京外国語大学外国語学部マレーシア語学科〕
（長井高校）

加藤　達也〔中央大学理工学部数学学科〕
（長井高校）

後藤　真〔日本大学商学部商学課〕
（米沢東高校）

進藤　洵〔玉川大学教育学部教育学科〕
（米沢中央高校）

滝田　英智〔早稲田大学第一文学部総合人文学科〕
（米沢興譲館高校）

豊嶋　貴大〔明治大学法学部法律学科〕
（山形東高校）

宮内　周作〔専修大学経済学部経済学科〕
（米沢興譲館高校）

○三年生

鈴木　浩輝〔慶應義塾大学法学部法律学科〕
（泰星高校）

須藤　龍司〔明治大学農学部農業経済学科〕
（南陽高校）

益満　望〔桜美林大学リベラルアーツ学部〕
（米沢中央高校）

山田　伸〔法政大学工学部電子情報学科〕
（米沢興譲館高校）

田中　大輔〔日本大学法学部管理行政学科〕
（日大山形高校）

○二年生

後藤健太郎〔学芸大学教育学部B類英語学科〕
（米沢興譲館高校）

中村　竜也〔国士舘大学法学部法律学科〕
（米沢中央高校）

樋口　駿〔東京大学理科一類〕
（長井高校）

舩山　宏樹〔立教大学理学部数学科〕
（米沢興譲館高校）

○一年生

相田　拓樹〔明治大学文学部文学科〕
（九里高校）

菊地　邦貴〔日本大学文理学部心理学科〕
（米沢興譲館高校）

佐藤　拓弥〔高千穂大学商学部商学科〕
（米沢商業高校）

島津　良輔〔東洋大学法学部企業法学科〕
（長井高校）

玉橋　一馬〔東京理科大学理学部化学科〕
（米沢興譲館高校）

松木龍太郎〔慶応大学文学部人文社会学科〕
（長井高校）

元木　康長〔法政大学法学部法律学科〕
（長井高校）

山田　渓介〔専修大学経営学部経営学科〕
（米沢興譲館高校）

仙台興譲館

荒井達矢

仙台興譲館では、今年度新入寮生を四名の寮生を迎え、現在十三名で生活しております。今年の新入寮生はみな活発で寮生活にもすぐに打ち解け、充実した大学生活を送っているようです。

前寮長を中心とした、昨年度の積極的な広報活動のおかげで四名の入寮生を迎えることが出来ましたが、在寮生減少による危機的状況を脱したとは言い切れません。時代の変遷とともに意識も変化し、今後も寮を選択するという人は減っていくでしょう。しかしながら、私たちには伝統ある仙台興譲館を引き継いでいきたいという強い思いがあります。ただ新入寮生を受け入れるのではなく、寮からも多くの情報を発信し、魅力ある寮生活を知ってもらわなければなりません。寮生活でしか得られない貴重な経験は沢山あり、私自身も寮生活を通して人間的に成長できたと感じています。より積極的な広報活動を行い、寮生が増えるように努力していきたいと思います。

ところで、仙台興譲館は自治寮として会計・厚生・防災・娯楽・ネットワークといった仕事を寮生で分担して行っています。寮生減をきっかけに係活動の見直しを行い、仕事内容の確認や人数分配の変更、そして寮生募集のため新たに広報係を設け、新体制で係活動にあたっています。その成果の一つに、清掃状況の改善があります。今年度は寮内の清掃状況が非常に良く、これは寮生一人一人が自覚を持って寮生活を送れている結果だと思います。毎月リーダー会議を行い連携を強化しています。各係の代表者が定期的に集まって、係活動の反省や寮生への連絡、要望などの情報を共有しています。寮母さんの意見も参考にしつつよりよい寮生活づくりを作りたいと思っています。さらに今年は書面化した規則を自分達で作成しました。これにより寮生一人一人が責任を持って行動することを自覚させました。

今年一番の変化は寮の大規模な改修を行ったことです。外壁や屋根といったところも行ったため興譲館寮は新しく生まれ変わったものと思います。工事に携わった方々を始め有為会先生方にはこの場を借りて感謝いたしたいと思います。どうもありがとうございました。心機一転した寮とともにこれからの生活を興譲館寮生として恥じないように送りたいと思います。

最後になりましたが、中條前仙台支部長、甲仙台支部長、御供仙台興譲館館長をはじめとする米沢有為会の皆様や寮母の小野寺さんのおかげで、我々はこのような素晴らしい環境で生活することができます。寮にかかわる皆様の思いを胸に抱き、何事にも一生懸命に励んでいきたいと思います。

○大学院生

郷野　辰幸〔東北大学大学院医学系研究科保健学科専攻〕
（米沢興譲館高校）

那須　譲治〔東北大学大学院理学研究科物理専攻〕
（米沢興譲館高校）

○四年生

宇山　裕人〔東北大学法学部〕
（米沢興譲館高校）

○三年生

荒井　達矢〔東北学院大学経済学部〕
（米沢中央高校）

島森　拓土〔東北大学理学部科学科〕
（米沢興譲館高校）

○二年生

高橋　玄〔東北福祉大学総合福祉学部社会福祉学科〕
（日本大学山形高校）

塩田　紳〔東北大学法学部〕
（山形東高校）

島貫　洋平〔東北大学文学部人文社会学科〕
（長井高校）

宮坂　匡〔東北学院大学経済学部〕
（米沢中央高校）

○一年生

青木　謙人〔東北大学工学部材料科学総合学科〕
（興譲館高校）

安部　玄樹〔東北大学法学部〕
（興譲館高校）

佐藤　丈洋〔東北大学医学部保健学科放射線技術化学専攻〕
（長井高校）

原田　学思〔東北大学工学部機械知能航空工学科〕
（興譲館高校）

我妻榮記念館だより

我妻榮記念館は、民法学者我妻榮先生の生家です。先生は明治三十年鉄砲屋町（現在の中央三丁目）に五人兄弟の長男として生まれ、（姉が二人、妹が二人）十七歳で第一高等学校に入学するまでこの家で過ごされました。

この建物は明治初期に建てられたもので、米沢においてはごく一般的な木造一部二階建で、現在では大変貴重な建物になっています。

大正六年に米沢で大火があり、榮先生の父上の又次郎さん（高等学校の英語の先生）の教え子達が消火活動にかけつけて類焼をまぬがれましたが、我妻家は市内の他の地区へ引越され、大正七年に大友家が買い受けて昭和六十三年まで七十年間住み、県外に転居されました。

そのあと市内の建設業者の手に渡り老巧建築物であることから解体の運命になりましたが、取り壊しになる寸前に我妻榮先生の生家という事がわかり、維持保存の機運が高まり、平成元年米沢有為会創設百周年という節目に際し、我妻榮旧居宅取得が了承されました。

そして、記念館として開館する整備を行い、遺族からの寄贈品を展示し、平成四年六月十九日に「我妻榮記念館」として開館し現在に至っています。

今年は、大河ドラマ「天地人」ブームで多くの来館者があり、我妻榮先生の生家に触れられ感激されています。

初代館長　松野良寅（平成四年六月～十四年五月）
二代館長　今田久夫（平成十四年六月～二十年五月）
三代館長　伊藤和夫（平成二十年六月～二十一年五月）
四代館長　上村勘二（平成二十一年六月～）

○平成二十年度の運営報告

・年間開館日
毎週金曜日、日曜日は午後一時～四時、月曜日は午前十時～午後四時まで開館。
年末年始休館で一五六日開館、他に臨時開館一六日。

・入館者数　四二五名。
全国各地から法曹界関係者が多い。

・記念館の利用
鉄砲屋町町内会、鷹山公と先人を顕彰する会などの団体利用　二六一名。
米沢有為会米沢支部役員会、各部会など　二〇二名。

・補修整備

雪囲い、ウコギ垣根植栽・剪定、垣根設置、ホームセキュリティ設置、
屋根葺替工事、土蔵扉工事。
・備品購入
除湿機
・印刷・出版
我妻榮記念館だより第十三号

○平成二十年度の運営計画
・建物の補修整備
・各種資料の整備
・各種資料の保存方法の検討
・各種資料のデジタル化の実施
・利用拡大、広報PRの検討
・記念館だよりの発行（年一回）
・運営委員会の開催（年二回）
・その他必要な事項
・運営事業予算額二百三十万円（負担金五十万円、補助金百六十万二千円、雑収入、繰越金）

○記念館の運営体制
平成四年の開館以来、館長、事務局長、管理人を置き管理運営をしています。

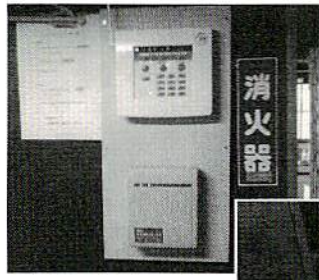
記念館 資料展示室１階

記念館 資料展示室２階

《二十～二十一年度》

名誉館長 我妻　尭
顧　問 松野　良寅・小関　薫・今田　久夫
館　長 上村　勘二
事務局長 鈴木　幸一
管理人 小林　秀一
運営委員 遠藤　拓
安部　敏
佐藤　英男
五十嵐京子
高橋　節子
本多　和彦

▶記念館 博士の勉強部屋



▲記念館 ホームセキュリティ設備

置賜市町だより

米沢市

大還暦 市制施行百二十周年記念式典の開催

米沢市は明治二十二年四月一日、日本で最初の市の一つとして誕生し、今年で百二十歳（大還暦）を迎えました。この節目にあたる年をお祝いするため、去る九月五日伝国の杜置賜文化ホールにて、米沢市制施行百二十周年記念式典が盛大に挙行されました。

上杉様御夫妻をはじめ、姉妹都市、国会議員や近隣市町長などの御来賓、市関係者、そして多くの市民の御列席をいただきながら、米沢吹奏楽愛好会による「天地人」オープニングテーマ曲の演奏を合図に第一部記念式典がスタートしました。開式のあと、市制施行百周年に制作された「ぼくたちのまち米沢」と、平和都市宣言事業の一環として昨年制作された混声三部合唱曲「光」が米沢混声合唱団を中心とする美しい歌声により披露され、会場内が和やかな雰囲気に包まれました。演奏と合唱に引き続き、山形大学工学部三年 長 和宏さんと米沢女子短期大学二年 菊地真理恵さんのリードによる市民憲章朗唱、安部三十郎市長からの百二十周年宣言、髙橋嘉門市議会議長と市民代表として米沢興譲館高校二年の飯澤早貴さんからそれぞれお祝いのことばをいただき、おしょうしな観光大使四名のビデオメッセージ上映で記念式典が締めくくられました。

記念式典オープニングの演奏と合唱

続いて第二部として「アツキヨ」による記念コンサートが開演。アツキヨは、ギター＆ボーカル担当の東京都荒川区出身「アツシ」と、サインボーカル（手話を取り入れた独自の振り付け）＆ボーカル担当の米沢市出身「Kiyo」の融合ユニッ

「アツキヨ」による記念コンサート

トです。（Kiyo は聴覚障害二級）アツキヨの音楽は、年齢を問わずみんなで楽しく歌って踊って学べるようなファミリーミュージックと、〝諦めなければなんだってできる〟といった頑張っている人への応援歌が中心で、アツキヨの澄んだ歌声が会場内に響きわたり、胸が熱くなるような〝感動〟のコンサートになりました。

これまでの長い歴史の中で、先人の努力の積み重ねにより受け継いだすばらしい米沢。私たちの更なる努力により、次代を担う子供たちへ確実にバトンを引き継いでいく必要があります。そのためには、市民のみなさんと市が手を携え協力し合いながら、一体となってこの米沢を共に創りあげていくことが何よりも重要であると思います。市民一人ひとりが豊かさとやすらぎを実感でき、そして何よりも住んでよかったと思える市政運営にこれからも取り組んでいかなければならないとの思いを改めて胸に刻んだ記念式典となりました。

ひと・未来・輝く・・・米沢市はここからまた新しい一歩を踏みだします。

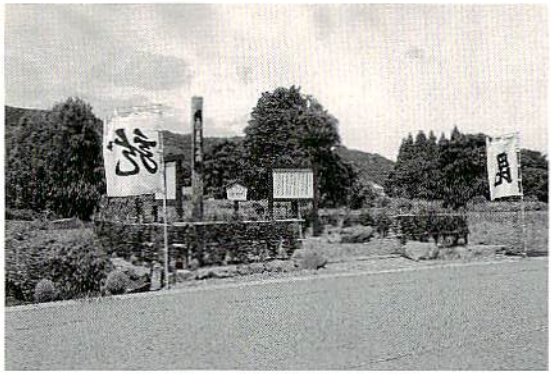
まちづくりを考える大きな契機に 新たな観光スポットの誕生

平成二十一年一月から、米沢のまちづくりの基礎を築いた、直江兼続を主人公とするＮＨＫ大河ドラマ「天地人」が始まりました。

テレビ放送を受け、兼続の人柄や業績が徐々に知られることで、ゆかりの地米沢を訪れてみたいという人が増えました。そういった方々に楽しんでいただこうと、平成二十一年一月二十四日から平成二十二年一月十一日の間、米沢市上杉博物館で「米沢 愛と義のまち 天地人博２００９」を開催し、大河ドラマの世界と直江兼続の実

像を多くの方々にご紹介しております。たいへん好評をいただき、早くも七月には、当初目標としていた二十万人を達成する盛況振りで、十月には四十万人を突破いたしました。

また、天地人に関連する施設の上杉神社、春日山林泉寺及び上杉家廟所等の名所旧跡等を訪れる観光客も増加しました。こうした動きを受け、南原地区に数多く残る関連施設等の整備も行われました。これらの整備は、地区の方々が自ら率先して取り組んでいただいたもので、藩主等の葬儀が執行された「米沢藩主祭礼場跡」や兼続が治水計画を立てる際に登ったといわれる「赤崩山遊歩道」といった、新しい観光スポットが生まれました。



整備された「米沢藩主祭礼場跡」
（大字笹野粕平地内）

さらに上杉景勝はじめ、家臣団が会津から米沢への国替えの際に通った「旧会津・米沢街道」が綱木地区の方々のご協力により全面整備されました。

米沢市では、天地人放送をこれからのまちづくりを考える契機としてとらえ、市民力を結集して、米沢の「人づくり」「まちづくり」「ブランドづくり」を推進することを心掛けてきましたが、このように市民が主体となってのまちづくりが実践され、郷土の良さを見直すよい機会となっていることは喜ばしい限りです。

整備された「旧会津・米沢街道」

米沢図書館開館百周年を迎えて

米沢図書館の開館百周年を記念して、十月四日に置賜文化センターホールにおいて、記念式典とNHK大河ドラマの時代考証を行っている静岡大学名誉教授の小和田哲男氏による記念講演会などを行いました。

米沢図書館は、明治四十一年（一九〇八年）に設立された財団法人米沢図書館が、旧藩校「興譲館」の蔵書を基にして法泉寺境内に図書館を建設し、明治四十二年十月七日に開館したのが始まりです。

その後、市制施行五十周年であり米沢図書館創立三十周年に当たる昭和十三年に、建物や蔵書などが米沢市に寄贈され、市立米沢図書館として新たに発足して現在に至り、今年、開館百周年を迎えました。

この間、図書館は、昭和二十九年には南堀端町（現在の丸の内一丁目）に新築移転し、昭和五十年には施設の老朽化と市の新時代における総合文化活動の拠点づくりの施策により、現在の置賜総合文化センター内に移転しました。

その施設も、現在では、図書の増加などにより狭隘となっていますが、様々なジャンルの書籍や郷土資料など約二十三万点を揃えており、大人から子どもまで年間約十六万人が利用しています。

当館蔵書の特色は、近世当初天下の好学人といわれた直江兼続の収集した書籍をはじめ藩校「興譲館」の伝承書籍など、国文学や歴史学の分野で全国的にも大変貴重な書籍群を多数有していることにあります。

こうした貴重な資料を基に、昭和三十三年には「米沢善本」目録を完成させたほか、昭和五十八年には「林泉文庫目録（改訂版）」を発行するなど、地域文化の振興

小和田哲男氏による記念講演会

を担ってきました。また、平成十三年に発行した「前田慶次道中日記」は、今般の「天地人」の影響もあって全国から多くの問合せがあり、これまで六回増刷りを行い合計七千二百部を発行するなど好評を博しています。

百周年というこの節目を基に、今後も、より多くの方に利用していただくとともに、市民の生活に役立つ情報発信拠点として一層充実に努めていきたいと考えています。

水道水ペットボトルを作りました
「米沢愛の水 兼続」

その名の通り、NHK大河ドラマ「天地人」の放映に合わせ、米沢の水をPRしようと五千本を製作し、一本百円で米沢駅他市内数ヶ所で販売しております。

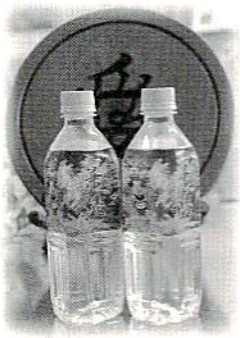
五百ミリ(リットル)入りペットボトルに詰められたのは、山形県の母なる川、最上川の源流、大樽川の水です。

雪深い吾妻連峰の雪解け水が何層もの地中をくぐり大小の滝を下って集まり、それを浄水した「水道水」を更に低温殺菌処理をしたボトルドウォーターです。

近年種類も豊富に販売されている「天然水」や「ミネラルウォーター」に比べ、厳しい水質基準を満たした「水道水」のおいしさの評価は少し低目ですが、カリウムやカルシウム等のミネラル成分を程よく含み、冷やすと一層おいしく飲めます。

米沢の水道は、大正十四年に、帝人株式会社の前身である「帝国人造絹糸株式会社」米沢工場の進出に伴い舘山町に浄水場を造ったのが始まりです。その後「帝人」が岩国市に移転したことにより一時中断しますが、昭和二十九年七月に給水を開始し、現在、上水道は大樽川、鬼面川(綱木川ダム)、刈安川(水窪ダム)の自然の恵みをいただいています。

先人たちは、水源探しから始め、ツルハシやスコップ等をリヤ



水道水ペットボトル
「米沢愛の水 兼続」

カーに積んで、管路を掘り各家庭に水を届け、大雪で水路が塞がると総出で雪掻きし、配水管破裂等の事故があれば夜中でも駆けつけ修繕して築き守り抜いてきました。その想いも、五百ミリリットルの水道水で感じていただければと思います。

愛と義のまち米沢を応援してください

～「米沢市ふるさと応援寄附金」に御協力をお願いします～

昨年度全国一斉に「ふるさと納税制度」がスタートし、「大好きな米沢を応援したい」という想いを全国各地の方々からお寄せいただきました。

ふるさと納税制度とは、地方公共団体に御寄附されますと、五千円を超える部分について住民税や所得税の控除対象となり、軽減される仕組みです。

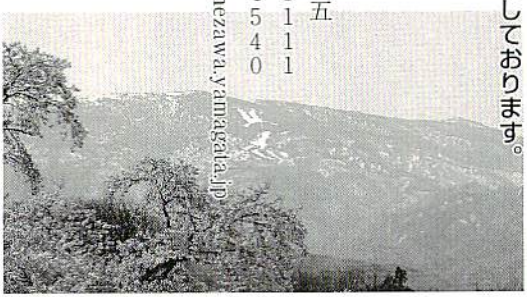
なお、五千円以上御寄附された方にはささやかですが感謝状とともに「上杉鷹山しおり」をお送りします。

お寄せいただいた寄附金は、御寄附の趣旨に添い、ときめきの米沢づくりのための次のような施策に有効に活用させていただきます。

☆奨学育英の推進
☆市民と行政の協働によるまちづくりの推進
☆豊かな観光資源を活かした観光の振興
☆個性豊かな地域文化や芸術の振興
☆地球環境、地域環境の整備充実
☆安心して子育てできる環境の整備
☆美しく魅力的な景観形成の推進

みなさまの熱い想いをお待ちしております。

■問合せ・お申込は
米沢市役所総合政策課
〒九九二－八五〇一
米沢市金池五－二－二五
TEL 0238－22－5111
FAX 0238－24－4540
MAIL furusato@city.yonezawa.yamagata.jp



長井市

あやめのまち長井

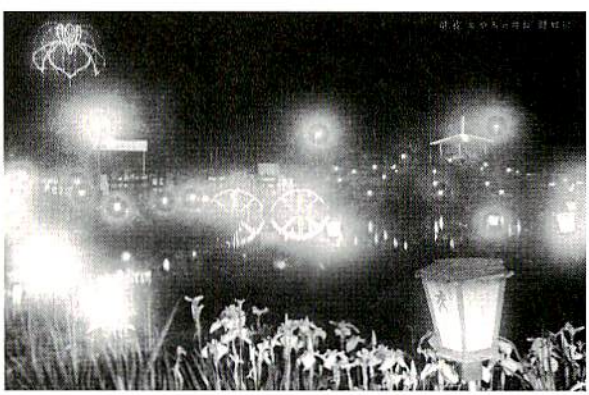
長井市は、皆様よくご存じのように「水と緑と花のまち」として有名です。桜、白つつじ、あやめ、萩などが長井の四季を彩りますが、特に、あやめ公園は県内外の多くの方々を魅了してきました。

その「あやめ公園」が、来年、開園百周年を迎えます。この長い歴史を振り返りながら、百年の節目にふさわしい式典やイベントを現在計画中です。

あやめ公園のポスター（昭和８年）

長井市民が、どこかに旅をして、「どこからお出でですか？」と聞かれて、「長井です。」と答えると、「あぁ、あやめの長井ですか」と、よく言われます。山形県がどこにあるか知らない人でさえ、あやめのことは知っていたりします。それほど、あやめは長井のシンボルなのです。

あやめ公園は、明治四十三年、川柳を愛する金田勝見氏が、清水湧く野川べりに茶屋を営み、近くの畑に花菖蒲を植えたのが始まりといわれています。


あやめ公園の夜景（昭和８年）

その後、拡張整備を繰り返し、昭和五年には「山形県一名所」に選ばれます。また、昭和十二年には、金田勝見氏の功績を讃えるため、町内有志の寄附により記念碑が建立されました。そこには、当時の川柳の大家であった、井上剣花坊、近藤飴ン坊、大谷五花村の三氏の川柳が刻まれましたが、当時の長井には、川柳を愛する風流な方が多く、その方々の並々ならぬ熱意がなければ、記念碑建立は実現しなかったと言われています。

開園記念碑建立の記念写真（昭和12年）

食糧難であった戦時中は、芋畑になりましたが、戦後数年ほどで、あやめを愛する方々の手によって、見事なあやめ公園に再生されました。まだまだ食糧難の時代であり、困った方も多くいましたが、「あやめ公園といわれると、協力しもさんなねごでえ」と協力してくださったとのことです。

昭和三十七年、日本花菖蒲協会の方々があやめ公園を訪れました。その折に、井上会長から「公園の規模は日本一」と評価を受けると同時に、他では見られない珍花があることも発見されました。その数は三十数種類に及び、長井独自のあやめ、「長井古種」として日本花菖蒲協会に登録され、同協会の「花菖蒲大図譜」（朝日新聞社刊）にも小桜姫、長井小町など十五種が紹介されたのです。認定にあ

長井古種「小桜姫」

たっての一文には、「花形はノハナショウブにきわめて近く、花色は園芸種に見られるものが一通り揃っている点、興味深い。品種名はなかったが、今回新しく決めた。一輪だけでは物足りないが、数輪以上配置よく咲いた姿は、大輪にない清楚な良さがある。本図の花のほかに約二十数品種がある」と記されています。

長井古種の発見は、公園の価値を高めたことはもちろんですが、あやめを愛する市民や長井市にとっても一大転機でありました。

このように、あやめ公園には様々なエピソードがありますが、最もにぎわった時期には、池に屋形船が浮かび、サーカス小屋が建ち、長井駅から公園までの道路は、訪れる人で埋め尽くされていたと言われています。

来年迎える百年の節目には、あやめを愛し、守り、育んできた多くの先人達の熱意や想いを改めて見つめ直し、次の百年に向けた新しいスタートを切りたいものだと考えています。

（文責　長井市総務課 秘書・危機管理主幹　遠藤敏男）

出典　長井のひとびと第十六集「あやめ公園ものがたり」（長井市地域文化振興会編）

あやめ公園（平成11年）

南陽市

南陽市は真剣に結婚を推進しています。

平成二十年四月に中央公民館に結婚推進室を設立しました。結婚を望んでいる方に、お見合いや男女の出会いの場を積極的に提供しています。

設立してから今年六月までのお見合い回数は二十三回、そのうち一組がめでたくご成婚。南陽市内の男性に、市外から女性が嫁がれ、幸せな新婚生活を送っております。

また、結婚推進室初のイベント「で・i♥フェスタ2008」では、男性五十四名、女性四十五名の参加をいただき十五組のカップルが成立しました。

今年は、南陽市特産のワインをテーマに「で・i♥フェスタ2009」を開催しています。七月十一日に開催された「七夕ワインナイトカーニバル」では、中央公民館の会議室に天の川をディスプレイし、七夕の雰囲気をだすなど工夫を凝らした会場で、六十名の男女がワインを楽しみました。そこでは、男性からの告白により五組のカップルが誕生しました。

二回目は八月二十九日にオリジナルワイン作りに挑戦、十月には八月に作ったワインを楽しむ会と計三回のコースを実施しました。一回きりの出逢いで終わってしまうのではなく、回数を重ねることで、より多くコミュニケーションを図っていただくために企画したものです。

また、昨年は男性に的を絞った【結婚力を引き出す講座】を開催しました。受講された方が、受講前と後でのお見合いの時の服装や、会話力に変化が現れたことには、驚きと喜びを感じました。今年は、女性が今よりもっと素敵になるための自分磨き講座、その女性の魅力を引き立たせてくれる男性磨き講座と、男女ともにブラッシュアップを図ります。特に女性の講座に関しては初めての試みで、「今よりもっと素敵に！」と題し、全四回コースを三日間かけて行います。きれいの基本、立ち居振る

舞い、メイク術、食事の基本マナー等盛りだくさんの内容です。自分に自信がつくことで積極的に行動ができ、周囲の目を引く女性にきっと変身できると思います。

「婚活」は、いろんな場所に出かけ、より多くの人とふれあうこと。出逢った人が好みのタイプでなくても、その人の周りの人、友人家族につながっています。出逢った人の数だけチャンスはあるのです。積極的な行動こそが結婚につながるのではないでしょうか。結婚推進室では、少しでも多くの人と出会う機会、一つのきっかけを提供できればと活動しています。あまり結婚を意識せずに、コミュニケーションの場として、イベントに参加していただきたいと思います。

最後に、米沢地方の所縁の皆様のご理解とご協力を、お願いいたします。ご登録、ご相談をお待ちしております。

「夢はぐくむ故郷南陽」

南陽市は、次世代を担う子どもたちが安心して健やかに育ち、夢をはぐくむことができる地域社会の実現を目指し、平成十九年六月に「南陽市子育て支援都市」を宣言し、「夢はぐくむ故郷南陽」の構築と「子どもを生み育てるなら南陽市、教育するなら南陽市、結婚するなら南陽市」をキャッチフレーズに、市民と事業者、行政が共に手を携え、主体的かつ積極的なまちづくりに取り組んでいます。

笑顔で明るく子育てができる元気な地域社会の実現のためには、もとより次の世代を担う人材育成がしっかり為されていなければなりません。

市政運営の基本方針に掲げる「教育の最重点化」への取り組みとして、教育委員会では、特に社会教育分野における少子化・結婚対策と、青年・婦人教育を通して、本市発展の「礎」であり、まちづくりの核を担う南陽の「宝」となる人材育成に力を入れています。

人づくりとまちづくり

◆若者によるまちづくり　～青年教育推進事業～

まちづくりへの市民の関心が高まり、ボランティアやNPOなどの市民団体や市民と行政のパートナーシップによるまちづくりの事例が増える一方で、以前の青年団に代表されるような若い世代と地域とのつながりの希薄化が指摘されています。

「地元に若い人がいない」と言われますが、本当に若い人はいないのか。実は、元気な若者がいないのではなく、地域との接点や活躍の場がないので、元気な若者が見えないことが、本当の課題と捉え、南陽市青年教育推進事業では、次代を担う若者の無限の力を育てつつ地域とつなぎ、まちづくりに主体的に参画する集団と仕組みづくりを目指しました。

事業の初年度となる昨年は、若い人材の発掘から始まりました。「夢はぐくむ故郷南陽コンペティション」は、二十代の青年がまちづくりにつながるユニークで実践的な若々しい夢やアイディアの企画コンペティションです。連続のワークショップとグループワークを経て完成させた企画を、公開プレゼンテーションにより審査し、大賞一点（賞金百万円）を決定します。

対象が二十代のみという狭い範囲にもかかわらず、五十人以上の若者が集まりました。

確かに賞金の百万円狙いで集まった若者が多くいたのかもしれませんが、自分たちのまちに対する若者の夢や不満が潜在的に存在するのだということを感じました。このことは、集まった若者の大部分が八カ月間にわたる長期講座を最後まで受講し、さまざまな条件や課題を乗り越え、最後のプレゼンテーションでまちづくりに描く夢を堂々と発表する姿を見てあらためて実感しました。

南陽市青年教育推進事業が、若者に地域への関心を向かせる単なるきっかけづくりで終わるのではなく、継続して主体的にまちづくりに取り組む若者グループの育成を図るための事業とするために、特に次の三点に主眼を

置きました。

①オンリー　Twenty　プロジェクト

若い感性を尊重して自由なアイディアを募るため、対象年齢を敢えて地域との関わりが薄い二十九歳までに幅を狭め、既成の事実や思考概念に囚われにくい環境をつくる。

②グループ参加の原則

同志の若者や地域とのつながりを広げ、若者によるまちづくり活動を力あるものとするため、グループワークを必然的に取入れてグループ形成を促す。

③シンクタンクではないドゥータンク

自分たちが住むまちを批評や批判したり、他人や行政にまちづくりの提案をする能力ではなく、自分たちができることを自らで実践する能力の養成と将来も継続してまちづくり活動を行うためのスキルアップを目指す。

初年度の成果として挙げられるのは、約五十人の若者さがしができたこと、そしてその若者たちがまちづくりのもとに五つのグループを形成したことです。新たな若い力の形成と若者視点によるまちづくり活動の始動は、これからの南陽市のまちづくりのうえで、大きな可能性と期待が膨らみます。

若者のコミュニケーションやつながりの希薄さが指摘される昨今、初めは、お互いに周りを寄せつけないような尖がった若者たちが、この事業をきっかけにまちづくりでつながり、お互いを尊重し合う関係に変わっていきました。青年対象の事業は、なかなか参加者を集められず行政では仕掛けにくい分野ですが、若者に対して、今まで知らなかった者同士が出会うことの面白さをこの事業で作ることができたのではと感じています。最初に集まったきっかけが百万円でも、事業の過程で百万円以上に重要なもの（人や地域のつながり、まちづくりや社会への関心）をつかんだ若者が更なる輪の広がりをみせています。

まちづくりの原動力は、「若者」「ばか者」「よそ者」と言われます。南陽市の新しい「若者」の「種」は今、種蒔きを終えたばかりですが、若い種がしっかり芽を出し花を咲かせるまでには、周囲の環境がその成長を大きく左右します。若い力がしっかり土壌に根を張るまで、しばらくの間は周囲が関わりながら水やりや施肥が必要になるでしょう。市民協働による「夢はぐくむ故郷南陽」の実現を目指して、二年目は、彼らが新しい青年団のカタチづくりへより実践的なまちづくり活動を展開していく年を迎えます。

実践された「かぼちゃカーリング」

平成二十年度南陽市青年教育推進事業

「夢はぐくむ故郷南陽コンペティション」

（参加者　54人）

(1) 夢が生まれるガイダンス（事業説明）
(2) 夢をはぐくむワークショップ（開催　7回）
(3) まちづくり企画書作成
＊以下「企画名」（グループ名）
ア 「南陽こども大楽」（落合とゆかいな仲間たち）
イ 「Inter-Green Network ～ 新しい青年団のカタチ～」（いぐね？【IGN】）
ウ 「たかが かぼちゃ されど かぼちゃ ～かぼちゃは世界を救う～」（梨郷青年団）
エ 「あしたのプロジェクト」（HOPE）
オ 「RED ONE」（Team んだGO！で）
(4) 夢よかなえ！公開プレゼンテーション・審査会
（一般入場者　150人）
(5) 大賞企画（賞金100万円）　いぐね？【IGN】
事後ガイダンス

高畠町

たかはた冬まつり

高畠町では、とかく閉じこもりがちな冬期にあって、寒さや雪を積極的に利用し、毎年一月から二月にかけて「たかはた冬まつり」を実施しており、二〇一〇年で二十六回目の開催となります。

「わらじみこしとお斎灯焼き」「冬咲きぼたんまつり」を冬まつり二大事業として、冬の〝たかはた〟の魅力が存分に楽しめるイベントとなっています。

「わらじみこしとお斎灯焼き」

（二〇一〇年一月十七日㈰）

竜寿院・大日如来坐像に奉納されている、大わらじ。伝承では、町内の湯殿山講中一同が、参拝成就の御礼として大わらじが奉納されたのが始まりで、旅の無事を祈り、足の衰えなどにご利益があると民衆の信仰を集め、足を丈夫にする神様として祈願されているものです。

この大わらじは、片足が長さ三・五メートル、幅一・

わらじみこし

五メートル、重さが約百五十キログラムあり、みこしやぐらを含めると約四百キログラムになります。この大わらじを裸の若者五十人余りが担ぎ、冬の厳寒の道のり約四キロメートルを清めの水を掛けられながら練り歩きます。

また、夜には旧正月の伝統行事「お斎灯（さいとう）焼き」が行われます。五穀豊穣、無病息災、家内安全を祈りながら燃え上がる炎は、冬の夜空を焦がすほど圧巻です。

◀斎灯焼き

▼松明

「冬咲きぼたんまつり」

（二〇一〇年二月六日㈯～十四日㈰）

通常、春に咲く牡丹を抑制栽培という方法で冬まつりの期間に合わせ開花させ、雪の中に咲かせた「春の大輪牡丹」を観賞していただこうというものです。

牡丹は、高さ百二十センチメートルのわらで編まれた「こも」の中に飾られ、赤や黄色、ピンクなど色とりどりの花が真っ白な雪の中に映え渡ります。夜にはライトアップされ、幻想的な雰囲気の中、日中とは違った顔を見せてくれます。

高畠町太陽館でご覧いただけます。

◀「冬咲きぼたんまつり」（平成22年2月6日㈯～14日㈰）

たかはた冬まつりに関するお問い合わせ先

高畠町商工観光課

TEL：0238（52）4482

FAX：0238（52）1543

E-mail：syoko@town.takahata.yamagata.jp

四季折々の自然や文化が楽しめる高畠町。今年の冬は〝たかはたの温もり〟に触れてみませんか？

川西町

地域づくり・人づくりの拠点として地区交流センターがスタート

川西町では、本年四月より町内七地区にある各地区公民館を「地区交流センター」に移行しました。これまで、社会教育施設として位置付けていた地区公民館を、住民自治の中核となるコミュニティ施設に切り替え「地域づくり・人づくり」の活動拠点として始動しています。

町内七地区では平成一八年度より、地域づくり協議会等が地区の課題について話し合い、住民が主体となってその解決に向けて取り組んでいくことを目的に、それぞれの地区計画を策定しました。この計画を推進するため、活動拠点となるセンター化の検討がされてきました。昨年度は地区交流センターの管理運営を担う新たな組織を立ち上げるために、地区社会教育振興会と地区内の団体の統合について整備が進められ、昨年末新たな運営母体が設立され、また各センターの愛称も決定しました。

このたびのセンター移行により各地区では、生涯学習・文化・スポーツの振興以外にも、地域づくり事業や地域福祉の活動、さらには地域資源を利活用するコミュニティビジネスの展開が可能となりました。現在各地区では地域資源を生かした、住民主役の様々な事業展開が進められています。今後各地区のセンターが本町の地域づくり・人づくりの拠点として、地域の皆さんに愛され、大いに利活用される施設となることが期待されます。

また町では、交流センターと町が連携を図り、地域の課題を解決していくための「地域づくり連絡協議会」を設置しました。現在定期的に協議会を開催し、町と交流センターが情報・意見交換を行い、地域の課題の解決のため互いに協力して取り組み、〝協働によるまちづくり〟を進めています。

総合型地域スポーツクラブ「スポーツかわにし」が設立

本年六月、世代を越えた町民の皆さんが様々なスポーツを楽しむことができる、総合型地域スポーツクラブ「スポーツかわにし」が設立されました。町全体としての総合型地域スポーツクラブは置賜では初の設立となります。

総合型地域スポーツクラブは、「いつでも、誰でも、好きなレベルで、いろいろなスポーツを、いつまでも楽しむ」ことを目的に設立されるスポーツクラブです。昨今は、ライフスタイルの変化や人口減少などから、各種個別のスポーツクラブを長期的に運営することが難しくなってきており、またスポーツに対するニーズも多様化し、様々なスポーツをやってみたいと考える人が多くなってきています。これらを解消するため、地域に根付き、長い間続けることができる総合型地域スポーツクラブの重要性が全国的に高まってきています。

本町の総合型地域スポーツクラブ「スポーツかわにし」は、平成二十年より町体育協会と町スポーツ少年団が母体となった「かわにし総合スポーツクラブ設立準備委員会」が主体となって準備を進めてきました。準備期間中は、町民の方へのスポーツに対するアンケートや体験スポーツ教室などを通し、子どもからお年寄りまで、町民みんなが楽しめるスポーツクラブになるため検討を重ねてきました。

今年度はバドミントン、ユニホッケー、卓球、スキー、ソフトエアロビクス、ニュースポーツの六つの教室でスタートし、九月末現在で、八十名の会員が登録され、世代を越えてスポーツを楽しんでいます。

また川西町には「スポーツかわにし」のほかにも地区で実施する総合型地域スポーツクラブが設立されています。平成一六年に設立された吉島地区の「マイマイスポー

ツクラブ」、また今年八月、東沢地区にも総合型地域スポーツクラブが設立されました。

今後は「スポーツかわにし」が町のスポーツ振興の拠点となり、各地区のクラブが互いに足りない部分（講師や用具など）を支えあい、より多くの町民の方がスポーツを楽しむことを目指していきます。

川西ダリヤ園に「天地人コーナー」を設置

NHK大河ドラマ天地人が放映。川西町は主人公直江兼続の実弟、連歌の名人大国実頼が最晩年を迎えた土地でもあります。

「天地人」の放映を記念し、今年川西ダリヤ園内には、特設花壇「天地人コーナー」を設けました。

この天地人コーナーには、大河ドラマ天地人の主要登場人物七人（直江兼続、お船、大国実頼、上杉景勝、上杉謙信、石田三成、前田慶次）をイメージしたダリアを植え付けました。主人公直江兼続は強さと愛をイメージする赤と義のイメージ白を併せ持つ「結納」が選ばれ、また兼続の弟大国実頼は、連歌における知的さと純粋な心をイメージした黄色い「詩集」など、人物のイメージに合った七種類のダリアが咲き誇りました。

また七人の主要人物のイメージダリアと共に、キャラクターパネルも展示されました。このキャラクターは人気イラストレーターの也（なり）さんにより描かれたもの。現代版にかっこよく描かれたキャラクターは、イメージダリアと共に来園されたお客さんを楽しませました。

来年、川西ダリヤ園は開園五〇周年を迎えます。この記念すべき年に向け、花をこれまで以上充実させるとともに、イメージアップとイベントの開催にも力を入れていきますので、多くの皆様のご来園をお待ちします。

小国町

森林資源を活用した地域振興の取り組み

小国町は山形県西南端の新潟県境付近に位置し、磐梯朝日国立公園に属する飯豊連峰、朝日連峰の雄大な山並みに囲まれています。町土の九割以上が森林で、その大部分はブナを中心とする広葉樹の森が広がっています。

その森が持つ癒し効果は、古くから森林浴として人々に親しまれてきました。

飯豊連峰の山麓に位置する温身平（ゆくみだいら）をはじめとした小玉川地域は、林野庁をはじめ医学者・生物学者・芸術家・作家・登山家など各界の専門家による森の癒し効果の検証を通して、平成十八年四月に森林セラピー基地に認定されました。森林セラピーとは、森がもっている癒しの効果を活かして私たちが本来持っている「こころ」と「からだ」の元気を取り戻そうとする取り組みで、森林セラピーアテンダント（案内人）が、ゆっくりと時間をかけて温身平の森を案内します。

ゆっくりと森林浴を体験

近年の取り組み

本年は、平成十九年のグランドオープンから三年目になります。平成二十年には、散策路を解りやすく表記した案内看板や、ゆっくりと森林浴を体験できるベンチの設置など、基地内の環境整備に取り組んできました。また、こうした環境整備のほかにも、森林セラピーアテンダントの養成にも取り組んできました。アテンダントの養成には、自然に関する知識のほか、小玉川地域で営まれてきた生活文化なども紹介できるよう、幅広い内容での研修が重ねられました。こうして現在は、地元出身のかたを中心に二十四名のアテンダントが活躍しており、訪問者からの要請に随時対応できる体制が整っています。

温身平（ぬくみだいら）案内板

アテンダントによる自主事業

本年度、温身平の魅力と森の癒し効果をもっと手軽に多くの方に体験してもらおうと、アテンダントによる組織（森林セラピーアテンダントミーティング）による自主事業「温身平ミニツアー」が実施されました。七月から八月にかけて実施されたこのツアーは、午前の部、午後の部とそれぞれに申し込みを受付け、約九十分間の森林散策を体験していただくものです。小学生の学年行事や一般個人・団体など、町内外から幅広い年齢層のかたが訪れています。

利用人数は増加傾向

森林セラピーアテンダントによる案内者数は、年々増

加傾向にあり、温身平の散策は、小国町への旅行動機として定着しつつあります。また、アテンダントを利用せずに、自由に散策を楽しむ方々の姿も多く見かけられるようになってきました。

森林セラピー基地の魅力を多くのかたに

森林セラピー基地に認定された小玉川地区には、豊かな森のほかにも、泉質の異なる二つの天然温泉や、古くから継承されてきたマタギ文化など、さまざまな地域資源があります。これらを組み合わせて地域全体を楽しんでもらうため、町では地元宿泊施設や案内人、地元団体などで構成される小国町森林セラピー推進協議会を組織し、森林散策や森林セラピーオリジナル料理、マタギ文化講座などをメニュー化した宿泊・滞在プログラムを提供しています。

また、森林セラピー基地を活用した新たな取り組みとして、地元公民館が主体となって、地区に継承されている生活文化や伝統行事を体験する交流事業を平成二十年から実施しており、今年度は「わらび山焼き体験」と「小正月行事体験」を企画しています。さらに、今年度は森林セラピーアテンダントミーティング、置賜森林管理署、町内教育機関の連携により、森林セラピー基地を活用した森林体験学習や環境教育プログラムの展開にも取り組んでいます。

町では、この森林セラピー事業を継続的に展開し、より多くの方にその魅力を感じていただくことで、交流人口の拡大と地域の文化や景観、人材などの再評価を図り、地域の活性化につなげたいと考えています。

わらび山焼き体験

白鷹町

白鷹町文化交流センター AYU：M（あゆーむ）がオープン

白鷹町は、最上川を挟み荒砥地区と鮎貝地区の二つの市街地がそれぞれに機能を分担しながら一体感のある町づくりを進めてきました。

平成十六年、白鷹ニュータウン「四季の郷」として、宅地の分譲を開始した鮎貝地区の土地区画整理事業もそのひとつで、平成十九年には地区内に山形鉄道フラワー長井線の新駅「四季の郷駅」も設置されています。

そして、平成十八年度に「出会い・体感・未来」というテーマを掲げ、誰もが立ち寄りたくなる町民に開かれた文化交流の場づくりを目指して、土地区画整理地内に、町の中核的な拠点施設となる「文化交流センター」の整備計画が策定されました。

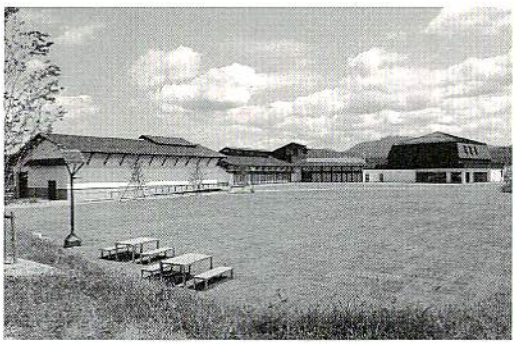
平成十九年八月から建築工事に取り掛かり、地元白鷹の木材（集成材）なども利用し、平成二十年十二月に完成した施設は、文化伝承発信ゾーン・ギャラリーゾーン・多目的交流ゾーンの三つのゾーンから構成され、さらに外部には多目的交流広場が整備されたものです。

文化伝承発信ゾーンは、各種教室・展覧会・ワークショップなどに対応した新たな情報の集積・発信の場となります。

ギャラリーゾーンは、三つのギャラリーからなり、主に町出身の洋画家・故梅津五郎氏の作品を常設展示したり、創作活動発表のための町民ギャラリーとして利用します。

多目的交流ゾーンは、音楽や演劇・講演会など多目的な用途に対応できるホールで、音響にこだわった施設となっています。

多目的交流広場は芝生広場となっており、ベンチやトイレ、せせらぎ水路なども整備され、ホールの窓を全開にすれば、



文化交流センター「あゆーむ」外観

施設と一体的な利用も可能な家族連れにも楽しんでいただけるスペースです。

施設の完成に合わせて愛称を募ったところ、全国各地から一七二八件もの応募があり、その中から候補を五点に絞り町民の皆さんに投票をいただいた結果、「あゆーむ」に決定しました。

この愛称には、

○白鷹といえば「あゆ（鮎）」

○文化交流の夢を乗せて「鮎夢」

○すいすいと交流拡大に向けて「歩む」

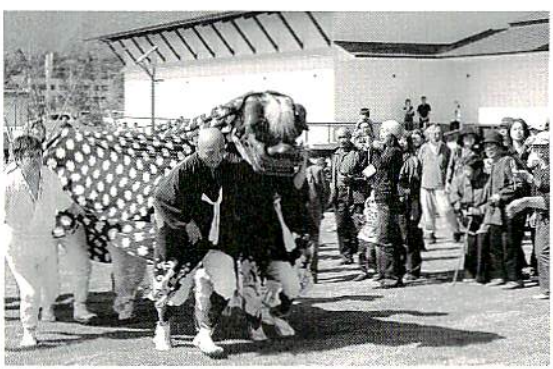
という思い（意味）が込められています。

今年十月四日、白鷹町誕生五十五周年の記念式典に合わせて待望のグランドオープンを迎え、白鷹町初の少年少女合唱団の発表会で幕が開きました。

少年少女合唱団による発表
（町誕生55周年記念イベント）

これまで町の芸術祭をはじめ、さまざまなコンサートや発表会・講演会に利用され、町内はもとより町外のかたからもご来場いただいています。

この「あゆーむ」をまちづくりの拠点施設とし、文化活動を通して新たな交流が生まれ、そして次代を担う子どもたちの心を豊かに育み、大人も楽しむことができる感動を共有できる空間として大いに活用して参りたいと思います。



多目的交流広場で行われた獅子舞
（町誕生55周年記念イベント）

飯豊町

"にぎわい再現"プロジェクトが本格始動

プロジェクト委員会を設立

いよいよ飯豊町では、昨年十一月に七代目町長に就任した後藤町長の公約である「にぎわい再現」に向けた事業が始動しました。

にぎわい再現とは、イベントなどの一過性のものではなく、普段の生活で見かけることが少なくなったお母さんたちの井戸端会議や子どもたちの遊ぶ姿など、日常生活のにぎわいを再現することです。

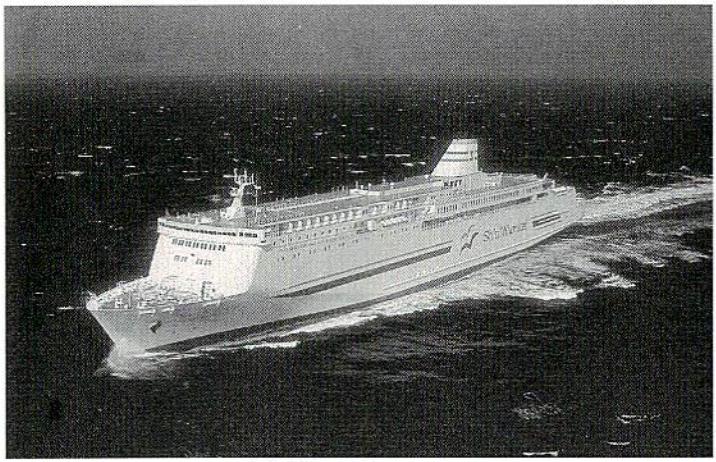
四月一日からは、専門部署となるプロジェクト推進室が総務企画課内に設置されました。さらに同月二十一日には、町民から公募で選ばれた十三名の委員と町長、町の事務局が出席し、にぎわい再現プロジェクト委員会の初会合が行われました。

委員の皆さんは、月二回程度集まり、「にぎわい再現」に向けた計画・事業立案の話し合いを続けています。

最終的に委員会で作成された案は、町長に報告され、承認を受けたのち、町の施策に反映されます。

にぎわい再現プロジェクト委員会会議の様子

いいで未来号の出航



参加者を乗せたフェリー

七月十八日、にぎわい再現プロジェクトの一つである洋上で楽しく未来を語り合う「いいで未来号」が出航しました。

目的は遠く町を離れ、町の夢と将来をとことん語り合ってもらうこと。それが新しいまちづくりのエネルギーになることを期待してのことです。

一般の応募者二十七名、にぎわい再現プロジェクト委員六名、それに町長と事務局の合計三十六名が参加しました。一般参加者の平均年齢は三十歳。これからのまちづくりを担う人たちが、積極的に参加してくださったのは頼もしいことでした。

いいで未来号の行程

一行は、新潟港から北海道小樽港までフェリーで航海しました。

フェリーの中で、参加者は班に分かれ「町の将来の理想の姿」や「今、町に必要なもの」「こんなことをやってみたい」などと思いつくままに話し合いました。そして自由に「夢」を出し合い、それを付箋に書き留めて、似ているものはグループ分けするKJ法と呼ばれる議論の方法で夢をまとめる作業を行いました。

二日目は、本町も加盟する「日本で最も美しい村」連合の発祥の地、北海道美瑛町を視察。広大で美しい丘の

景観が有名な町です。残念ながら雨に見舞われ、「パッチワークの路」を満喫することはできませんでしたが、バスの中や施設内で地元組織「赤麦を守る会」の松田将照会長や町職員から、景観を守るための取り組みについて説明を受けました。本町にとっても美しい農村景観を守っていくためには何が必要かを考えるきっかけとなる有意義な研修となりました。

帰りの海は、波は高く、フェリーは大揺れで、船酔いする人が続出しました。しかし、船上で迎えた三日目の朝からも参加者は気力を奮い起こし、「町の夢」とアイディアを班ごとにまとめる作業に集中しました。一枚の大判用紙にまとめ、班ごとに発表。力強く自分たちの夢を語りました。各班の発表が終わると互いに称えあうように拍手が送られていました。

午後三時、新潟港が見えてくるころには、すっかり空は晴れ上がり、海も空も真っ青でした。まるで町の未来を切り開く若者に語りかけるようでした。「荒波の試練を乗り越えたとき、きっと町には明るい未来があるはず」と―。

にぎわい再現プロジェクトは次のステップに入ろうとしています。

フェリーの中で「町の夢」について語り合う後藤町長と参加者

トピックス 1

山形大学工学部・大学院理工学研究科

街中キャンパスの開設

山形大学大学院理工学研究科
教授　松田　修

この十月一日に米沢市内平和通りに山形大学工学部・大学院理工学研究科の街中キャンパス〝ものづくり・ひとづくりキャンパス〟が関係省庁、米沢市や商工会議所、銀行、関係企業、団体等からの多大のご協力を得て、オープンしました。大沼デパート米沢店の丁度向かい側で、株式会社コムネットバンク様から借用した、もともと店舗のあった場所です。一階は現在講義室及び講演会等に使用しており、二階部分は一階の約2倍のスペースがあり、事務所、来訪者対応、実験室及び講義用の多目的フリースペースとして供用開始したところです。事務所はより効率的な使用を期して、好きなところに陣取って事務作業をするフリーアクセス形式になっています。

現在、スタッフが数名常駐しており、来訪者対応、講義、講演の準備、学内外との連絡、通信業務等を開始しております。これは日本でも例のない取り組みでもあります。

開所式は十月一日にこの街中キャンパスで、大学関係者のほか、来賓として東北経済産業局、置賜総合支庁、米沢市、米沢商工会議所、地元金融機関等から多数の参加を頂き、盛大に行われました。この様子はテレビや新聞の報道でも行われました。当日記念行事として、政策研究大学院大学の橋本久義教授による、「サブプライムに負けるな～中小企業の底力～」と題した元気のでる講演が行われ多数のご参加を頂きました。また翌二日は成城大学の神田範明教授による「仮説からものづくりへ」と言う演題で記念講演も実施され、本学の学生のみならず、産業界からも多数のご参加をいただきました。十月二十二日には県知事にも訪問いただき、その設立に趣旨を説明いたしたとこ

ろです。次にこのキャンパスの開設の背景、主目的、今後の方針等について述べます。

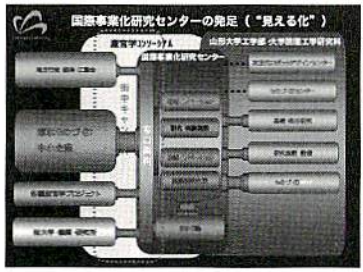
1. 開設の背景とその目的

①「既に起こった未来」とピーター・ドラッカーが言っているように少子高齢化は地域社会ひいては日本全体の問題となりつつあります。加うるに昨年末のリーマンショック以来の経済リセッションを武力なき第三次世界大戦と捉え、またしても単独敗戦国となりつつある地域及び日本全体をどう立て直すかが急務です。また、七〇〇強ある全国の大学の約半数が消滅すると言われており、大学においてもその影響は甚大です。このような時こそ地域の生き延びのため産官学が連携して（コンソーシアム）どう対処すべきかを真摯に議論し、結論を強力に実行する必要があります。さらに大学が率先してその先導役をする必要があります。

また大学においてはその二大柱の一つである教育を大学側から一方的②カリキュラムを決めるのではなく、受益者からみて必要かつ「ためになる」、「おもしろい」内容に産官学共同で検討する必要があります。そのためには大学から率先して街中に出て関係者と熱く議論する必要があります。

②大学の〝見える化〟そして〝見せる化〟

昨年、約四十年世話になった産業界を引退し、縁がありまして興譲館高校時代の同級生である柴田孝教授とともに山形大学で仕事をすることになりました。なるべく産業界からの来訪者が気軽に来られることを願って、我々の居室のある場所を〝産学かけはし横町〟と銘々しましたが、それでも入りにくいとの意見もありました。加えて、産業界にいたころの経験として、大学の内部が外から見えにくく、どこにどんな相談をしたらいいか躊躇することが多かったわけです。大学に通い始めて一年たちましたが、内部にいてもその適切な窓口や組織といわれるもの



がよくわからない現状です。そこで思い切って単純な顧客志向と5Sの考え方から、関係者と議論をかわし、この十月一日からその改善第一弾として、旧ベンチャービジネスラボラトリーと地域共同研究センターが単一の組織となり〝国際事業化研究センター〟となったわけです。（〝見える化〟）その機能を図（前頁下）に示します。さらにもっとアクティブに認知されるために〝街中キャンパス〟を出店しようということになり、今回の開設となったわけです。（〝見せる化〟）

2. 現状と今後の方針

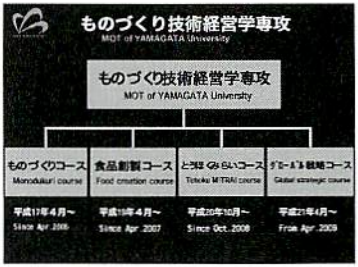
①講義・講演会・塾等の開催

街中キャンパスでは現在、4コースあるものづくり技術経営専攻（MOT）の内のグローバル戦略コース（小野教授）、及び共通コースの生産革新－Ⅰ及び－Ⅱ（柴田教授及び小職）が週末に開催されております。一階の歩道から見えますので、是非覗いてください。このMOTは下に示したように、四つのコースがあり、終了すれば修士（コースにより博士）の資格が得られます。現在は学部から進学した学生より、圧倒的に社会人が多く、内容的にはより産業界よりのインタラクティブで実学中心のものとなっております。また中小企業基盤整備機構主催の米沢ものづくり若手経営者塾が六回ほど実施されますが十月九日にその第一回目がキャンパスで開催され、市内の若手経営者が参加しました。

また十月二十日には街づくりセミナーとして弘前大学の北原啓司教授を招いて談話会を開催しております。

②今後の方針

講義や講演は勿論のこと、ベテランシニアに常駐していただき、経営者との相談に応じたり、起業に関する相談や新たにどこと繋ぐかなどの相談に気軽に相談できるフリースペースにしたいと思います。勿論、随時学生の相談（オフィスアワー）の場所ともなります。手本は本



郷三丁目にある、街中の「東京大学ものづくり経営研究センター」です。また米沢市の街中活性化にも寄与すべく、共同でのプロジェクト推進基地を目指したいと考えます。更に有機ＥＬの裾野を拡げるべく、全国規模である、高度専門技術者養成の〝あかり塾〟の本拠地とすべく準備中です。

八月に東京荒川区の区庁舎に西川区長のご協力により山形大学荒川サテライト（本学の責任者は工学部キャリアセンターの志村勉教授、）が開所しましたが、荒川区の中小企業と置賜の中小企業とのビジネスマッチング、工場増設等の具体的進展の場としても利用できればと思っております。また市内、県内のみならず、南東北（宮城、福島、新潟）の広域経済圏、他大学との連携、海外への接続ポイントとしてもご利用頂けるような形にしていきたいと思います。

来年百周年を迎える、日本で最初に産学連携から始まった山形大学工学部が、日本のものづくりが欧－米－中のネットワークから外れ、Nothing-Japan とならぬように、地域の先導役になってグローバリゼーションに対応できるようになりたいものと考えます。また、たったＧＤＰ比一二％（二〇〇八年）にしかすぎない日本の輸出依存度に対して内需拡大だけで良いのかなど、侃々諤々と議論をしながら将来あるべき姿を模索したいと考えております。併せて街中回帰活性化の起爆剤ともなれば幸甚であります。何卒皆様の絶大なご理解・ご協力を賜りたいとお願い申し上げる次第です。

トピックス 2

兼続の盟友　前田慶次

NHK大河ドラマ放映の影響が大きく、全国の人を行動的にさせていることを改めて感じる。上杉博物館で開催されている「天地人博」は予想入場者数二十五万人を超え今や五十万人を突破しそうな勢いである。平成十三年に開館してから通算百万人を超えたという。

全国の大河ドラマファンが米沢を訪れて、歴史の町米沢を見直しているのではないだろうか。この度、地方の武将直江兼続が全国に名を覇せたことで、関連の歴史スポットが注目されている。

NHK大河ドラマ「天地人」の主人公直江兼続の盟友として、戦国武将でかぶき者としても有名な前田慶次が米沢城郊外の堂森で没したと伝わっている。全国の前田慶次ファンが米沢を、堂森善光寺を、慶次清水を訪れている。前田慶次という武将を大きく紹介したのは、隆慶一郎の歴史小説「一夢庵風流記」であろう。それにこの小説を原作とした漫画「花の慶次―雲のかなたに―」が若者の心をとらえ大ヒットした。今ではさらにパチンコの戦国武将でバージョンアップしているという。その前田慶次が米沢で死んだと伝わっていることから、前田慶次に会える街という宣伝がある。

謎の多い前田慶次であるが、米沢説を解いてみる。

1、前田慶次の出自　～生没不詳の理由

出生は滝川一益の甥説、滝川義太夫益重（一益の甥または従兄弟）の息子説、弟説などあり確定されない。前田利久の妻は義太夫の妹とされる。

死亡は米沢説では慶長十七年（一六一二）六月四日無苦庵または太郎兵衛屋敷で七十余歳で死亡と伝わる。市内北寺町一花院に葬られる。又は堂森とも伝わる。加賀説では慶長十年（一六〇五）十一月九日前田利長に蟄居せられ大和刈布で没(七十三歳)。また福島、会津死亡説もある。これらから生没不詳の人となる。

死亡から逆算して加賀説では天文二年（一五三三）生まれ、米沢説では天文十年（一五四一）ころ生まれたとする。直江は永禄三年（一五六〇）生まれなので慶次は二十八歳年上(加賀説)、十九歳年上(米沢説)となる。また最上攻めでは、慶次の年齢は六十八歳（加賀説）、五十九歳（米沢説）、直江は四十歳である。体力からし

て米沢説が妥当と思われる。

2、直江兼続との出会い　～前田家出奔

前田利春死後永禄三年（一五六〇）長男利久が荒子城主となる。永禄十二年（一五六九）十月、信長の命で前田家は四男利家が家督。慶次親子は追放される。これから十数年親子の足取り不明となる。天正九年（一五八一）利家加賀金沢入城。この頃慶次親子は加賀で七千石を給され一時帰順する。養父利久天正十五年（一五八七）没。慶次は天正十八年（一五九〇）前田家を出奔。文学を好み和漢の書を読み詩歌の道にいそしんだ浪々の生活だったろう。京都で上洛した直江と詩歌の会などで共通の師友（南化和尚、里村紹巴など）を持つ二人が出会っていることだろうと窺える。

3、　前田慶次の活躍　～直江を救った恩人

慶長三年（一五九八）一月、景勝会津百二十万石へ移封となる。慶次はこのとき他の浪人衆とともに上杉家に千石で仕官する。慶長三年八月秀吉没。慶長四年（一五九九）三月前田利家没（六十三歳）。慶長五年二月景勝、会津に神指城築城を命ずる。四月十三日家康の使者が直江宛の豊光寺承兌の書状届ける（四月一日付け）。四月十四日付けで承兌あての返書（直江状）を渡す。五月三日家康内容を知って激怒し会津征伐に動く。上杉は白石河護原で決戦の計画を建てる。七月二十四日家康小山に着く。この時石田三成挙兵の報に接し引き返す。

九月八日直江率いる上杉軍は最上に進攻。畑谷城を攻略し長谷堂城を包囲する。九月十五日関ヶ原合戦で家康率いる東軍が勝利。九月二十九日関ヶ原合戦の敗報が届き、景勝は直江に撤退を命ずる。「武辺咄聞書」によると、この時直江は自刃を覚悟した。その時「およそ一軍の将たる人は、いたずらにこんな場所で死に急ぐことがあってはならない。」と前田慶次が言い、「後方の敵はわしが押し返す。味方の撤退を進めてくれ。」と突進した。慶次は殿軍を勤め大活躍した。ここで慶次は直江の命の恩人となる。直江が無事米沢に帰り米沢の町づくりをすることが出来た。

4、前田慶次の道中日記　～文化人

関ヶ原戦後、景勝は家康に和議交渉に入る。慶長五年十一月本庄繁長を使者として、本多正信に家康へ謝罪のとりなしを願う。（この頃慶次も上洛したといわれる）翌

慶長六年七月景勝上洛。同年八月十六日家康の命により米沢三十万石に減封される。十月十五日景勝京都伏見を発し十一月二十八日米沢に着く。慶次は十月二十四日伏見を発し、十一月十九日米沢に着く。

このときの道中日記が米沢図書館にある。慶次自筆の日記とされ、短い紀行文であるが、古文に精通し、漢籍をよくし、和歌俳諧に通じ、地理に詳しく文化人ぶりがうかがわれる。

また土地の民話や俗話に耳を傾け、地誌を書いていて民俗資料としても貴重。古歌古句を引用し自ら巧みに和歌を挿入している（工藤定雄氏評）。二十七日間の旅。旅の初日は浮世の旅（人生の旅）はつらいもの、別れることの辛さを感じさせる。しだいに旅を楽しんでいる様子が出てくる。最後は陶渕明の「帰去来の辞」を引用して、ついに目指す米沢にたどり着いた嬉しさを喜んで、走って行った。と締めくくっている。

5、前田慶次の余生　～堂森無苦庵で悠々自適

米沢に着いてからの慶次の行動もあまりはっきりしていない。五百石を給されたとも言う。翌慶長七年二月二十七日、亀岡文殊堂で詩歌の会に参加し、和歌5首を読んでいる。直江、慶次ら二十七名の短冊が亀岡百首として残っている。この頃堂森に無苦庵を建て住んだものと思われる。おおむね七十五M四方の範囲に濠と土塁の遺構がある。「邑鑑」によると当時の堂森には四十四戸百六十六人が住んでおり、慶次は村人と相和し、花鳥風月を愛で悠々自適の生活を送ったとされる。

6、前田慶次の史跡や遺品　～米沢に多い理由

慶次が住んでいた堂森、堂森山周辺には史跡がたくさんある。〈四百年以上前〉生活用水とした慶次清水、無苦庵跡、月見平（御月山）、太郎兵衛屋敷跡、比丘尼平、慶次の力石、志駄家の墓所、〈二百年以上前〉白山堂跡、山の神神社など、〈三十年前〉慶次供養塔（現住職が昭和五十五年に建立）など。

遺品としては宮坂考古館にある甲冑をはじめ編み傘や槍、慶次自作と伝わるお面、生活雑器の茶碗や皿。亀岡文殊堂に和歌の短冊、慶次自筆の道中日記、書簡（倉賀野あてやミカンのお礼状など）、米陽八景（堂森秋月図）、北寺町一花院跡、菊粋工芸館の慶次所用甲冑。たくさんの遺品や史跡があるということは、一年や二年住んだのではなく十年くらいこの土地で暮らしたから残っている

ものと考えられる。

7、前田慶次の逸話　～強きを挫き弱きを助ける

慶次の逸話はたくさんあり、逸話によって慶次像が形作られているといってもよいほどである。「前田慶次道中日記資料編」や冊子「前田慶次ゆかりの里堂森」などで、慶次の心を楽しんでください。

四百年前の自然が今の残っており、慶次の住んだ匂いがする場所として訪れる人の心を癒やしてくれる歴史スポットである。

《資料1》無苦庵の記（加賀資料参照）

そもそも無苦庵は、孝を勤むべき親もなければ憐むべき子もなし、心は墨に染めねども、髪結うがむずかしさに、つむりを剃り、てのつかい不奉公もせず、足の駕籠かき、小物やとわず、七年の病なければ、三年もモグサも用いず、雲無心にして岫を出ずるもまたおかし、詩歌に心なければ月花も苦にならず、寝たければ昼もいね、起きたければ夜もおきる、九品蓮台に至らんと思う慾心なければ、八万地獄に落ちる罪もなし、生きるまで生きたらば、死ぬるでもあろうかと思う。

―悟りきった心境、
世俗にこだわらない人生観を披露している―
―最晩年は腫れ物や腹の病に悩まされている―

《資料2》前田慶次供養塔の碑文

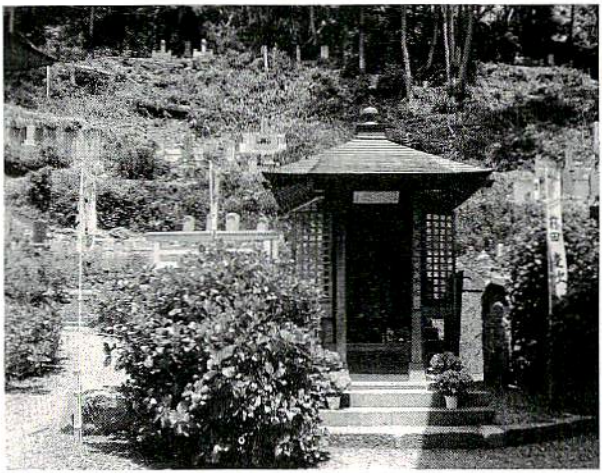
高さ一八五センチメートル、台座三〇センチメートル、御堂平成十八年

前田利貞は、加賀藩主前田利家の甥、叔父利家に仕えて小田原攻めに参戦、後、己を知る天下唯一の武将として直江兼続を知りその主上杉景勝公に生涯を託した。慶長五年最上討伐には直江と共に出陣の大いに戦い、殿軍をつとめ完全撤退を果たして歴史に名を留めた。後この地堂森に居を賜り邸を「無苦庵」とよび悠々自適、この地を愛し郷民と親しみ、慶長十七年六月四日七十歳の生涯を閉じた。慶次は天性豪放磊落奇行に富み文武は勿論広く諸芸道に通じ無苦庵記、道中日記、亀岡文殊奉献和歌がある。前田邸跡慶次清水月見平に今も慶次は生きている。

昭和五十五年十月吉日

松心山光照院善光寺中興三十五世　酒井清滋

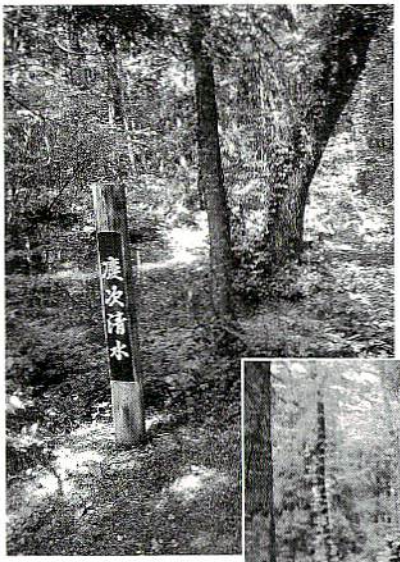
上杉家家職　　山田武雄撰並書



供　養　塔

岩崎石材工業㈱岩崎祐吉施工
外有志一同

米澤前田慶次の会　会長　梅津幸保



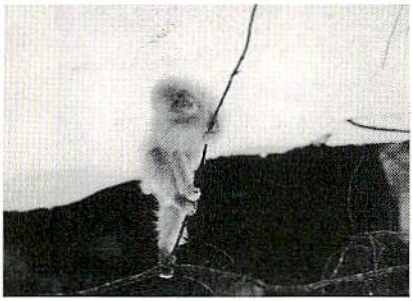
◀慶次清水

▼駅からハイキング

会員の広場

第四十五回米沢市民芸術祭 総合写真・文学合同展より

写真　綿　文夫



「あそび」

枝つたひ下りくる子猿空見上げ人間に似し表情したり　岩間　登美

残雪に餌を求める子ざるかな　木村　正子

戯れる白猿可愛い寒日和　佐久間律好

秋深し峠の白猿膝を抱く　佐々木　昭

逆しまの白猿遠望街の春　原田　芦雪

白猿の蔓にさかしま雪遊び　湯沢　なか

白猿の吾妻の雪に遊びゐて　鈴木　晧恵

親離れ独り遊びの冬の山　高橋　葉月

写真　遠藤　孝志

「かくれんぼ」

咲き匂ふ赤きダリアの花のなか子を抱くごと蕾顔出す　古川千恵子

花咲きて今の煌めき人の世の瞬くほどの命いとしき　富川　義朗

甘ゆるも庇ふも美しき紅ダリヤ　神原　省治

顔彩の不足となりし緋のダリヤ　佐々木泰子

恋心秘めし乙女やダリヤ咲く　松谷　忠和

花蕾母に抱かれて笑みたたえ　近野　雨堂

写真　山中　三平

「山　路」

木漏れ日の山路を長く歩みきて先行く子らの弾む声聞く　小池　きみ

落ち葉踏むその音もまた心地よく峠道行く陽だまりの道へ　泉　多恵子

月よみのうた吟じつつ山路ゆく落葉つもれる木漏れ日の中　佐藤みち子

翁道思はす樹影花芒　磯部　知子

秋風や山路にひびく瞽女の鈴　伊藤　勉

紅葉山音乾きたるけもの道　木村　正子

峠来て落葉の逆光とどまらず　佐々木　昭

人ごゑの近づいて来る秋の山　二宮　弘栄

出世とは無縁一本道を行く　山口まもる

短　歌

東京支部　金子孝治郎

引けば直ぐ幾何の解き得る補助線の
　如きがあらな混迷の世に

乱世にあればや永久に変らざる
　天体の動きに畏敬を覚ゆ

「為せば成る」とふ鷹山公の御言葉は
　実践されたる故に尊し

この年の米沢はテレビに輝けり
　兼続公に謝して止まざり

思ひ出づ快く歩み通せしを
　米沢駅より小野川の湯辺まで

「漆の実」俳句会近況

鈴木　淳一

「漆の実」句会も発足して丸三年。一ト月に一回の定例句会は一回も欠かさずに今日まで来た。それだけに腕もあがり、後記の諸氏、諸嬢の作品には素晴らしいものがある。これからは機会があれば、全国の俳句大会にも率先して応募出句して欲しい。石の上にも三年のたとえがあり、問題はこれからだ。私の先生の俳人・秋元不死男よりは、毎日一句を作れとつねに叱咤された。もちろん有為会の一親睦句会ではあるが芸事はやはり上へ上へ目指すべきだろう。

毎月、上野文化会館の一室を借り句会をやっている。日・時は会場の都合で決まっていないのが玉にキズ。初心者の方も大いに歓迎。頭の体操になり、ボケません。お金もかからず鉛筆一本とペーパー一枚だけですみます。

これからも下條顧問、小山庶務幹事、佐伯会計幹事のスタッフを中心に全員で句会を盛りあげてゆきたい。

最近の印象に残った好句を抽出し近況とする。

○大関　蝸牛

無人駅ひまわりパッと迎えたり
鏡台に亡き母の櫛九月尽
とうがらし十七年目の無罪かな

○片山　舟波

鳥渡る半農半渙の村の宿
秋草やジョッキングコース脇に逸れ
森深く柚子の実落す一樹かな

○松坂　六儀

リハビリに泣きつ笑ひつ九月尽
草の花一輪挿せば部屋せまし
寺に門限即ち山茶花の門限

○登坂かりん

ひまわりの影落つる土黒々と
赤まんま直江石堤風さわぐ
森繁逝くとんとん輪切る唐辛子

○池田弁之助

朝曇唱歌が聞え奏楽堂
ごつごつの石見合わせる秋の川
白が好き山茶花の垣今朝の道

○佐伯　雅

村おこし寺に集り九月尽
逆さ吊り夕日に映える唐辛子
荷を解けば赤唐辛子日の匂ひ

○加納　和子

小さき空ひまわり畑の迷路ゆく
山茶花や予防接種の児を抱え
地下劇場（アングラ）に青春の夢冬浅し

○下條　怡生

朝曇耀り市の牛暴れをり
秋草に坐りて頭空っぽに
山茶花や紅ぽつりさす媼いて

○小山八州央

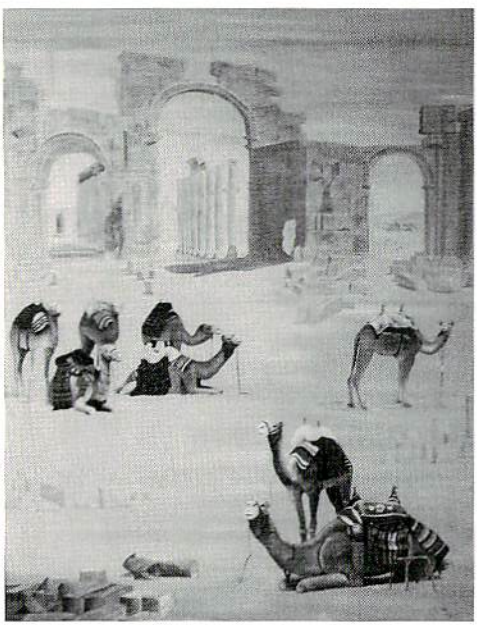
手の甲に文字記す娘や九月尽
秋草やどの道標も尾瀬を指す
今年生きどの秋草も押花に

○鈴木　淳一

人形の肢体が浮かぶ秋の川
鍵束腰に青年の鬱冬はじめ
米澤に城濠残りの秋闌けるける

絵画

高橋　丈夫（米沢支部）
山形県美術展入選　２００８
「休　憩」
F80号油彩



社団法人 米沢有為会役員名簿

平成二十一年十一月現在

名誉会長
上杉邦憲

名誉会員
小幡常夫
本間敏雄

会長
（理事）下條泰生

副会長
（理事）安部三十郎
（理事）須貝英雄

理事
安部英夫
石原俊一
梅津幸保
大滝則忠
貝沼孝二
開沼啓
加藤国雄
加納和子
甲國信
上村勘二
菅野榮三
菅野憲幸
小山泰
佐藤毅
柴田孝
鈴木幸一
鈴木信之
情野文男
高橋勉
手塚修
中川紘一
沼澤研一
原弘一
平山英三
御供政敏
米野宗禎

監事
伊藤秀太郎
中條良文
西澤榮一
本多和彦
山方雅春

評議員
（仙台）安部金之丞
（東京）安部忠彦
（同）安部洋司
（同）飯沼俊男
（米沢）五十嵐京子
（同）井熊征一
（同）江川栄助
（東京）大石道夫
（同）柿間彰
（同）片平善造
（米沢）加藤真琴
（同）金子晃司
（同）金子孝治郎
（東京）川合勝雄
（同）菊地隆雄
（同）木村有恒
（米沢）小林伸也
（東京）齋藤彰
（同）佐伯雅子
（同）佐藤憲一
（同）佐藤陞三
（同）佐藤好明
（米沢）柴田正孝

（東京）白根澤　利雄
（北海道）須藤　進
（米沢）高橋英機
（仙台）滝口政彦
（京都）谷　榮政
（米沢）塚田昌伸
（仙台）塚原保夫
（東京）永井忠弘
（仙台）林　一郎
（東京）平山和博
（同）深沢和子
（同）本郷友信
（同）宮坂孝夫
（同）村石房男
（同）村山浩和
（同）山田幸生
（同）渡邉忠義
（以上平成二十一年八月満期）
（東京）赤井淳一

（同）安部壮一郎
（同）五十嵐　亨
（同）伊藤隆明
（同）伊藤貞治
（同）今井浩之介
（同）岩瀬和子
（米沢）遠藤善則
（仙台）大武清夫
（東京）川井陽一
（同）木村品子
（米沢）工藤正三
（仙台）香坂昌紀
（東京）小林栄作
（米沢）小林　榮
（同）小林伸一
（京都）齋藤昭一
（東京）佐藤宏吉
（同）佐藤幸子
（米沢）佐藤政一

（同）山宮光雄
（東京）鈴木吉助
（地方）鈴木浩美
（米沢）清野幸男
（仙台）瀬川耕
（東京）瀧澤　新
（北海道）田村邦夫
（東京）西村　純
（同）橋本淳子
（同）羽隅弘宣
（同）畠山みつ子
（同）林　里子
（米沢）山木勇一郎
（東京）横山彰人
（同）吉田和男
（同）吉田仁志
（以上平成二十二年八月満期）

相談役

青木厚一

遠藤道雄
大関修敬
柿間　彰
加藤常吉
金子利雄
金子芳雄
九里茂三
小関　薫
小関昌幸
小森力雄
近藤鉄雄
佐野清一
鈴木脩二
関　宗三
曽根伸良
高橋　廣
高橋俊龍
高橋幸翁
鑪　信政

中條　仁
新野昌生
西澤徳雄
仁科盛夫
濱田五左衛門
星　一郎
松野良寅
三井　修

総務部

部長理事　平山英三
理事　石原俊一
同　鈴木信之
同　菅野憲幸
同　大滝則忠
同　貝沼孝二
事務局長　中川紘一
局員　小林栄作（十一月まで）
同　樋口正弘

参事　菅野昭彦
同　渡邉忠義
同　樋口正弘

教育部

部長理事　高橋　勉
理事　大滝則忠
同　沼澤研一
同　御供政敏
同　貝沼孝二
同　加納和子
同　上村勘二
参事　村山浩和
同　小野庄士

産業部

部長理事　柴田　孝
理事　情野文男
同　石原俊一
同　貝沼孝二
参事　村山浩和

文化広報部

部長理事　梅津幸保
理事　原　弘一
同　加藤国雄
同　中川紘一
同　沼澤研一
同　米野宗禎
参事　小林伸一
同　山宮光雄
同　石田一郎
同　鈴木秀男
同　山口弘子
同　鈴木美佐子

婦人部

部長理事　小山　泰
理事　米野宗禎
同　加納和子
参事　近藤郁子
同　佐伯雅子
同　青木恵子
同　鈴木淳一

組織部

部長理事　開沼　啓
理事　情野文男
同　中川紘一
同　沼澤研一
同　佐藤　毅
同　小山　泰
同　御供政敏
同　佐藤　毅
同　鈴木幸一
同　手塚　修
同　甲　國信
同　菅野榮三
同　安部英夫
同　加納和子

企画部

部長理事　佐藤　毅

理事　原　弘一
同　加藤国雄
同　菅野憲幸
参事　大野隆樹

教育委員

上杉季雄
江川栄助
吉田美智子
伊藤和夫

（理事及監事参加）

産業振興委員

種村信次
淀川泰正
佐藤俊弘

（理事及監事参加）

支部長

東京　情野文男
米沢　安部三十郎
仙台　甲　國信

京都　菅野榮三
北海道　安部英夫

興譲館長

東京　沼澤研一
同副館長　川合勝雄
同　小林栄作
仙台　御供政敏
同副館長　滝口政彦

我妻榮記念館

名誉館長　我妻　堯
館長　上村勘二
事務局長　鈴木幸一
運営委員　遠藤　拓
同　安部　敏
同　佐藤英男
同　五十嵐京子
同　高橋節子
同　本多和彦
管理人　小林秀一

東京支部役員

支部長

（理事）情野文男

副支部長

（理事）石原俊一
（理事）鈴木脩二

理事

青木恵子
飯沼俊夫
伊藤秀太郎
柿間彰
片平善造
金子晃司
加納和子
川合勝雄
川井陽一
菅野憲幸
佐伯雅子

監事

赤井淳一
瀧澤新

参事

伊藤隆明
今井浩之介
倉田和子
小林榮作
須貝英雄
鈴木吉助
鈴木信之
中川紘一
西澤榮一
羽隅弘宣
樋口正宏
宮坂孝夫
山方雅晴
米野宗禎
渡邉忠義

近藤郁子
林里子
館長 沼澤研一

評議員

安部壮一郎
安部忠彦
五十嵐亨
岩瀬和子
伊藤貞治
大滝則忠
貝沼孝二
神野民夫
木村品子
木村尚武
倉田和子
小山泰
後藤謙三
佐藤毅
佐藤陞三

鈴木うめよ
高橋廣
畠山みつ子
林里子
深澤和子
舟山国夫
山田雅宏
淀勇夫

（以上平成二十二年五月満期）

安部洋司
伊藤隆明
今井浩之介
上野和久
大石道夫
加藤明彦
加藤国雄
川越一郎
小林榮作
近藤郁子

五雲寺卓
坂井武宣
佐藤幸子
平晋策
瀧澤昭義
新野恭一
橋本亨子
平山和博
原弘一

（以上平成二十三年五月満期）

本川裕
村山浩和
山田幸生
横山彰人
吉田和男

米沢支部役員

支部長

（理事）安部三十郎

副支部長

（理事）高橋勉
（理事）梅津幸保
（理事）本多和彦

理事

五十嵐京子
石田一郎
井熊征一
江川栄助
遠藤善之
小野庄士
上村勘二
加藤真琴
蒲生直樹
小林栄
小林伸一
小林伸也
佐藤政一
佐藤他人太

山宮光雄
柴田孝
柴田正
（常務）鈴木幸一
鈴木秀男
清野幸男
高橋節子
高橋丈夫
塚田昌伸
手塚修
山木勇一郎
吉田美智子

監事

上杉季雄
中條良文
淀川泰正

評議員

安部敏
阿部虎雄
稲村修
岩間弘一
漆山裕
遠藤善則
加藤功
加藤義彦
川野裕章
神尾潔
工藤亮介
桑原君子
下條邦彦
後藤浩
小林圭一
佐藤恵次
佐藤富士雄
島倉静夫
白田悟
庄司芳彦
高橋英機

武田誠一郎
玉上利恭
手塚宮雄
戸田直博
野本弘
長谷川啓二
福崎真知子
舟山豊弘
前山健二
松田修
皆川秀雄
山口昇一
山口弘子
渡部秀丈

顧問

遠藤武彦
木村忠三
後藤源
高橋幸翁

武田誠
中川勝
野村研三
横沢三男

相談役

安部行雄
石塚忠夫
上杉虎雄
遠藤英明
大久保利之
大友久太郎
川崎豊
工藤正三
小関薫
佐野清一
島田康雄
鈴木徳松
曽根伸良
高橋昭

濱田　五左衛門
町田富保
松野良寅
村山正一

参事

伊藤秀一
高橋章
本間浩
宮本秀行
米浩二
多田利幸
赤木義信
鈴木隆

仙台支部役員

名誉顧問

中條仁

支部長

（理事）甲國信

副支部長

（理事）安部金之丞
（理事）塚原保夫

理事

（事務局）御供政敏
大武清夫
加川巌
亀岡祐一
栗田一巳
香坂昌紀
今野多助
鈴木良平
滝口政彦
高橋宏
田林晄一
中條仁
廣瀬純
本田健夫
長澤健一

御供政敏
和田美知子

監事

遠藤三郎
加藤啓二
高屋晴三

京都支部役員

支部長

菅野榮三

副支部長

谷榮政
斉藤昭一

庶務幹事

岩崎淳
保科喜重

顧問

新野昌生

理事

岩崎淳
菅野榮三
斉藤昭一
谷榮政
保科喜重

評議員

売間公男
後藤誠
塩野光助
高木正助
高橋章
高橋雅雄
遠藤健次
小野島亀一
星利三
水科宗興

北海道支部役員

支部長
安部英夫

副支部長
田村邦夫

理事
佐藤俊一
芳賀秀樹

評議員
鈴木吉行
須藤進
関二郎
孫田敏
田中健治

相談役
佐藤豊
大峡康治

興譲館寄宿舎OB会

名誉会長
下條泰生

会長
大関修敬

副会長
羽隅弘宣（東京OB）
安部英夫（仙台OB）
芳賀秀樹（札幌OB）

幹事長
佐藤毅

副幹事長
大滝則忠
川合勝雄

幹事
中條仁
原弘一
沼澤研一
山方雅晴
樋口正宏
加藤国雄
高山征一
本多和彦
菅野憲幸
宮坂孝夫
斉藤彰
上野和子
伊藤和夫

会計幹事
貝沼孝二

監事
川井陽一
飯沼俊男

顧問
石原俊一
小幡常夫
木村有恒
小森力雄
近藤鉄雄
金子芳雄
高橋俊龍
小関薫
安部三十郎
今田久夫
板垣義次
鑪信政
今井和夫

東京支部長
加藤国雄

副支部長
菅野憲幸
貝沼孝二

幹事長 宮坂孝夫

幹事
飯沼俊男
舟山国夫
安部洋司
佐藤陞三
平山和博
川合勝雄
島貫正夫
小関敦
鈴木正明
千喜良誠
佐藤憲一

会計幹事
赤井淳一
小野仁

監事
高瀬勝
中川政彦

米沢支部長 本多和彦

仙台支部長 中條仁

副支部長
甲國信
滝口政彦
本田健夫

理事
上野恒太郎
香坂昌紀
今野多助
塚原保夫
船山完一

顧問 瀬川耕

事務局
中川健一
丹野真敬

奨学生OB・OG会

（平成21年2月28日発足）
かっこ内数字は奨学金貸与開始年度

会長 加納和子（S30）

副会長
斉藤彰（S37）
村山浩和（S46）
小野庄士（S48）

幹事長 貝沼孝二（S47）

副幹事長
仁科義英（S47）
水見洋（S52）

幹事
遠藤一栄（S46）
渡部順一（H11）

監事
佐藤憲一（S44）

賛助会員名簿

社団法人米沢有為会の主旨に賛同いただき賛助会員としてご支援ご協力をいただいている方々です。

（敬称略）

法人名	代表者
東京支部	
日綜産業㈱	

(有)スズキライフ　鈴木脩二
大木リフォーム(株)　設楽保雄
(株)向洋アドシステム　金子晃司
NSK(株)　情野文男
こまつざ　井上郁子
澁谷印刷(株)　野本英夫
マコー技研(株)　東海達夫

（平成二十一年度）

米沢支部

（敬称略）

法人名	代表者
相田建設(株)	相田晃一
NECパーソナルプロダクツ(株) 米沢事業場	神尾潔
遠藤廣	
(株)置賜建設	川野敬典
(株)大清	中村邦夫
(株)小嶋総本店	小嶋弥左ェ門
さの医院	佐野隆一
鉄砲屋町町内会	磯清一
東北電力(株)米沢営業所	伊藤吉里
中條医院	中條明夫
浜田(株)	浜田純
舟山清	
(財)宮坂考古館	宮坂直樹
(株)丸定	佐藤良吉
米沢中央高等学校同窓会椎の実会	
若松工業(株)	片倉尚

（平成二十一年十一月二十日現在）

仙台支部

（敬称略）

法人名	代表者
(株)大江設計	大江勝雄
仙台環境科学(株)	加藤啓二
日本不動産(株)	栗田一巳
建装工業(株)東北支店	高橋学
(株)東北オフィスマシン	林崎まつ子

（平成二十一年度）

社団法人 米沢有為会 年表

西暦	年号	年	月/日	有為会事項	興譲館寄宿舎	奨学金制度	世態
一八八九	明治	22	11/23	「有為会」創立 伊東忠太他若き在京学生五名、本郷の合宿所に集い発足			1/21謙信公没後三一一年 4/1米沢市制施行 7/20鷹山公没後六七年
			12/14	「有為会雑誌」第一号発刊			
一八九〇		23	4月	飛鳥山公園で第1回運動会を実施			
			8/9	米沢中学に於いて発起人会・役員会開催			11/29大日本帝国憲法施行
				年末時点の会員総数四二九名			
一八九二		25	6月～	拡張寄付金募集			
			8/8	「米沢有為会」に改称			
			8/25	置賜座に於いて学術大講演会を開催			
一八九四		27	8月				日清戦争開戦
一九〇〇		33	8/15	米沢、赤湯、長井、小松に於いて第一回巡回学術講演会を開催			
一九〇四		37	2月				日露戦争開戦
一九〇七		40	2/15	京都支部設立	8月の総会において「東京・仙台に寄宿舎を設立する」旨、通則一部改正		
一九〇八		41	4/20	上杉憲章伯爵を総裁に推戴	東京興譲館寄宿舎建設の土地は上杉家から、建設費は興譲館財団からの援助により具体化		

一九〇九	明治	42	4/3	東京興譲館寄宿舎内に本部設置	2/28東京興譲館寄宿舎竣工、4/2入舎式、4/3開館式 第1回入舎生三十七名（東京市小石川区表町（現文京区））
			12/24	「社団法人」の認可を得る	
一九一〇		43	6/25		寄宿舎維持経営並びに奨学金基金充足のため基金募集
一九一一		44	4/26		「社団法人米沢有為会貸費規則」を制定し奨学金制度を開始 第一回奨学生三名
一九一四	大正	3	10/17		仙台興譲館寄宿舎開設（仙台市片平丁）
一九二三		12	8/27	拡張寄付金募集	
一九二五		14			仙台興譲館寄宿舎移転（仙台市角五郎丁一丁目）
			8/17	赤湯に於いて第一回夏期大学を開催	
			12/7	札幌支部設立（昭和五十四年に北海道支部に改称）	
一九三〇	昭和	5	9/1		札幌興譲館寄宿舎6/30竣工、九月入館（札幌市北七条西十二丁目）
一九三二		7	4/29	満州支部設立、7/7朝鮮支部設立	
一九三四		9	10/14		東京興譲館寄宿舎新築移転（淀橋区西大久保四丁目（現新宿区））
一九三六		11	12/7		寄宿舎維持経営並びに奨学金基金充足のため基金募集
一九三七		12	7/7		日中戦争勃発
一九四一		16	12/8		太平洋戦争開戦

西暦	年号	年	月/日	有為会事項	興譲館寄宿舎	奨学金制度	世態
一九四三	和	18	12/30	「米沢有為会雑誌」戦争により休刊			
一九四五		20	4/13	東京興譲館寄宿舎空襲により本部関係書類は共に焼失	東京興譲館寄宿舎空襲により焼失 一時寄寓、篠田義市氏宅（当会評議員） 20年5月～21年10月　遠藤達氏宅（当会相談役：世田谷区上馬五丁目） 21年10月～22年10月　永井省三氏宅（当会評議員：世田谷区上馬四丁目）	奨学金業務中断　奨学生数 明治44年～昭和18年　百二十名	3月～東京大空襲 8/6広島原爆投下 8/9長崎原爆投下 8/15終戦
			7/10		仙台興譲館寄宿舎空襲により焼失 20年7月～東北大学医学部学生寮昭和舎（仙台市北八番丁）に一時寄寓、終戦後～21年3月仮寄宿舎元軍の宿舎、東北ゴムを借家（焼失した寄宿舎の西側）		
一九四七	昭	22	4/1				新学制六・三制発足
			5/3				日本国憲法施行
一九四八		23	4月		仙台興譲館寄宿舎再建		
一九四九		24	7/1	「米沢有為会雑誌」復刊、後再び休刊			
			10/2		東京興譲館寄宿舎再建		
一九五〇		25	11/3	戦後第一回園遊会を新宿御苑にて開催			

一九五二			一九五三	一九五四	一九五五	一九五九	一九六〇	一九六一
昭和								
27			28	29	30	34	35	36
3月～	7／1	12月	4月		8／31	8／16	6／19	5／20	7／22
第一回米沢地方公私立高等学校の優等卒業生を表彰	「米沢有為会雑誌」を「社団法人米沢有為会々誌」と改めて復刊、戦後第一号	会員名簿発行				創立七十周年記念式典挙行（米沢） 第一回文化講演会開催 創立七十周年記念事業募金 創立七十周年記念祝賀会開催（東京支部他）			
				東京興譲館寄宿舎敷地の大部分を占める上杉家の所有地を同家から本会に寄贈	山形興譲館寄宿舎開設（山形市薬師町）				
			奨学金業務再開 28年大滝竜五郎基金、30年近信三郎基金、31年小野茂平基金開設					創立七十周年記念事業募金の一部を固有の奨学金とし従来の大滝・近・小野の三奨学金を併合 明治44年制定の「社団法人米沢有為会貸費規則」を廃止し新たに「米沢有為会奨学金貸与規則」を制定	
							安保闘争		

西暦	年号	年	月/日	有為会事項	興譲館寄宿舎	奨学金制度	世態
一九六二	昭和	37	7月	米沢織物品評会に「有為会賞」を設定			
			7/31		山形興譲館寄宿舎閉寮		
一九六四		39	10/10				東京オリンピック開催
			11/3				我妻榮氏文化勲章受章
一九六六		41	11/28		東京興譲館寄宿舎新築移転（調布市入間町一丁目）		
一九六九		44	8/24	創立八十周年記念式典挙行（米沢）			
			10/26	創立八十周年記念祝賀会開催（東京支部他）			7/20アポロ11号月面着陸
			3月				大阪万国博覧会開催
一九七〇		45		45年～地元教職員の国内外研修派遣助成を実施			
一九七九		54	6/24	創立九十周年記念式典挙行（米沢） 創立九十周年記念事業募金			
一九八〇		55	2/3	創立九十周年記念祝賀会開催（東京支部他）			
一九八七		62	7月		仙台興譲館寄宿舎新築移転（仙台市青葉区角五郎二丁目）		
一九八八		63	1月		札幌興譲館寄宿舎閉寮		
一九八九	平成	元	6/18	創立百周年記念式典挙行（米沢） 創立百周年記念事業募金	㈳米沢有為会興譲館寄宿舎OB会を結成 OB会名簿発行		米沢市制百周年

一九八九	元	10／25	創立百周年記念祝賀会を「米沢市制施行百周年を祝う同郷会」と合同開催（東京）		
一九九〇	2	8月		「札幌興譲館の六十年」発刊	
一九九二	4	6／19	「我妻榮記念館」開館（米沢市中央三丁目）		7／1山形新幹線開通
一九九七	9	4／14	従来の「米沢有為会賞」表彰を規則制定化 1．教育・文化功労者表彰 2．産業・福祉功労者表彰 3．高等学校卒業生表彰		
一九九九	11	6／27	創立百十周年記念式典挙行（米沢） 創立百十周年記念事業募金	奨学生OB・OG名簿作成 奨学生OB・OGに対しアンケート調査	
		10／21	創立百十周年記念祝賀会開催（東京）		
二〇〇〇	12	12月			アメリカ同時多発テロ
二〇〇一	13	9／11			
二〇〇三	15	4／1	山形支部廃止、米沢支部に併合		
二〇〇九	21	2／28		㈳米沢有為会奨学生OB・OG会設立	米沢市制百二十周年
		6／28	創立百二十周年記念式典挙行（米沢）		
		11／15	創立百二十周年記念祝賀会開催（東京）		

西暦	年号	年	月/日	有為会事項	興譲館寄宿舎	奨学金制度	世態
二〇〇九	平成	21		創立百二十周年記念協賛金募集 創立百二十周年記念我妻榮記念館補修工事施工 会誌「創立百二十周年記念特集号」を発行 社団法人化百周年	創立百二十周年記念東京興譲館寄宿舎 大改修工事施工(開設百周年) 創立百二十周年記念仙台興譲館寄宿舎 諸補修工事施工(開設九十五周年)	創立百二十周年記念奨学金貸費制度の拡充を図る 奨学金貸費制度開始九十八周年	

米沢教育会

明治十八年六月十六日、上杉家第十四代茂憲公主唱のもと、相談人池田成章他五名により「米沢教育会会則」が決定し、上杉家の出資をはじめ、米沢地方関係有志の拠金を教育資金の基に、育英事業団体としての「米沢教育会」が発足した。

昭和十五、十六年度において、財団法人米沢教育会及び教育財団興譲館と、米沢有為会の育英事業の統合が図られ、前二法人が解散して両財団の資産が米沢有為会に寄贈され、昭和十六年度以降、これまでの育英事業を米沢有為会が継承することになった。なお、現在の社団法人米沢教育会は、昭和三十九年に新設されている。

米沢有為会は、会員の会費並びに寄付金等で運営	各興譲館寄宿舎は、上杉家を始め置賜地方関係有志の拠金、会員の寄付金等の他、山形県、米沢市、各市町村の補助金で維持運営	奨学金貸与基金は、個人二七名、法人三社の拠金、記念事業基金等で運用	
有為会会員総数 平成21年4月現在 個人会員　一、二三三名 賛助会員　二九名	東京・仙台・札幌・山形興譲館寄宿舎生OB総数 明治42年～平成18年迄 一、九六九名	奨学金制度奨学生OB・OG総数 明治44年～平成20年迄 三六〇名	

参考資料：「米沢有為会々誌」、「札幌興譲館の六十年」、「東京・仙台・米沢の各支部だより」

社団法人 米沢有為会定款・規則集 目次

一、米沢有為会定款
一、米沢有為会定款細則
一、米沢有為会奨学金貸与規則
一、米沢有為会寄宿舎規則
一、米沢有為会表彰規則
一、我妻榮記念館の設置及び管理運営規則
一、米沢有為会東京支部規則
一、米沢有為会東京支部業務分掌細則
一、米沢有為会米沢支部規則
一、米沢有為会米沢支部教育・産業功績者表彰規則
一、米沢有為会執行部門の業務分掌規程

社団法人 米沢有為会定款

昭和二十八年八月	改正決議
同　年十二月	認可
昭和二十八年八月十六日	一部改正決議
同　年十月五日	認可
昭和二十九年八月二十二日	一部改正決議
同　年十二月二十三日	認可
昭和三十年八月十四日	改正決議
同　年九月二十六日	認可
昭和三十一年八月十九日	一部改正決議
同　年十一月一日	認可
昭和三十四年八月十六日	一部改正決議
同　年十月二十七日	認可
昭和四十一年八月二十一日	一部改正決議
同　年十二月二十日	認可
昭和四十六年八月二十二日	一部改正決議
昭和四十七年二月四日	認可
昭和五十一年六月二十日	一部改正決議
同　年九月二十八日	認可
昭和五十八年六月二十六日	一部改正決議
同　年九月二十六日	認可
平成十六年六月二十六日	一部改正決議
平成十八年六月十七日	一部改正決議
平成十九年六月十六日	一部改正決議
平成二十年一月九日	認可

第一章　総　則

第一条　この法人は、社団法人米沢有為会という。

第二条　この法人は、事務所を東京都調布市入間町一丁目三十六番地に置く。

2　この法人は、必要に応じ地方に支部を置くことができる。

第二章　目的及び事業

第三条　この法人は、米沢地方人（米沢市、長井市、南陽市及び置賜各郡の在住者並びに出身者）の育英事業を行い、知徳を研磨し、身体を鍛練し、親睦を厚くし、その他米沢地方の福利を図るをもって目的とする。但し政治上に関係しないものとする。

第四条　この法人は前条の目的を達成するため次の事業を行う。

① 学資の貸給与
② 学生寄宿舎の設置並びに管理
③ 教育奨励に関する事業
④ 産業振興に関する事業
⑤ 会報の発行並びに学術講演会の開催
⑥ その他目的達成に必要な事業

第三章　会　員

第五条　この法人の会員は、米沢地方人であることを要し、会員になろうとする者は、別に定める規定により書面をもって入会申込をする。

2　前項以外の者でも米沢地方に縁故のある者は、理事会の決議により会員となることができる。

第六条　この法人の会員を分けて、次の四種とする。

① 名誉会員
② 通常会員
③ 特別会員
④ 賛助会員

第七条　名誉会員は、この法人に対し特に功労のあった者を理事会において推薦する。

第八条　通常会員および特別会員は、本法人の趣旨に賛同し、理事会の定めるところにより通常会費または特別会費を納入する者とする。ただし学生は通常会費の半額とする。

第九条　賛助会員は、本法人の趣旨に賛同する置賜地方に縁故のある法人で理事会の定める賛助会費を納める者とする。

第十条　会費の年額は、理事会において別に定めるものとする。

2　会費は前納とし、既納の会費または醵出金は、その理由の如何を問わずこれを返還しないものとする。

第十一条　この法人の会員で次の各号の一に該当する者は、これを退会者とみなす。

①　本人から書面で申し出があったとき

②　除名されたとき

③　2年以上会費の納入を怠ったとき

第十二条　この法人の会員に会員としての義務に違反し、又は体面を汚す行為があったときは、総会の三分の二以上の議決を経てこれを除名することができる。ただし当該会員にあらかじめ通知するとともに当該会員に弁明の機会を与えなければならない。

第四章　役員等

第十三条　この法人に次の役員を置く。

①　理事　二十名以上三十名以内（内会長一名、副会長二名）

②　監事　三名以上五名以内

第十四条　会長及び副会長は、理事の互選で定める。

2　会長は、この法人を代表し、会務を総理し、会議の議長となる。

3　副会長は、会長を補佐し、会務を処理し、会長が事故あるときは、あらかじめ会長が指名した順序により、その職務を代行する。

第十五条　理事及び監事は、総会で選任する。

2　理事は監事を兼ねることができない。

第十六条　理事は、理事会を組織し、事業の執行に当る。

第十七条　監事は、この法人の業務及び財産に関し、次の各号に規定する職務を行う。

①　法人の財産の状況を監査すること。

②　理事の業務執行の状況を監査すること。

③　財産の状況又は業務の執行について不整の事実を発見したときは、これを総会又は文部科学大臣に報告すること。

④　前号の報告をするため必要があるときは、総会を招集すること。

第十八条　この法人の役員にその各職務に違反し、又は体面を汚す行為のあったときは総会の議決をもって解任することができる。

2　この法人の役員を解任しようとするときは、その役員に

総会で弁明の機会を与えなければならない。

第十九条　役員の任期は二年とする。ただし再任を妨げない。

2　補欠又は増員による役員の任期は前任者又は現任者の残余期間とする。

3　役員は任期満了後でも後任者が就任するまではその職務を行う。

第二十条　この法人に名誉会長を置くことができる。

2　名誉会長は、理事会の議決を経て、総会において推戴する。

第二十一条　この法人に五十名以上八十名以内の評議員を置く。

2　評議員は、理事会の議決で選任する。

3　評議員は、評議員会を組織し、会長の諮問事項を審議する。

4　第十八条及び第十九条の規定は、評議員に準用する。

第二十二条　この法人に相談役を置くことができる。

2　相談役は、会員のうちから理事会の議決を経て総会に於て推挙する。

3　相談役は、この法人の重要事項について会長の諮問に応ずる。

第二十三条　この法人に参事を置くことができる。

2　参事は、会員のうちから会長が委嘱する。

3　参事は、理事を補佐し会務を処理する。

第二十四条　この法人に事務局及び職員を置くことができる。

第五章　会　議

第二十五条　会議は、総会、理事会及び評議員会の三種とする。

第二十六条　総会は、定時総会及び臨時総会の二種とする。

2　総会は通常会員及び特別会員をもって構成する。

第二十七条　定時総会は、毎年一回六月までに開催し、臨時総会、理事会及び評議員会は随時必要なときに開催する。

第二十八条　会議は、会長が招集する。

第二十九条　会議を構成する会員又は役員の五分の一以上もしくは監事から連名をもって会議の目的事項を示して請求のあったときは、会長はその会議を招集しなければならない。

第三十条　総会は、会員の二分の一以上出席しなければ開くことができない。

2　総会の議事は、出席会員の過半数の同意をもって決する。ただし書面をもって他の会員に委任した者は出席とみなす。

3　出席者が前項の定足数に達しない場合は、出席会員の過半数の同意をもって仮議決することができる。ただしこの場合は次の総会において追認を得るものとする。

4　前2項の場合において可否同数の時は、議長の決するところによる。

第三十一条　総会は、この定款に定めのあるものの外次の事項を審議する。

①　収支予算及び決算
②　事業計画
③　財産の処分
④　その他会長が附議した事項

2　総会の議事概要及び議決した事項は、全会員に通知する。

第三十二条　理事会は、理事の過半数が出席しなければ開くことができない。但し書面をもって他の理事に委任したときはこれを出席とみなす。

2　理事会の決議は、出席者の過半数をもってこれを決する。

3　可否同数であるときは議長が決する。

第三十三条　理事会は、この定款に定めのあるものの外次の事項を審議する。

①　事業計画
②　諸規定の制定並びに改廃
③　定款の変更並びに解散
④　その他会長が附議した事項

2　理事は、別に定める分掌規定により事務を分担する。

第三十四条　第三十二条の規定は、評議員会に準用する。

第三十五条　会長は、簡単な事項又は急施を要する事項については書面を送付して賛否を求め会議にかえることができる。但しこの場合、次の会議に報告しなければならない

第三十六条　総て会議には議事録を作成し、議長及び当該会議において選任された出席者代表二名が署名押印の上保存する。

第六章　資産及び会計

第三十七条　この法人の資産は、会員の会費寄附金品及び物件並びにこれ等から生ずる収益をもってなる。

第三十八条　この法人の資産は、基本財産と運用財産の二種とする。

2　基本財産の管理に関する規則は、理事会においてこれを

定める。

3　運用財産は、基本財産以外の財産とする。

第三十九条　この法人に基本財産として教育基金を置く。

2　教育基金は、次のものからなる。

①　元米沢尋常中学興譲館財団及び株式会社米沢義社より教育財団興譲館に寄附されたものでこの法人に帰属した財産

②　元上杉伯爵家及び元米沢藩人その他有志の醵金にして財団法人米沢教育会に属し更にこの法人に帰属した財産

③　教育基金として繰入れられた財産

④　椿宮太郎氏から奨学資金として寄附された金壱万円

⑤　浜田五左衛門氏から奨学資金として寄附された金壱万円

⑥　高野源五郎氏から奨学資金として寄附された金壱万円

⑦　有限会社猪股絹織工場代表取締役猪股政次郎氏から奨学資金として寄附された金壱万円

第四十条　基本財産は、譲渡し、交換し、担保に供し、又は運用財産に繰り入れてはならない。ただし、この法人の事業遂行上やむを得ない理由があるときは、理事会において理事現在数の三分の二以上の議決を経、かつ、文部科学大臣の承認を受けてその一部に限りこれらの処分をすることができる。

第四十一条　基本財産から生ずる収入は、第四条第1号から第6号までの事業に支出するか又はその財産に積立てる以外に使用することができない。

第四十二条　この法人が借入れをしようとするときは、その事業年度の収入をもって償還する短期借入金を除き、理事会において理事現在数の三分の二以上の議決を経、かつ、文部科学大臣の承認を受けなければならない。

第四十三条　第四十条ただし書き及び前条の規定に該当する場合並びに収支予算で定めるものを除くほか、この法人が新たな義務の負担又は権利の放棄のうち重要なものを行おうとするときは、理事会において理事現在数の三分の二以上の議決を経なければならない。

第四十四条　この法人の事業年度は毎年四月一日に始まり翌年三月に終わる。

第七章　書類及び帳簿の備付等

第四十五条　この法人の事務所に、次の書類及び帳簿を備えなければならない。ただし、他の法令により、これらに代わる書類及び帳簿を備えたときはこの限りでない。

①　定款、奨学金貸与規程及び寄宿舎規則

② 役員、評議員及びその他の職員等の名簿及び履歴書
③ 財産目録
④ 資産台帳及び負債台帳
⑤ 理事会及び評議員会の議事に関する書類
⑥ 許認可に関する書類
⑦ 事業報告書、収支計算書、正味財産増減計算書及び貸借対照表
⑧ 事業計画書及び収支予算書
⑨ 収入支出に関する帳簿及び証拠書類
⑩ 官公署往復書類
⑪ 登記に関する書類
⑫ その他必要な書類及び帳簿

2 前項の書類及び帳簿は、次の区分により保存しなければならない。
① 第1号から第8号のものは永久
② 第9号のものは10年以上
③ 第10号から第12号までのものは一年以上

3 第1項第1号、第3号、第7号及び第8号に掲げる書類及び役員名簿については、これを一般の閲覧に供するものとする。

第八章　定款の変更並びに解散

第四十六条　この定款の変更は、理事会及び総会において、理事現在数及び会員現在数の各々の四分の三以上の議決を経、かつ、文部科学大臣の認可を受けなければならない。

第四十七条　この法人の解散は、理事会及び総会において、理事現在数及び会員現在数の各々の四分の三以上の議決を経、かつ、文部科学大臣の許可を受けなければならない。

第四十八条　この法人の解散に伴う残余財産は、理事会及び総会において、理事現在数及び会員現在数の各々の四分の三以上の議決を経、かつ、文部科学大臣の許可を受けて、国、地方公共団体又はこの法人の目的に類似の目的を有する公益法人に帰属させるものとする。

附　則

第四十九条　この定款施行についての細則は理事会の決議を経て別に之を定める。

第五十条　この法人設立当初の理事及び監事は次の通りである。

理事　岡田文次
同　小林源蔵
同　下平忠良
同　伊東忠太
同　吉田熊次

第五十一条　改正後の定款の規定は文部科学大臣の認可の日（平成二十年一月九日）から施行する。

社団法人 米沢有為会定款細則

（昭和四十八年二月八日改定）
（平成十五年六月二十一日一部改定）
（平成十八年六月十七日一部改定）

第一条　本会は次の七部を置く
部には部長を置き理事のうちから会長が委嘱する
一、総務部
二、教育部
三、産業部
四、文化広報部
五、組織部
六、婦人部
七、企画部

第二条　参事は二十名以内としてこの任期は一カ年とする参事は前条の各部に分属しその事務を処理する

第三条　相談役は評議員会に出席して意見を開陳することができる

第四条　削除

第五条　本会に教育委員若干名を置く
教育委員は理事会に於て会員中よりこれを選任しその任

期は二カ年とする

教育委員は育英上重要なる事項を審議する

第六条　本会に産業振興委員若干名を置く

前条第二項の規定は産業振興委員に準用する

産業振興委員は産業振興上重要なる事項を審議する

第七条　産業振興の費用に充てるため産業振興資金積立金を設ける

産業振興の目的をもってなされた寄附金は前項の積立金に繰入れなければならない

前項の外第一項の積立金への繰入れに付いては理事会の議決による

第八条　会員の年会費は毎年七月末日までに納入するものとする

二、会員それぞれの年会費は次のとおりとする

通常会員は三千円

特別会員は七千円

賛助会員は一万円以上

第九条　新たに会員になろうとする者は本会員の紹介により書面を以て入会の申込をしなければならない

第十条　地方支部役員の名称選定方法並びに任期は各支部の適宜としてこの規則は会長の承認を得なければならない

第十一条　総会はその会日二週間前に会報その他の方法をもって会議事項日時及び場所を会員に通知する

米沢有為会奨学金貸与規則

（平成元年四月十七日一部改正）
（平成十一年四月二十日一部改正）

第一条　本会定款第四条に規定する学資の貸与（以下「貸費」という）は、この規則の定めるところによる

第二条　貸費は、左の各号に該当するものに対して、これを行う

一、米沢地方人（米沢市、長井市、南陽市及び置賜各郡の在住者並びに出身者）の子弟であって、大学又は大学院に在学するもの

二、身体強健、学術優秀、品行方正であるもの

三、経済的理由により、修学困難であるもの

第三条　貸費は月額四万円とし、大学又は大学院卒業の月まで、これを行う

第四条　本会は、毎年四月、米沢地方所在高等学校長

より、貸費希望者の推薦を求め、その推薦された者のなかから、教育委員会の選考を経て貸費生を決定する

米沢地方以外に所在する高等学校長より推薦された場合又は大学院進学者で、貸費を希望する場合は前項に準じて取扱う

第五条　前条の推薦者には、左の書類を添付しなければならない

一、本人及び保証人連署の貸費願書

二、本人及び保証人連署の家計調書

三、学習成績及び資質素行に関する推薦校の調書

四、健康診断書

五、写　　真

六、その他本会の指定する書類

第六条　貸費の決定通知を受けた者は、速やかに連帯保証人を定め、本会所定の誓約書を提出しなければならない

第七条　貸費生は、左の場合は、速やかにこれを本会に届出なければならない

一、病気その他の事情により、廃学しようとするとき

二、病気その他の事情により、休学しようとするとき

三、都合により、修学学校又は修学学部を変更しようとするとき

四、進級しなかったとき

五、大学院に入り又は他学部に学士入学しようとするとき

六、卒業したとき

七、転居したとき

第八条　前条第一号の場合は、貸費を停止する

前条第二号乃至第四条の場合は、本会において、その事情を調査し、貸費を中止、又は教育委員会の議を経て、貸費を停止することがある

第二項の規定により、貸費を停止された者は、本会の指定に従って、既に貸与を受けた金額を返還しなければならない

第九条　左の各号の一に該当する場合においては、本会は、教育委員会の議を経て、貸費を停止し、既に貸与した金額は、これを一時に返還させる

一、理由の如何を問わず退学を命ぜられたとき

二、性行不良なりと認めたとき

三、勉強を怠り、成業の見込ないと認めたとき

四、故意に第七条の届出を怠ったとき

第十条　貸費を受けた者は、大学又は大学院卒業の翌月より、月額一万五千円を、本会に返還しなければなら

ない

貸費を受けた者が、大学卒業後、更に大学院・他学部に学士入学又は大学院卒業後他学部に入学し、或は未就職又は病気のため、前項の返還が、著しく困難な場合は、この願出により、返還の期限を猶予することがある

第十一条　貸費の返還を怠った場合は、教育委員会の議を経て一時に全額を返還させることがある

第十二条　貸費を受けた者は、その返還義務を終るまで、就職、転職、転居など重要な消息は、その都度速やかに、本会に届出なければならない

第十三条　保証人が転居し又は保証能力に著しい変化を生じたときは、本人と連署して、速やかに届け出なければならない

保証人が死亡したとき又は本会より保証人変更の要求のあったときは、速やかに新保証人を定め、連署して届出なければならない

前項の届出を怠った場合は、その届出があるまで、貸費を中止することがある

第十四条　貸費を受けた者が死亡した場合又は心身の障害により、返還が著しく困難となった場合は、本人又は保証人の願出により、教育委員会の議を経て、返還義務の全部又は一部を免除することがある

附　則

一、平成十二年三月現在まで貸費を受けている者に対する貸費は第三条の規定に拘わらず月額三万円とする。又、第十条の規定に拘わらず返還は月額一万二千円とする。

米沢有為会寄宿舎規則

（昭和四十二年四月二十八日改正）

第一条　本会定款第四条によって設置した学生寄宿舎は、米沢有為会（所在地名）興譲館という

第二条　寄宿舎に次の役員をおく

一、館　長　一　名

二、委　員　若干名

但し、場合によっては、名誉館長、副館長をおくことができる

第三条　館長及び副館長は各支部評議員会において選出し、本会会長がこれを委嘱する

2　名誉館長は、各支部評議員会の議決を経て、本会会長

がこれを推挙する

3　委員は、舎生から互選され館長の承認を得て定められる

第四条　館長は、舎生の監督及び指導にあたり、また寄宿舎に関する一切の事務を管理する

2　副館長は館長を補佐し、場合によってはその職務を代行する

3　委員は各地興譲館規則の定める事務を行う

第五条　寄宿舎に入居を願い出るものは当該興譲館長宛

次の書類を提出しなければならない

一、願　書

二、学業に関する証明書

三、身体に関する証明書

四、履　歴　書

第六条　入舎の許否は館長が決定する

第七条　舎生は入舎の際二名の連帯保証人連署の上書面をもって舎生としての宣誓をしなければならない

2　前項にかかげる保証人の中の一名は保護者、他の一名は原則として寄宿舎所在地在住の者で、いずれも本会会員でなければならない

第八条　退舎の場合は当該館長宛退舎届を提出し承認を得なければならない

第九条　舎生であって、本会の体面を汚し、又学生の本分から逸脱する行動あると認められるとき、又は規則に違反したとき、又は、舎生費及びその他の経費の滞納二カ月に及ぶときは、館長はこれに退舎を命ずることができる

第十条　各地興譲館に関する規則は、各支部評議員会において決議し本会会長の承認を受けてこれを施行するものとする

米沢有為会表彰規則

（平成九年四月十四日制定）

（目　的）

第一条　この規則は、社団法人米沢有為会が定款第四条に定める事業を遂行するために「表彰」を行う場合に必要な事項を定める。

（表彰の種類）

第二条　社団法人米沢有為会が行う表彰の種類は次の通りとする。

一　教育・文化功労者表彰
二　産業・福祉功労者表彰
三　高等学校卒業生表彰

（表彰の対象者）

第三条　表彰の対象者は次の通りとする。

一　教育功労者表彰
米沢地方（米沢市、長井市、南陽市及び置賜各郡をいう、以下同じ）の教育振興に特段の功労があった個人又は団体

二　産業功労者表彰
米沢地方の産業振興に特段の功労があった個人又は団体

三　高等学校卒業生表彰
米沢地方の高等学校の当年度卒業生のうち、学業成績・課外活動・自治会活動・品行等を総合的に判断、他の模範となる者

（表彰の時期）

第四条　教育功労者表彰・産業功労者表彰は当会の定時総会の折、高等学校卒業生表彰は各高等学校の卒業式又はそれに準ずる会合の折にこれを行う。

（表彰の名義）

第五条　表彰の名義は名誉会長及び会長名とする。

（表彰の決定）

第六条　教育功労者表彰・産業功労者表彰については米沢支部長の推薦、高等学校卒業生表彰については学校長の推薦を受けて理事会がこれを決定する。

（表彰の方法）

第七条　表彰は、表彰状及び記念品を贈呈してこれを行う。

附　則

この規則は平成九年四月十四日より施行する。

我妻榮記念館の設置及び管理運営規則

第一条　社団法人米沢有為会は、文化勲章受章者米沢市名誉市民である民法学者我妻榮の生家を記念館として保存し、資料等を展示し広く一般に公開するため、我妻榮記念館を設置する。

第二条　名称及び所在地

(1)　名称　我妻榮記念館

(2)　所在地　山形県米沢市中央三丁目四番三十八号

第三条　我妻榮記念館（以下「記念館」という）は第一条の設置目的を達成するため次の事業を行う。

(1) 記念館の整備保存に関すること。

(2) 資料等の展示公開に関すること。

(3) 資料等の整理保存に関すること。

(4) 学校、研究所、図書館、司法機関等と連携協力すること。

(5) 広報その他目的達成に必要なこと。

第四条　記念館に名誉館長、館長その他の職員を置く。

第五条　記念館に運営委員会を置く。

2　委員の数は五名～八名とする。

3　委員の任期は二年とする。ただし再任を妨げない。

4　補欠の委員の任期は前任者の残任期間とする。

第六条　記念館の運営経費は補助金、助成金、その他の収入をもって充てる。

2　会計年度は四月一日から翌年三月三十一日までとする。

第七条　この規則の施行に必要な事項は館長が別に定める。

附則

1　我妻榮記念館の開館は平成四年六月十九日とする。

2　この規則は平成十八年五月十二日から施行する。

米沢有為会東京支部規則

（昭和五十六年五月八日改定）
（平成十六年六月十三日一部改定）
（平成十八年五月二十七日大幅改定）
（平成二十年六月三日一部改定）

第一章　総則

第一条　本会は、社団法人米沢有為会東京支部という

第二条　本会は、社団法人米沢有為会の会員で、首都圏に在住する者をもって組織する

第三条　本会の事務所は東京都調布市入間町一丁目三十六番地におく

第二章　目的及び事業

第四条　本会は会員の親睦と交流を図ることを主体に、米沢有為会の目的に適う支部活動を行うことを目的とする

第五条　本会は前条の目的を達成するため次の事業及び活動を行う

一、新年会

二、本会所属学生の卒業予餞祝賀会

三、園遊会
四、会員の親睦と交流を厚くするための諸催事
五、会員拡充のための活動
六、東京興譲館の運営
七、その他、本会の目的に適い、理事会の議を得て支部長が必要と認めた事業及び活動

第六条　前条の事業には会員のほか、会員の家族及び会員関係者が参加できるものとする

第三章　役　員

第七条　本会に次の役員を置く

一、支部長　一名
一、副支部長　二名
一、理　事　二十名以上三十名以内
（内支部長一名、副支部長二名）
一、監　事　二名
一、評議員　三十名以上五十名以内

第八条　支部長及び副支部長は理事の互選で定める

2　支部長は本会を代表し、会務を総理し、会議の議長となる

3　副支部長は支部長を補佐し、支部長に事故あるときはその役務を代行する

第九条　理事及び監事は会員のうちから総会で選任する、理事は監事を兼ねることはできない

2　理事は理事会を組織し、本会の業務の執行にあたる

3　理事は別に定める業務分掌細則により業務を分担する

4　監事は本会の会計の状況及び理事の業務執行の状況を監査する

第十条　評議員は理事会の議決で会員のうちから選任する、但し理事、監事を兼ねることはできない

2　評議員は評議員会を組織し、本会の重要事項に関し、支部長の諮問を審議する

3　評議員会には理事、監事が参加することができる

第十一条　役員でその役務に違反し、または本会の体面を汚す行為のあったときは、総会の議決をもって退任させることができる、但し弁明の機会を与える

第十二条　役員の任期は二年とし、評議員は毎年その半数を改選する、但し再任をさまたげない

2　補欠による役員の任期は前任者の残余期間とする

第十三条　本会に相談役若干名を置くことができる

2　相談役は会員のうちから理事会の議決を経て総会において推挙する

3　相談役は本会の重要事項について支部長の諮問に応ずる

第十四条　本会に参事若干名を置く

2　参事は会員のうちから支部長が委嘱する

3　参事は理事を補佐し業務を処理する

4　参事の業務分担は別に定める業務分掌細則による

第四章　会　議

第十五条　会議は総会及び理事会、評議員会とする

第十六条　総会は定期総会及び臨時総会の二種とする

第十七条　定期総会は毎年一回五月までに開催し、臨時総会及び理事会、評議員会は随時必要なときに開催する

第十八条　会議は支部長が招集する

第十九条　会議の議事は出席者の過半数以上の同意をもって決する、但し書面をもって会員に委任したときはこれを出席とみなす

2　可否同数の場合は議長が決する

第二十条　総会はこの規則に定めのあるもののほか次の事項を審議する

一、事業年度の予算及び決算

一、事業及び活動計画

一、その他支部長が附議した事項

第二十一条　理事会はこの規則に定めのあるもののほか次の事項を審議する

一、事業年度の収支予算及び決算

一、事業及び活動計画

一、諸規定の制定及び改廃

一、規則の改廃

一、その他支部長が附議した事項

第二十二条　支部長は簡易な事項または急施を要する事項については書面を送付して賛否を求め会議にかえることができる、但し次の会議に追認を得るものとする

第五章　会　計

第二十三条　本会の事業会計年度は四月一日に始まり翌年三月三十一日に終わる

第二十四条　事業年度の収支予算及び決算は理事会で決議のあと、評議員会の審議を経て、総会に諮り承認を得るものとする

第二十五条　本会に特別協力会員制度を設けることができる

2　特別協力会員は会員のうちからその制度の趣旨に賛同

し特に申し出のあった者とする

第二十六条　特別協力会員は本会の事業及び活動に協力し、その諸経費に充当するため理事会の議を経て支部長が定める特別協力会費を醵出するものとする

第六章　補則

第二十七条　この規則の改廃の発議は、会員五名以上または理事によるものとする

第二十八条　この規則施行についての細則は支部長が別に定める

米沢有為会東京支部業務分掌細則

（平成十八年五月二十七日制定）
（平成二十年六月三日改定）

第一条　本会活動の活性化を図るため、本会の執行部門に業務担当制を設ける

第二条　東京支部規則の第九条3項による理事の業務分担及び第十四条4項による参事の業務分担を次のように定める

但し、業務担当は増減することができる

一、総務担当
二、会計担当
三、会員拡充担当
四、行事担当
五、広報、企画担当
六、東京興譲館担当

第三条　各業務担当の構成は次の通りとする

1　各業務担当に主任理事を置き、数名の理事、参事で編成する
2　理事は何れかの業務を担当する
3　理事は幾つかの業務を兼務することができる
4　参事は幾つかの業務を兼務することができる

第四条　各業務担当の業務分掌は次の通りとする

一、総務担当
①　当会の運営に関わる総務的業務
　なお、理事会、評議員会、総会に関わる業務を含む
②　支部会員の会員原簿及び会員名簿の管理業務
③　当会の庶務的業務と事務
二、会計担当
①　会計全般業務

② 会費の収集事務

三、会員拡充担当

① 新規会員の拡充を推進する業務

イ 郷土学校同窓会の首都圏支部組織との連携活動

ロ 県人会の首都圏支部組織との連携活動

ハ その他

② 行事、催事担当との連携協同活動

四、行事担当

本会規則にある新年会、学生予餞祝賀会、園遊会等、恒例的行事の企画及び実行業務

五、広報、企画担当

本会規則にある会員の親睦と交流を厚くするための諸事業の企画及び実行業務

① 「東京支部だより」の作成・刊行

② 会員による趣味同好会の創設と推進

③ 各種イベント等の企画、実行の推進

六、東京興譲館担当

① 東京興譲館担当の主任理事は当館の館長となる

また副館長は当担当の理事または参事から選任される

② なお、館長及び副館長は米沢有為会寄宿舎規則に則り特に有為会会長より委嘱されるものとする

③ 担当業務については、米沢有為会寄宿舎規則に則り当館の管理、運営にあたる

米沢有為会米沢支部規則

（昭和二十六年八月十九日制定）
（昭和二十七年八月十七日一部改正）
（昭和二十八年八月十六日一部改正）
（昭和三十年八月十四日一部改正）
（昭和三十二年八月十八日一部改正）
（昭和三十四年八月十六日一部改正）
（平成十八年六月三日全部改正）
（平成十九年六月二日一部改正）

第一条　本会は、社団法人米沢有為会米沢支部という。

第二条　本会は、社団法人米沢有為会の会員で、米沢地方に在住するものをもって組織する。

第三条　本会の事務所は、米沢市金池五丁目二番二十五号に置く。

第四条　本会に次の役員を置く。

(1) 支部長　一名

(2) 副支部長　三名
(3) 理事　二十名以上三十五名以内（常務理事一名を含む）
(4) 監事　三名

第五条　支部長、副支部長は理事が互選する。
2　支部長は本会を代表し、会務を統理し会議の議長となる。
3　副支部長は支部長を補佐し、支部長に事故あるときは、その職務を代行する。

第六条　理事及び監事は会員の中から総会で選任する。
2　理事は、理事会を組織し業務の執行に当たる。

第七条　評議員は、理事会の議決で会員の中から選任する。
2　評議員は、評議員会を組織し会長の諮問事項を審議する。
3　評議員は、二十名以上四十名以内とする。

第八条　役員の任期は二年とする。ただし再任を妨げない。
2　補欠による役員の任期は、前任者の在任期間とする。
3　役員は、任期満了後でも後任者が就任するまではその職務を行う。

第九条　本会に顧問、相談役を置くことができる。

第十条　本会に参事を置く。
2　参事は支部長が委嘱する。
3　参事は、支部長の指揮監督を受け庶務会計を主管する。
4　参事は、理事を補佐し会務を処理する。

第十一条　本会に次の各部を置く。
(1) 総務部（理事会、総会、会費徴収担当）
(2) 組織部（会員拡大、会員交流担当）
(3) 教育部（教育功労及び小、中、高校生の表彰担当）
(4) 産業部（産業功労表彰担当）
(5) 文化広報部（支部だより発行担当及び会誌、名簿発行協力）

第十二条　会議は総会及び理事会とする。

第十三条　本会の経費は、会費、補助金、その他の収入をもって充てる。
2　本会の会計年度は、四月一日に始まり翌年三月三十一日に終わる。

第十四条　この規則施行について必要な事項は、支部長が別に定める。

米沢有為会米沢支部
教育・産業功績者表彰規則

（昭和四十六年八月二十二日制定）

（目　的）

第一条　この規則は社団法人米沢有為会米沢支部（以下「支部」という）において教育並びに体育振興に尽瘁し、その事績が極めて顕著な者、又は、産業人として地方の発展に寄与した者を表彰するについて必要な事項を定めることを目的とする

（被表彰者）

第二条　功績者として表彰される者は、次の各号の一に該当するものとする

教育功労者

(1)　高等学校においては全国各種大会又は競技会において極めて優秀な成績をおさめた生徒並びに指導者

(2)　中学校においては、全国及び東北の各種大会又は競技会において極めて優秀な成績をおさめた生徒並びに指導者

(3)　小学校においては、県大会以上の各種大会において極めて優秀な成績をおさめた児童並びに指導者

(4)　その他の教育振興に特段の事績を示し理事会で認めたもの

産業功績者

(1)　地域産業の振興に尽瘁し、その功労顕著な者、又は発明研究等により産業の発展に寄与したもの

(2)　その他産業の振興に特段の事績を示し、理事会で認めたもの

（表彰者の内申）

第三条　表彰者については、その都度関係首長及び公所長並びに学校長または団体長より別に定めるところにより内申するものとする

（表彰者の決定）

第四条　表彰者の決定は支部理事会において行うものとする

（表彰の時期）

第五条　表彰は支部総会の折にこれを行う

（表彰の方法）

第六条　表彰は表彰状及び記念品を贈呈してこれを行う

（記　録）

第七条　表彰の事績は別に定めるところにより記録し永久に保存するものとする

附　則

この規則は昭和四十六年八月二十二日より施行する

米沢有為会執行部門の業務分掌規程

―定款細則第一条規定の部門に関する業務分掌―

（平成十九年六月三十日制定）

一、総務部

1　当会の運営、管理に関する庶務的業務

①　総会、理事会、評議員会等、当会の機関会議開催に関する準備と設営

②　当会機関会議の議事録の作成

③　当会の運営に関するその他の庶務的業務

④　当会の運営に関する庶務的管理業務

2　所管官庁へ提出の公的関係書類の作成

3　定款及び諸規則の改訂

4　「会員原簿」の管理

5　「会報」及び「会員名簿」の作成と発行

6　「会誌」及び「会員名簿」関係の本部事項掲載原稿の作成

7　総務部長は議長の指示に従い機関会議の司会

8　各部との調整連絡業務

9　当会の会計に関する業務

①　収支出納業務

②　支部を含めた会計の統括

10　当会の経理に関する業務

①　年次予算、決算書の作成

②　経理諸表の作成

11　資産運用の効率化業務

二、教育部

1　奨学金貸与生に関する業務

①　貸与学生の募集に関する業務

②　貸与学生の一次選考に関する業務

2　興譲館寮生の募集と選考に関する業務

3　郷土学生の育英に関する支援業務

4　郷土学生の表彰に関する業務

三、産業部

1　郷土の産業振興に関する支援業務

2　郷土の産・学・官共同プロジェクトへの支援業務
3　郷土の産業振興功労者の表彰に関する業務

四、文化広報部
1　学術・文化講演会開催に関する業務
2　「会誌」の編集と発行
3　当会のＰＲ誌資料の発行（現「しおり」等）
4　当会のＩＮ「ホームページ」の作成と運用

五、組織部
1　会員の拡充に関する施策と実行業務
①　郷土の学校同窓会への組織的連携の推進
②　会員増加施策立案と実行業務
2　当会の組織的充実と活性化施策の立案と実行業務

六、婦人部
1　女性会員に関する業務
①　各支部の女性会員との交流を密にして会の活性化を図る
②　郷土の旧女子高等学校同窓会への組織的連携の推進

七、企画部
1　当会の中長期に亘る事業、業務計画の策定
2　当会全般の活性化へ向けての諸施策案の策定

本部・各支部事務所等所在地

本部
〒一八二－〇〇〇四
東京都調布市入間町一丁目三六番地
東京興譲館内
電・ＦＡＸ（〇三）（三三〇九）三三〇二

東京支部
〒一八二－〇〇〇四
東京都調布市入間町一丁目三六番地
東京興譲館内
電・ＦＡＸ（〇三）（三三〇九）三三〇二

米沢支部
〒九九二－八五〇二
山形県米沢市金池五丁目二ノ二五
米沢市役所内　秘書広報課
電（〇二三八）（二二）五一一一　ＦＡＸ（〇二三八）（二二）五五四一

仙台支部
〒九八〇－〇八〇二
宮城県仙台市青葉区二日町六－一三－四〇二
㈱エムアイティ建築研究所
電（〇二二）（二一五）〇二三六　ＦＡＸ（〇二二）（二一五）〇二五二

京都支部
〒六二二－八〇二一
京都府京都市伏見区桃山町伊庭二一－九
齋藤昭一
電（〇七五）（六〇一）五四六五

北海道支部
〒〇六〇－〇〇六一
北海道札幌市中央区南一条西八丁目　ＴＧ札幌ビル７Ｆ
㈱日建社内　田村邦夫
電（〇一一）（二七一）二五八五

米沢有為会設置施設

東京興譲館　〒182-0004　東京都調布市入間町１－36
電・ＦＡＸ（03）（3309）３３０２

仙台興譲館　〒980-0874　宮城県仙台市青葉区角五郎２－６－21
電（022）（222）４７９０

我妻榮記念館　〒992-0045　山形県米沢市中央３－４－38
電・ＦＡＸ（0238）（24）２２１１

後記

▼今年は米沢有為会創立百二十周年という節目の年に当たり、会誌も記念号となります。記念事業もたくさんありましたので、できるだけ記録に残したいと編集しました。大変遅れましたが第五十九号記念号をお届けいたします。

▼一月からNHK大河ドラマ「天地人」が放映され、米沢は大変な賑わいでした。伝国の杜で開催された天地人博も当初予想の入場者数三〇万人を大幅に超えて五〇万人に達するとのことです。上杉神社や城史苑周辺は毎日が元日参りのような人出でした。米沢でないような錯覚を感じました。

▼米沢の街づくりの大恩人として尊敬してきた直江兼続が全国にその名をとどろかせ、米沢をはじめ新潟、福島などゆかりの地の史跡が整備されました。米沢ではその史跡を巡る循環バスが運行されました。最近歴史ブームで、特に女性のファンが行動的で目立ちます。直江兼続の盟友前田慶次はドラマには出ませんでしたが、全国の慶次ファンが堂森善光寺を訪れています。今年米沢には、夫妻を顕彰したものが三点あることを再確認しました。林泉寺の直江夫妻の墓、常慶院の仙洞院夫妻の掛け軸、善光寺の長井時広夫妻座像です。それぞれ女性の活躍が認められた証です。

▼記念事業祝賀会は、約一八〇人の参加で盛大に行われました。また有為会ゆかりのご子孫の方々にも参列いただき感謝の心で交流できました。当日は寄宿舎修抜式、伊東忠太のビデオ鑑賞、記念講演、翌日から一週間チャリティおきたまふるさと展と担当の東京支部にはお世話になりました。

▼今年は政権交代もあり、大きく見直しが行われています。有為会も百二十周年を機に公益法人化を始め育英教育産業振興事業や財産管理の見直しを図り時代に即した運営を展開しなければなりません。会員皆様のご協力を切にお願いいたします。

（編集担当　梅津　幸保　記）

新年明けまして おめでとうございます

旧年中は格別のお引立を賜わり
厚く御礼申し上げます
本年も相変わらず倍旧の
ご愛顧の程お願い申し上げます

平成二十二年　元旦

2010 寅

株式会社 本多建設

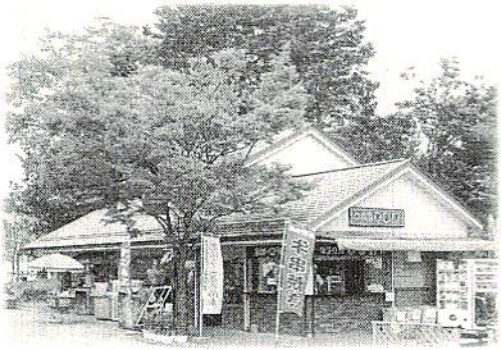
〒992-0047　山形県米沢市徳町7-52
TEL 0238 (21) 5100　FAX 0238 (21) 4458
URL : http://hondahomes.com

割烹

志ん柳

個室５名様から100名様まで

〒992-0045 米沢市中央一丁目14-4
電　話 0238－21－1234



米沢牛串焼き

玉こんにゃく

米沢ラーメン

全国唯一!!

うこぎソフト

その他いろいろ

上杉城史苑すぐ隣り！

べに花庵

住　　所/〒992-0052 米沢市丸の内1-1-22
電話番号/0238-23-6310
営業時間/9:00から17:00まで　定休日 / なし

漬物はやっぱり 雪国の米沢のが一番

一度あがってみてください!!

創業50年の専門店　窪田の後藤商店

お申し込みは最寄りの取り扱い店または当店まで

自然の味をそのまま手づくり

有限会社 **後藤商店**

〒992-0003　山形県米沢市窪田町窪田413-3

☎**0238-37-5378**(代)

FAX 0238-37-6345

http://www.marsho.jp

E-mail: info@marsho.jp

後藤喜彦　東京興譲館寮　平成12年卒

◎宅配便でお届けします。(関東方面630円)

(送料は別途申し受けます)

お支払いは代金引替、郵便振替等で

No.	規　　格	価　格
A	おみ漬(８袋)	3,150円
B	青菜漬(８袋)	3,150円
C	おみ漬・青菜漬詰合(８袋)	3,150円
D	赤かぶ甘酢漬(８袋)	3,570円
E	おみ漬(３袋)青菜漬(３袋)赤かぶ(２袋)	3,255円

他にミックスにも応じます。

米沢では米沢駅２Ｆアスクでも販売しています。

グルメからお土産まですべて揃う
米沢観光のキーステーション

ごきげん 食彩倶楽部
米沢牛をはじめ、
物産品が満載!!
●ご希望の方に上杉城史苑商品
カタログをお送りいたします。
http://uesugijoshien.jp

上杉城史苑
代表取締役 内藤文徳
㈱上杉コーポレーション
〒992-0052 米沢市丸の内一丁目1-22
TEL.0238-23-0700 FAX.0238-21-8252

伝統の味を守り続けて
百五十余年
鯉料理&
スローフーズ
鯉の宮坂

黒毛和牛
赤ワイン煮
米沢牛惣菜
地産創食
新ブランド
宮香本舗(みやこうほんぽ)

株式会社 タスクフーズ 鯉の宮坂・宮香本舗
TEL 0238-22-7188 FAX 0238-21-2309
URL: http://www.omn.ne.jp/~m-carp/

地元に愛されて30年。
皆様の「大切」を私たちの「大切」に。

東北警備保障株式会社

山形県公安委員会認定第6号
山形県米沢市アルカディア1丁目808-17
電話　0238-29-0005
FAX　0238-29-0015
URL http://www.next-alert.co.jp

営業品目
・機械警備　・常駐警備　・交通誘導業務
・イベント警備（上杉まつり・花火大会など）
・施設管理（米沢市総合公園　指定管理者など）
・清掃業務（法人契約）

IPを使ったホームセキュリティシステム（最新式）導入！
体験キャンペーン実施中！！

株式会社
羽陽印刷

米沢市中央3丁目9－22
TEL (0238)23-0467㈹
FAX (0238)23-0480

創業四百十余年
伝統が生きる
米沢の銘酒

東光
とうこう

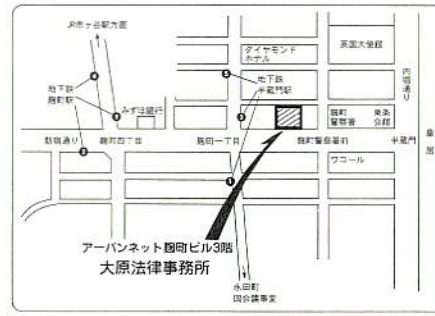
醸造元
(株)小嶋総本店
山形県米沢市本町二丁目二番三号　東町上通り
TEL(〇二三八)二二三—四八四八
FAX(〇二三八)二二三—四八六三

URL http://www.sake-toko.co.jp/
Email info@sake-toko.co.jp

阪急阪神第一ホテルグループ
東京第一ホテル米沢
山形県米沢市中央1-13-3　〒992-0045　TEL 0238-24-0411（代表）
URL http://www.tdh-yonezawa.com　E-mail front@tdh-yonezawa.com
ブライダル・ご宿泊情報は　東京第一ホテル米沢　検索　click here!

OHHARA
LAW
OFFICE
大　原　法　律　事　務　所

ご案内図



所属弁護士　　小田切　登

東京都千代田区麹町１丁目６番地２　アーバンネット麹町ビル３Ｆ　〒102-0083
電話　東京　03（3239）1311　FAX　03（3239）1811

3rd Floor, Urbannet Kojimachi Bldg., 6-2, Kojimachi 1-chome
Chiyoda-Ku, Tokyo, 102-0083 Tel. 03 (3239) 1311 Fax 03 (3239) 1811

Costume

あなたはあなたらしく・・・。
特別な日に、誰もが憧れるのは、最高の自分らしさを引き出してくれるドレスをまとうこと。
そんな思いを受け止めて、コスチューム選びから、コーディネートまで。
ほかの誰でもない、あなたらしく輝演出のお手伝いをいたします。
豊富なデザインの中からお好みのドレスをお選びいただけます。

☎でのお問い合せは☞ 0238-22-1238

www.grand-hokuyo.com

グランドホクヨウ米沢

山形県米沢市金池2丁目3-7/ TEL:(0238)22-1238/ FAX:(0238)21-1067

明治二十二年十二月十四日創刊
昭和二十七年八月二日復刊
平成二十二年十二月二十二日発行

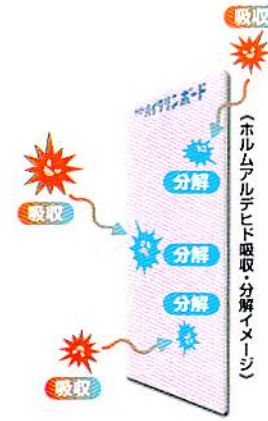
発行　社団法人　米沢有為会
会長　下條泰生
編集　文化広報部長　梅津幸保
東京都調布市入間町一丁目三十六番地
電話・FAX　〇三―三三〇九―三三〇二

印刷　㈱羽陽印刷
山形県米沢市中央二丁目九―二二
電話　〇二三八―二二―〇四六七

日本全国、ホルムアルデヒド退治の「虎の巻」。

タイガーハイクリンボードはシックハウス症候群の主な原因物質のホルムアルデヒドを吸収・分解するので日本全国、安心家族の「虎の巻」です。

◎新築・リフォーム直後や新しい家具などから発生するホルムアルデヒドを短時間で吸収・分解します。
◎一定の条件下で厚生労働省指針値のホルムアルデヒド濃度0.08ppmを下回る0.05ppmの数値を実現しました。
◎ハイクリンボードの「壁材」や「天井材」は物理的な吸着と異なり、ホルムアルデヒドを化学的に吸収・分解するため再放出されません。
◎タバコの煙に含まれているアセトアルデヒドの低減効果も併せ持っています。
◎不燃性、施工の容易性など、せっこうボードの数々の優れた性能をそのまま保持しています。



（ホルムアルデヒド吸収・分解イメージ）

YOSHINO
安全で快適な住空間を創る 吉野石膏

［本社］東京都千代田区丸の内3-3-1 新東京ビル 〒100-0005
http://www.yoshino-gypsum.com/
取締役社長　須藤永一郎